
キセキの錬金術師 in ネギま

ruin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キセキの錬金術師 in ネギま

【Nコード】

N0143T

【作者名】

ruin

【あらすじ】

ruinの書いていた物語の主人公、相沢祐依が今度は、ネギまとよく似た世界に飛ばされました。原作をやっぱり、壊していきます。

作中には、作者による解釈や設定が含まれています。

0話（前書き）

え、性懲りもなく、また始めてしまいました。

今回は、既に述べているように、ネギまのお話です。

作者の前作、キセキの錬金術師 イン リリカルなのは の延長線
上と言っのか、なのはの世界を経た後の、物語です。

0話

side 祐依

・ドサッ

「痛く、今度は一体どこかしら？」

服の汚れを払いながら、辺りを見渡すと、どうやら深い森の中のようなのだ。

植物などがよく茂っていて、あまり人の手が加わっていない、どちらかと言うと、原生林に近い感じ。

「うーん… 食料も豊富にあるし、最低限生きてくだけなら、平気よね？」

かと言って、何時までもここにいても何も始まらないので、移動しようとしたら、

・バキバキ

木が折れるような音が、背後から…

・ドン

何か重いものが落ちるような音が…

後ろを振り向くと…

-ギヤアアアアツ

立派な龍種がいました。

0話（後書き）

少々ネタバレになるか、わかりませんが、今作は、既に、主人公はなのはの世界だけでなく、他にも多数の世界に行ったことがある設定です。

なので、物語中に他の物語のネタなどが出てくると思います。

とりあえず、現時点で、元いた世界となのはの世界を含めて、とある魔術（科学）の世界と、他数種類の世界を巡っています。

とある世界は、ある技術が使いたいがために。

とある魔術の禁書目録を先に書こうと思ったのですが、小説を貸した友人が、被災地の方へ行っているので、先にこちらを書こうと思います。

人物紹介

人物紹介

名前 相沢 祐依

よみ あいざわ ゆえ

詳細はキセキの錬金術師の16話あたりまでと人物紹介と

キセキの錬金術師 in リリカルなのはの人物設定をご覧ください。

追記、

多数の世界を巡り、色々なモノを知り、習得しています。

名前 ルインフォース

容姿 リインフォースの髪が黒く、瞳は蒼になった姿。

リリカルなのはの世界で、祐依と契約し、仲間になった。

『暁の魔導書』という、管制人格であり、祐依のユニゾンデバイスでもある。

祐依に劣るが、多数の魔法、魔術を使うことができる。
単体でも十二分に戦える。

ユニゾンすると、

髪がより黒く… 光を一切反射することなく、吸収しているかのよう
うな、暗黒と言っても過言ではない。

瞳はユニゾンすると何故か金色に染まる。

若干マスター至上主義。

多大な恩があるため、祐依を物凄く慕っている。

祐依のデバイスのゼロと共に、補助または、裏方に回ることが多い。

人物紹介（後書き）

随時更新していきます。

お便り待っています。

1話（前書き）

基本、戦闘服で活動しています。
黒い外套に仮面のセットです。

1話

side 祐依

「え？」

振り返るとそこに涎をたらし、こちらを注視している龍が…

・ギヤアアアアアアアアアア！

「不味い!?!」

私はとつさに逃走に移る。

「追ってくる〜」

当然、龍は追ってくる。

数分逃げたが、無駄だった。

いつの間にか、複数体に追われていた。

そのまま、囲まれる。

「しつこい！<凍牙、其は決別の剣と化し我が仇なす敵を切り伏せよ！蒼剣、フリジットコフィン!!!>」

氷の刃が、上空から、龍を貫く。

龍を全滅させ、とりあえず、ルインと龍を食料や材料として捌いていると、

「そこの方」

「ん？」

武器や杖を持った数人の男性たちが、森の奥から出てきた。

「あなた方が、龍を？」

「あ！もしかして、殺しちゃダメだった？襲われて、返り討ちにしちゃったんだけど……」

一応、警戒するが、

「いえ！この龍たちが、最近この森に住み着いて、私たちも困っていたんです」

一瞬この人たちと関係があるのかと思っただが、関係はあるようだが、良い関係じゃないようだ。

「お礼と言っただけなんです、私たちの村に来てください。ささやかですが、お礼をしたいのですが」

男性たちは武器を下げ、そう言って来る。

「どつする？」

「ここは、情報収集を兼ねて、受けておいた方がいいでしょう。彼らなら、よほどのことがない限り、襲われても私一人で十分対処できます」

ルインと小声でやり取りをし、誘いに乗ることに。

「わかりました。ですが、二つほど、いいでしょうか？」

「何でしょう」

「一つは、この龍たちを捌くのを手伝ってください。手伝って下されば、半分差し上げましょう」

「構いません。むしろ、ありがたいことです」

男性たちは了解の意を見せ、捌くのを手伝ってもらった。

もともと、捌くのは、私とルインで、男性たちには、物ごとに分けてもらった。

捌き終わり、私の取り分はさつさと、倉庫にしまつ。

「では、二つ目ですが、私たちは事故でこの森にやってきました。この辺りの事などを教えてもらえませんか？」

「え？ わかりました。それは、村に行ってからでもいいですか？
落ち着いて話したいので」

「構いません」

村に先程の元龍を運ぶと、村人が全員集まってきた、お祭りのような騒ぎに……

龍の肉や、村で採れた野菜などを調理し、宴会になった。

その日は、落ち着くことが出来ず、村長さんの家の一室を借り、一晩明かした。

次の日、村長さんとその他情勢に詳しい、都市から戻ってきたという、数人と話し合いの席を設け、色々と話をする。

纏めると、次のようだ。

この世界は、通称魔法世界と言っらしい。

旧世界と呼ばれる、世界があるらしい。

旧世界は、地球と呼ばれるらしい。

旧世界出身の人がいて、話を聞くと、魔法使いなどがいるが、私の知る地球とさほど違いはないようだ。

魔法世界は、現在、ヘラス帝国とメセンブリーナ連合が戦争を始め
たばかりらしい。

他にも、魔法使いについて、話があったが、存在がどうでもよかつ
たので、聞き流していた。

話し合い後、私たちは、まだこの近くに魔獣がいるらしいので、狩
りに出かけた。

食材や、材料に捌き半分ぐらひは寄付をした。

数日村に滞在し、困り事を解決したりしていた。

村人の病気や怪我を治したり、農業など、一次産業のアドバイスを
したり、少しでも、生活が良くなるように手助けをした。

その後、色々な村々を巡り、そういつたことを繰り返す行い、
時には、魔法を使える人に魔法の基礎を教えてもらったりしている
と、

黒き月が、各地の村などで、かなりの人気者?になってきた。

特に、一部の小さな村では、崇められるようになってしまった。

そんな生活を過ごしていると、連合や帝国の使者が時折やって来る
ようになった。

だが、連合は、'従え'と命令するだけなので、その度にチカラを使
い、逃がっている。

それに引き替え、帝国はキチンと交渉をしてくるが、私たちはこれまで、何にも従うことなく、属することもなく、活動してきた。大きな組織に属すれば、それだけ動きにくくなる、と何度も断っている。

帝国はしつこくなく、潔く諦めてくれるが、必ず、また来ます。と言っていく。

何より、私が【黒猫】の異名を持つので、誰にも従うことはない。利用することがあっても、利用されることは無い。

時が過ぎ、

村が襲われることが多くなってきた。

徴兵のため、兵糧のため、

そういった理由で、襲われる村に遭遇すると、私たちは、敵を全て倒してきた。

そのため、軍部のお偉いさんは、黒き月に懸賞金をかけるようになったが、

村人や、都市に住む人々、私たちの活動を知っている兵たちは、と言うより、連合のお偉いさん以外、基本、私たちを見なかつたことにはしてくれる。

そのため、懸賞金が上がっても、よほどのことがない限り、狙われることはない。

むしろ、周りがそいつらを非難するため、狙おうとする輩はいない。デマの情報が上がっても、全く広がらない。むしろ、その人が疑われる。

「普段の行いって大事なんだなあ」とつづく。思う。

時折、私たちは、戦場にでる。

私たちを殺そうとして、周りを巻き込む奴らには、容赦なく返り討ちにしていく。

そんなことをしていると、私たちに二つ名がつき始める。

【黒き月】は元々名乗っていたので、あまり関係ないが…私には【黒猫】【使者】【賢者】などなど…他のメンバーにもそれぞれついていた。

そんな生活を続けていくが…

1話（後書き）

祐依の基本の話合いの方針は相互理解の‘対話’ですが、一方的だったり、周りの事を考えていない人相手の場合は、必要であれば、‘OHANASHI’です。
ですが、面倒な時は逃げます。

お便り待ってます。

2話

side 祐依

帝国側が優勢で、このまま終戦するかとおもったら、なにやら、連合側に、少数精鋭？の団体がつき、形勢をひっくり返しつつあるようだ。

私たちは、この世界に来た頃から変わらず、貧しい村などを巡り、援助をしていたが、

ある日、河原で、依頼された夜行性の魔獣を狩るために、野営の準備をしていると…

「やい、テメーらか、戦争を利用して、村人とかを騙して、戦争を邪魔しているってやつは」

赤毛のガキが率いている数人が、絡んで来た。

赤毛のガキにロープを被っているやつ、刀を持っている男性、少年の四人だ。

とりあえず、心当たりがないので、無視し、野営の準備を続ける。

「ちょっと、そこ持ってきてくれる？」

「はい」

準備を進めるが、

「やいこら！ 無視してんじゃねーよ！」

再度、絡んできた。

騒がれて、魔獣に警戒されたら、面倒なので、

「なんでしよう？ 私たちには一切心当たりがないのですが」

声だけは返しておく。

当然、準備する手は止めない。

「嘘ついてんじゃねー！！ お前たちだろ！ 戦争の邪魔をしてるのはー！！」

「いえ。人違いです」

バツサリ否定する。

こいつらの目的がわかったので、テキトーに流す。

「お前らが黒き月だろー！！」

「いえ。違います」

「俺らが教えてもらった特徴とお前が一致してんだよー！！」

「いえ。違います」

もう既に話は聞いていない。

「だあ〜!!」

「落ち着け、ナギ」

赤毛のガキを剣士が止める。

「あなた方が黒き月というのは調べてあります」

今度は、ローブが話しかけてくるが、

「いえ。違います。これでよし。っと。あとは…川で魚でも採ってこよっか」

野営の準備が出来たので、食料調達に行くためにスルーするが、

「テメーいい加減にしろよ!!」

とつとつ赤毛がキレた。

「闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて、敵を喰らえ。白き雷
」

赤毛が、魔法をいきなり？放ってきた。

「はあ〜」

・パチン

ため息をついた後、錬金術で地中の鉱物を避雷針へと錬金する。

・ダアアン！！

電撃が避雷針に引き寄せられ、避雷針に直撃する。

「な！？」

四人は驚く。

「刃以て、血に染めよ。穿て！ ブラッディダガー！」

ルインが詠唱し、ダガーを四人の回りに生成する。

が、敵もこの程度で、負けはしない。

魔法障壁や刀で防ぐ。

「いきなり、何するんですか？」

私はあえて質問する。

「テメーがちゃんと答えねーからだ！俺たちはテメーらを倒すように言われて来たんだよ」

「それは、連合ですね」

とりあえず、いきなり魔法を放ってくるバカなので、からかっても不利益にしかならないので、今度はキチンと会話のキャッチボールをすることに。

「ええ、そうです。あなたの方が、戦争を荒らしまわっていると聞きまして」

「はああ、まだいたのか…」

「それはどういう意味で？」

「私たちは襲われた時にしか手は出していない。それに村では、助けている方よ」

「答えが若干違う気がするのですが」

「ああ、ごめんなさいね。確かに私たちには連合によって、懸賞金をかけられたわ。でも、今まで殆ど襲われたことはないわ」

「どういうことだ？」

「それは、今までに私たちが行ったことを大半の…いえ、一部を除いた軍部の人以外知っているからですよ」

「答えになってねーぞ!」

「近くの村や町の住民に【黒き月】や【使者】【賢者】のことを聞いてごらんさい。それで、答えがわかるはずよ」

「はあ?」

「今回の依頼は失敗ね。さっきの轟音で魔獣が逃げちゃったわ」
会話を打ち切り、ルインに話しかける。

「そのようですね。依頼主に謝罪に行きましょう」

「そうね。じゃあ、サヨナラ」

足元に毎度お馴染み、煙玉を投げ、煙幕を張り、転移する。

「あっ！ 待ちやがれ！」

そんな声が転移する間に聞こえたが、当然スルー。

2話（後書き）

紅き翼の登場です。

連合の命令で、黒き月の討伐にやってきました。

連合の軍部の上層部は黒き月をかなり、嫌悪しています。強力な戦力を持つ上に、村人たちから物凄い支持があり、連合のいうことを全く聞かない。

そんなこんなで、黒き月を目の敵にしています。

お便り待っています。

3話

sideナギ

よう。

俺たち紅き翼が、連合側に入ってから、連戦連勝！

ある日、お偉いさんに戦争の邪魔をしてるっつう黒き月を倒せって命令がきた。

俺たちが目撃情報とかで、ようやく探し当てると、奴らは、野営の準備をしてやがった。

こっちが尋ねても、ふざけた答えしか、しやがらねえ。

頭に来て、魔法を放ったら、仮面をつけた方の奴が、手を地面につけたと思ったら、

突然、金属の塊が出来て、そっちに魔法が誘導された。

俺たちが驚くと、もう一人の奴が、見たこともねえ魔法を使って攻撃してきやがった。

俺たちは、何とか防いで、仮面の奴が尋ねてきた。

その後、アルが中心に話を聞いたが、訳のわからねえ答えしか出さなかった。

詳しく聞くころと思つたら、逃げられちゃった。

「ナギ、近くに村があります。彼女らの話からすると、その村から何か依頼されたようです。もしかしたら、その村にいるかもしれない。行ってみましょう」

アルがそう提案してきた。

皆に聞いてみたが、賛成だったから、行ってみるとする。

村に着くと、手分けして、すぐに情報収集するが、どうやら、すでに立ち去った後だった。

「くそ！ 逃げられた」

「ですが、ナギ。村人から黒き月の話を色々聞きましたよ」

「あ？」

アルたちは何か情報を手にしたらしい。

「彼女が言っていたでしょ。村の住人に【黒き月】 【使者】 【賢者】
について聞け、と」

そっぴや、そんなこと言ってたな。

「黒き月はわし達が貰った情報と、村人たちの話が全く違うんじゃない」

「ああ、私も同じだ。村人たちは、全員、黒き月に感謝し、慕っている」

「どういふことなんだ？」

情報が違う？

「おそらく、私たちが貰った情報が嘘だと」

「アル？」

「村人や偶然この村にいた旅人の話をまとめるとですね、黒き月は、今までに貧しい村を中心にあらゆる支援をしているんですよ。病気の治療から、治安維持、農業などの向上……など、村人の為に無償で行っているんですよ」

「あ？　じゃあ、いい奴じゃねえか」

「これは、旅人に聞いたんですが、確かに黒き月の全員に懸賞金がかかっているそうです。その理由は、彼女たちは、高い戦力や高い技術を持っている。それを利用しようとした連合が彼女らを引き込もうとした。それを黒き月は拒否。それだけならいいんですが、徴兵や兵糧の為に村や町を襲った時に彼女らは、村人や町人の為に徹底抗戦したみたいなんです。それを知った軍部が黒き月に懸賞金をかけたみたいですね」

「ってことは、あいつらは全部、村とか町の人の為に行動してるだけじゃねーか」

「私たちが貰った情報は最後のところの結果だけのようですね」

「念のために他の村に行つて、聞いてみるか？」

「ああ…」

他の村に行つても結果は同じだった。

多少、してもらったことが違つたが、大して差はなかった。

「だあ！ 俺たちは、騙されたのか！！」

情報収集が終わつて、アルから話を聞くと、そう叫んだ。

「でしょうね。黒き月は、数百人相手でも正面から立ち向かえるらしいですから。連合としては、目障りだったんでしよう」

「どうするんだ、ナギ？ このまま追うのか？」

詠春が尋ねてくるが、

「おう！ このまま引けるか。だけど、あいつらを倒して、仲間にする！」

「はあ？」

詠春が呆けた声を出す。

「あいつらが気に入った。仲間にしてえ！」

詠春が、頭を押さえているが、

「そう言つと思つてましたよ。足取りは追っていますよ」

アルが足取りを追ってくれたから、あいつらを見つけて、再戦して仲間にしてやる！

3話（後書き）

紅き翼と再戦フラグが立ちました。

4話

side other

とある酒場。

そこには、二人の人物がいた。

「対象は・・・この四人の男。それと、こいつらだ」

「フン・・・なんだ。ガキじゃねえか。それと、仮面をつけた奴と女じゃねーか」

「子どもと思つて油断していると痛い目を見るぞ。オステイア回復作戦の失敗の主因はこいつらだ。こつらの二人組は、軍数百人を相手に全員を殺さずに制圧するほどだ。帝国も連合も手を焼くような奴らだ。すでに精鋭で組織された討伐隊も送つたが、悉く返り討ちだよ。君が望むなら部下もつけよう。正規兵ではなく傭兵・賞金稼ぎになつてしまつが・・・」

「いらねーよ。一人で充分だぜ。任せときな。」

「四人組の紅き翼は、今、噂だと、黒き月に接触しようとしているらしい。幸い、黒き月は、今丁度この街のすぐ近くの村で目撃情報があつた」

「なら、初めに黒き月に行くか」

金髪で筋肉隆々の褐色肌の男、ジャック・ラカンが席を立った。

s i d e 祐依

最近、紅き翼と名乗る四人組が、私たちを追っているらしい。
なので、村や町の住人に協力してもらって、様々な嘘情報を流して
もらっている。

大抵は、違う方向や、違う村に行ったなどだが…

今、とある村で、お礼に野菜を貰ったので、手持ちの食材も使って
鍋の準備をしている。

せっかくなので、食事が好きなセイバーと料理が得意なアーチャー
を召喚し、一緒にできるのを待っている。

そんな中…

- ヒュッ

- キン！

突然大剣が飛んできて、私が、倉庫、から、d e m i s s e を取り出
し、弾く。

「食事中失礼」俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン!! いった
ちよや-」

その瞬間、私とセイバーとアーチャーが動いた。

「?リンク・博麗霊夢・ロード?宝符「陰陽宝玉」」

「?風王鉄槌?」
ストライク・エア

「I am the bone of my sword《我が骨
子は捻じれ狂う》?偽・螺旋剣?!」
カラドボルグ

巨大な霊力弾が、
暴風が、

矢（剣）が、襲撃者に問答無用で迫る。

「-ろ、があ!?!」

直撃し、吹き飛ばされる。

「あら? 生きてるわね」

とりあえず、マグダラの聖骸布で縛り、顔を残して、首より下を埋
めておく。

「できましたよ」

ルインが鍋を見てくれたようだ。

「じゃあ、ご飯にしましょうか」

「はい」

「ああ」

食事後、情報を得るために襲撃者を起こすことに。

「起きなさい」

髪の毛を一本ずつ引っ張りながら、起こす。

十本ほど抜けたところに、

「う…」

「しっかりしなさい。どうして私たちの食事を邪魔しようとしたの？」

「ああ？ 依頼だよ。お前らを倒せつてな」

「それだけで、食事の邪魔をしたの？」

「おう」

おくびもなく、言われ、腹が立ったので、前髪を毛根から一気に数本ずつ抜いていく。

「ちよっ 待て!!」

髪の毛を躊躇いなく抜いていく私に少々慌てながら、待ったをかける。

「何よ？」

髪の毛を掴みながら答える。

「飯の最中に攻撃したのは謝る!!」

謝罪を一応聞けたので、抜くのは一旦ストップする。

話を聞き、掘り出して、拘束を解いていると、

「やっと、見つけたぞ!!」

紅き翼がやって来た。

「おっ、丁度いい。お前、俺と勝負しろ！」

ジャック・ラカンが紅き翼に勝負を挑んでいった。

その後、ジャック・ラカンと紅き翼の赤毛と戦闘になったので、私たちは、片付けを済ませ、去る。

4話（後書き）

ジャック・ラカンの襲撃に対して、
祐依は襲撃されて攻撃を。

セイバーは食事を邪魔されそうになって、攻撃を。
アーチャーは料理をダメにされそうになって、攻撃を。

そんな訳で、一斉攻撃でした。

お便り待ってます。

5話

side 祐依

噂によると、ジャック・ラカンが紅き翼に入ったらしい。

特に関係ないので、私たちは被災地などを訪れ、復興に協力していた。

最近、私たちに向けられる刺客が増えてきた。

賞金稼ぎなどではなく、明らかにその筋の人たちである。

そして、どうやって探し当てるのか不明だが、紅き翼による勧誘がしつこくなってきた。

「今日こそ、仲間になってもらおうぞ！」

「はあ、しつこいわね」

「俺たちが勝ったら、仲間になれ」

『ルイン、策を使うわよ』

『わかりました』

「私は、黒き月をやってるわ。新たに所属するつもりなんか無いの

「よ」

「別にそれくらいいいじゃねーか」

「それに、私は黒猫っていう二つ名もあるのよ。組織に属しているあなたたちと一緒にいられないわ」

「じゃあ、今から勝負して、俺たちが勝ったら、協力しろ」

「ん〜、いいわ。けど、戦うのは一回よ」

「おう!」

その後、広い場所に移動し、

「じゃあ、かかってきなさい」

赤毛と筋肉バカがかってくる。

身体を強化し、攻撃を全ていなす。躲す。
数分つづけた後、

「ふう。降参よ」

「な!?!」

「まだ、倒してねーぞ!」

私は降参する。

2人は不満たらたらだが、戦闘は終わる。

「不満があるけど、これからよろしくな」

黒き月が、紅き翼と協力することに。

数日後、グレートブリッジ奪還作戦に駆り出された。

連合に手を貸すのは、癪だが、約束を守るためにやって来た。

「？リンク・村紗水蜜・ロード？」

「おい、何する気だ？」

ナギが声をかけてくるが、

「ん？ さっさと終わらせる為にね」

水難事故を引き起こす程度の能力で、大津波を起こし、グレートブリッジに津波に直撃させ、大部分が破壊される。

「ちょ！？ なんだあれ！？」

「私の力の一つですよ」

その後、何回か、津波が直撃し敵の戦力を潰していく。

「後は、任せましたよ」

「おい！」

後ろで何か叫んでいるが、無視して、最寄りの紅き翼のアジトに行く。

グレートブリッジ奪還作戦は成功したらしい。

どうやら、帝国側は津波による被害が大きかったらしく、結構あっさり奪還に成功したらしい。

次の日に私は手紙を残して、消えた。

『今まで、お世話になりました。探さないでください。【黒猫】』

ことノア・ミナツキ』

『追記、戦うのは以前に一回と言ったので、約束は果たしました』

5話（後書き）

グレートブリッジ奪還作戦に一応協力しました。

ノアは、約束は守りました。
戦うのは一回と。

お便り待っています

6話

side 祐依

グレートブリッジ奪還作戦は確かに連合側だったが、紅き翼が初めは戦線から離れた場所に配置されたので紅き翼が何か言わない限り、バレないだろう。

ここは、紅き翼が連合のお偉いさんたちにまだ、若干疎まれていたのが幸いした。

なにより、本来自然災害である津波を誰が私が出したと疑おうか？

いや、疑わないだろう！

と言う訳で、再び自由になった

因みにグレートブリッジは津波の所為で大半が崩壊し、事実上使用不可能らしい。

ざまあ！

紅き翼との約束を果たし、私たちは、刺客を生け捕りにして、情報を聞き出して、依頼者たちを殺っています。

今日も…

「さあ、不幸を届けに来たわ」

「待ってくれ！ 金ならいくらでも払う！…！」

「残念ね。私は私の心情に肩入れしているだけだから」

・ドオン

Misfortuneで頭を撃ち抜く。

「さて、こいつの裏は？」

「大丈夫です。全て、調べてあります」

「じゃあ、次に行こうか」

そんな感じにやっていると、ある程度の関連性が浮かび上がってくる。

「コスモエンテレーキア
完全なる世界？」

「はい。依頼者などの裏まで、洗いざらい調べたところ、その組織が」

「その組織については？」

「いえ、まだ、そこまでは… 下っ端ばかりです」

「うーん、じゃあ、しばらくその組織を探ってみよっか」

「はー」

色々探ってみると、出るわ出るわ。
帝国や連合のそこらじゅうだ。

「どう思うっ？」

「何か、あるんでしょう。今は戦争を長引かせようとしているみたいですね」

「うーん… 紅き翼に聞いてみよっか。一応、この世界の人だし、何かわかるかもしれないし」

「わかりました」

「じゃあ、行きましようか」

スキマを開いて、紅き翼の下へ。

スキマを出ると、

「おわ!？」

「お久しぶりです」

全員が驚いていた。

「ん？ 新顔？」

「ああ、新しく入った。ガトウだ」

「ガトウ・カグラ・ヴェステンバーグだ」

「これはどうも。黒き月の【黒猫】こと、ノア・ミナツキです」

「ルインと申します」

「あんたらが、黒き月か。噂は聞いてるよ」

「そうですね。ところで、紅き翼に話があるんだけど」

「何でしょう？」

「コスモエンテレイア完全なる世界って知ってる？」

「な！？ どうしてそれを！？」

全員が、私たちの登場よりも驚いた。

「知ってるの？ 最近、襲ってくる組織なんだけど」

「ああ、知っているが…」

「よかった。情報をあげるから、知ってること教えてくれない？」

ルインが書類にした情報をガトウに渡す。

ガトウとアルと詠春が目を通していているが、表情を瞬く間に変えていく。

「どっやって、これを？」

「ん？ 襲ってくる刺客を生け捕りにして、依頼主の情報を抜き取って、依頼者を逆に襲撃したら。で、ついでに、洗いざらい調べたら、出てきたのよ」

「この人たちは……」

「ん？ 全員始末したわよ。情報を絞り尽くしてから」

「裏は？」

「それなら、ここに」

ルインがもう一つの先程よりも厚い書類の束を渡す。

三人が絶句している。

「ところで、何処かに向かってたんじゃない？」

「っは！ そうだった。ノアも来てくれるか？」

「戦場じゃなかったらいいわよ」

本国に向かい、

「で？ 何だよガトウわざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「あつてほしい人がいる協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう 主賓はあちらのお方だ
ウエスペルティア王国……アリカ王女」

ん？ ナギが見惚れてるな……

「気安く話しかけるな外衆が。」

ジャックが声をかけたが、一蹴されていた。

ナギと王女とやらが言い争いが始まった。

「ねえ、帰ってもいい？」

ガトウにそう尋ねるが、

「いや、待ってくれないか」

そんな、正直どうでもいい、ことをガトウと話して時間を潰してい

ると、

「こいつは誰じゃ？」

王女とやらがナギに聞いた。

「あ？ えくと…なんだっけ？」

「・・・」

沈黙が流れた。

「はあ… 黒き月のノア・ミナツキです」

「な！？ 主があの黒き月の黒猫じゃと!？」

「ええ。まあ…」

「あの、数百人に数人で立ちふさがり、貧しい者たちに救いの手を差し伸べる【使者】が」

何やら、呆然とされてしまった…

とりあえず、挨拶を済ませ、紅き翼に話を聞くためにアジトへ行き、情報交換をした。

その後、また、協力関係になることに…

一応連絡手段を教えているが、黒猫の私はあまり捕まえられないだろっ…

6話（後書き）

再度、紅き翼と協力関係に。

お便り待っています。

7話

side 祐依

紅き翼と情報交換をした後、再び、情報収集と称して、私たちが狙う刺客を返り討ちにして、依頼主を殺ってます。

今日は、コスモエンテレケイア完全なる世界に関わる施設に乗り込んでます。

忍び込んで、情報を集めていると、

ドカァン！

「あら？ 何処かで爆発でもあったのかしら？」

遠くの方で、爆発の音がしたが、とりあえず無視し、情報収集を続けていますと、

ドオオン！！

「っと！ 今度は此処なの？」

情報蒐集を終え、撤収しようとしたら、今度はこの施設が襲撃？された。

「まあいいかあ。情報も手に入ったし、この騒ぎに乗じて逃げよう」

逃走中に襲撃者を偶然発見し、見てみると、何故かナギとアリカ姫がこの施設を襲っていた。

「……見なかったことにしよう」

アリカ姫がノリノリだったのは、疲れていて見間違えたに違いない。

次の日、紅き翼のアジトを訪れると、詠春がナギに向かって、説教していた。

代表が一応ナギなので、説教が終わるのを待っていたが、なかなか終わらないので、資料を机の上に手紙と一緒に置いておいて、さっさと帰った。

翌日、ガトウから連絡があったが、なんとなく気が乗らなかったの
で、無視して、村々を回った後、大きな街に物資の補給に行くと、

「なあ、知ってるか？ 紅き翼が、反逆したらしいぞ」

「マジで？ ファンだったのに……」

そんな会話を耳にした。

「ルイン。行かなくてよかったね」

「はい。ですが、これが完全なる世界コスモエンテレケイアの策でしたら、私たち黒き月にまで、罪をかけられている可能性があります」

「大丈夫でしょ。今、何もされてないし、私たちの噂は軍部の上層部に広がっても、今まで通り関係ないし。それに、大抵の人は、味方になってくれるし」

「それもそうですね」

その後、世界情勢の情報を集めていると、

「なあ、黒き月も反逆に加担したって本当かな？」

「いや、嘘だろ。どうせ、どっかのお偉いさんが流しただけだろ」

「そうだな。黒き月をお偉いさんは嫌ってるからな」

「やっぱり？ そうだよな。今まで、無償であんなに助けてくれた人たちがするわけないよね」

と、三人組が酒場で話しているのを聞いた。

他にも、色々情報を集めたが、どれも、黒き月に対する悪い噂は信

じられていなかった。

黒き月に対する、噂があったが、予想通り軍部以外信じていなかった。

以前にも似たような噂が流れたが、その後も変わらず無償奉仕を続けていた為、その噂はデマとされたのだが…

無償奉仕の行為がここまで、信頼を得ているとは…
そんなに連合たちは酷かったのだろうか…？

「本当でしたね。軍部以外、誰も信じていませんでしたね」

「ええ。多少楽観視していたけど、まさか、ここまでとは…」

何か、宗教みたく信じられてる。

「いつそ、宗教でも作りますか？」

「いや、止めとくわ。黒猫が教祖の宗教なんていやでしょ？ とりあえず、紅き翼のところでみよっか」

「はい」

紅き翼の下を尋ねると、

「やいこら！ 何で来なかったんだよ！ 俺たち犯罪者になっちまったじゃねえか」

突然文句を言われた。

「いや、なんとなく気が乗らなかったから、村々を回って、復興の手伝いをしてた」

「大丈夫なのか？ 出歩いても？」

「平気平気。黒き月については誰も信じてないから」

「そうなのか？」

「ええ。ですが、紅き翼については、皆さん信じていらっしやいました」

「なんでだよ!？」

「うーん… 日頃の行い？」

「すまないが、アリカ姫が捕まったらしい。助けるのを手伝ってくれ」

ナギたちと、談笑していると詠春が真面目な話をしてきた。

「いいわよ」

二つ返事で了承し、さっさと、救出に向かう。

捕まっているという、夜の迷宮につくと、わらわらと、敵兵が湧いてきた。

紅き翼が突入のため、裏側にまわっている。

「ルイン。アレやってみよ」

「わかりました」

「ユニゾン・イン」

ルインとユニゾンし、髪が光りさえ吸収しているような暗黒に染まり、瞳が金色に染まる。

「闇に染まれ… デアボリックエミッション！」

巨大な光弾が作られ、敵を飲み込んでいく。

あっという間に数が減り、残っているのも、さっさと倒していく。

建物には一切被害はでてない。

その後、ナギ達も無事アリカ姫たちを救出してし、アジトに戻って行った。

7話（後書き）

黒き月は物凄く信頼されています。

以前に冤罪を確たる証拠と共に大々的に公表したこともあり、殆ど
の人が黒き月を信じています。

お便りまっています。

8話

side 祐依

紅き翼のタルシス大陸極西部オリンポス山という所に隠れ家についてきたが、

「何だこれが噂の紅き翼の秘密基地か！どんな所かと思えば・・・掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ」

「何だ貴様無礼であろう！」

「へっへっくん生憎ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

「何い？貴様何者だ！」

何故か、ジャックとテオドラ皇女が子供のようないかい合いをしていた。

「…帰っちゃダメかな？」

「どつでしよう？ 別にかまわない気がします」

ルインと話をしていると、

「さーて姫さん。助けてやったはいいいけどこつからは大変だぜ。連合にも帝国にも・・・あんたの国にも味方はいねえ」

ナギがめずらしくまともな発言をしている。

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で・・・」

最新の調査ではオスティアの上層部が最も、黒い・・・という可能性さえ上がっています。」

ガトウが補足する。

「やはりそうか・・・」

何やら、考えているようだ。

「我が騎士よ。」

「だからその我が騎士って何だよ姫さん。クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

確かに違っているはないが、そこは察してあげようよ。

「もう連合の兵ではないのじゃ。ならば主は最早私のものじゃ。」

「な・・・」

何で？

ナギはアリカ姫にどんな約束をしていたのだろうか？

暴論でないだろうか？

「連合に帝国… そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな。」

「じゃが… 主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

「ん？ 今、私たちまで見たような…」

「世界全てが敵 良いではないか。こちらの兵はたったの9人だが最強の最強の9人じゃ」

「勝手に含まれた!？」

「…ルイン」

「はい」

「帰ろっか」

「わかりました」

勝手に駒に加える暴君?に従うつもりはさらさらないので、勝手に帰ることにする。

私たちは「黒き月」であつて、紅き翼に入った憶えはない。

そもそも、私は【黒猫】誰にも飼われるつもりはない。

ルインと共に転移して、村などを回りつつ、コズモエンテレケイア完全なる世界に関するモノを潰していく。

暫くは、紅き翼に近づかないようにしよう。
度々、連絡が入るが、全て無視していたが、しつこくなってきたの
で、一方的に絶った。

連絡手段が無くなったので、紅き翼はこちらに連絡できなくなって、
やっと静かになった。

s i d e ナギ

「ならば我等が世界を救おう。
我が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ」

「・・・」

おもしれー！
やってやるっじゃないか！！

「いいぜ。俺の杖と翼あんに預けよう」
姫さんが肩に剣を置く。

儀式が終わった。

「さあ、やるぞー！！ …… って、あの二人はどうした？」

「二人なら、そこに…っっていない！？」

詠春が答えようとしたが、二人がいたらしい場所を見た途端、ツツコんだ。

「何処行っただ？」

その後、全員であたりを捜したが、手掛かりすらなかった。

「ったく、こんな時にどこ行きやがっただ？」

「逃げたんじゃねーか？」

「いえ、それはないでしょう。彼女たちはたった数人で、数百人の軍相手に死者を出さずに制圧する程です。それに、彼女たち黒き月は、私たち紅き翼と同じく指名手配されたのに、人々は全く信じていないほど、信用を得ています」

「じゃあ、何処いたんだよ？」

「もう行動しているのではないのでしょうか？」

「俺もそう思うな。あいつらは、俺たち以上に情報収集に長けている。既に行動しているじゃないか？」

「そうか、そついや、あいつに教えてもらった連絡手段は？」

「それが、全く繋がらねえんだ」

「既に何処かに潜入しているのでは？」

「何か猫みたいなやつだな」

俺は思ったことを呟いただけが、

「それが、二つ名の由来かもしれませんね」

「あ？ どういうことだ？」

「ナギ。知らないのですか？ 彼女の二つ名を」

「そんなもん知らねえ」

知らねえから、正直に答えたら、

「お前はそんなことも知らないのか」

詠春がため息をつきながらそんなことを言ってきた。

その後、説明された。

まあ、どうでもいいから、すぐに行動を起こすことに。

8話(後書き)

三度? 対立???

お便り待ってます

9話

side 祐依

紅き翼曰く、戦争を終わらせるために完全なる世界を潰している中、

コスモエンテレケイア

「マスター、ここは？」

「それは、・・・どうして」

「わかりました」

とある山奥にある、黒き月のアジト兼研究所で、とある研究兼開発をしています。

「マスター、何故これを？」

「ん？ ここには、色々非常識な物があるから、別に新兵器ってことで作っても平気だと思ったから。材料も技術もあるからやってみよっかなと思って」

「大丈夫でしょうか？」

「平気でしょ。そもそも、私たちの使う物がこの世界の物とは全然違うんだから」

「ですが、完成にはまだまだかかりそうですね。この戦争には間に合わせるの難しいかと」

「そうね… まあ、いいでしょ。‘倉庫’に入れとけば」
「はい」

コスモエンテレイア
完全なる世界潰しの合間にとある兵器の開発を進める。

因みに紅き翼は戦争終結のため。

黒き月は私たちが狙う奴らに報復するため。

結果は一緒だが、戦う理由と内容は全く違う。

私たちはさくさく潰していつているが、紅い翼はあまり進んでいない。

私たちが既に潰したとこに行くことが多いらしい。

紅き翼は、念入りに調べてから行くから、私たちみたく、奴らから情報を直接取ってるのより遅れる。

敵のほとんどは戦で儲けを狙ってた武装マフィアに武装商人、私腹を肥やしてたお役人とかだった。

中には、下っ端だけでなく、ちょっとは地位のある奴がいて、情報を搾り取れて結構進めることができた。

二か月程は私たちも動いていたが、証拠などはどこも大して変わらないから、紅き翼に情報を一方的に送りつけて、やってもらった。

ナギやジャックが暴れられると喜んでいた。

数か月後、

その時間を利用して、私たちは研究に時間を割いて、なんとか試作品を完成できた。

「じゃあ、試し打ちに行きましょうか」

数日前に完全なる世界の本拠地を見つけ、コスモエンテレケイア紅き翼に連絡し、最終決戦の準備をもらっていた。

9 話（後書き）

とある新兵器フラグ？

お便り待ってます。

10話

side 祐依

「不気味なくらい静かだな奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

私たちは今、ラストダンジョンともいつてもいい、

世界最古の都王都オスティア空中王宮最奥部‘墓守り人の宮殿’と呼ばれる場所にいた。

「ナギ殿。混成部隊配置完了しました」

「あんたらが外の召喚魔や自動人形を押さえてくれればその間に俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

ナギがカツコイイ。

これが、物語なら間違いなく主人公だろう。

因みに、私はルインとユニゾンし、ナギの隣で古明地こいしの‘無意識を操る程度の能力’で静かに立っていた。

「はい。・・・そつ、それで、ナギ殿。あの・・・さ、サインをいただけないでしょうか？」

「ああ、そのくらい構わないぜ」

何やってんの？

「ここ戦場でしょ？」

「舐めてんの？」

「既に諦めているのか…」

「それとも、ナギ達が全て倒してくれと思っているのだろうか…」

「ガトウから通信が入る。」

「ガトウと高畑の師弟はこの場にはいない。ガトウは連合に、高畑はテオドラと共に帝国でそれぞれ援軍の説得をしている。」

「因みに、高畑少年やクルト少年とは実際に会ったことが無い。」

「ガトウと共に探偵団をやっていたりなどで、面と向かったことがない。」

「こちらは間に合わない。おそらく帝国も同じだろう。」

「仕方ないな。もう時間がない。我々だけでやるしかない。」

「やはりか。」

「まあいいわ、結局そうなると思っていたし。」

「既にタイムリミットだ。」

「ええ、彼らは始めています。『世界を無に帰す儀式』を。今や世界の鍵たる『黄昏の姫御子』は彼らの手に落ちています。」

「ああ。よおしつ、野郎ども。行くぜっ！…！」

「混成部隊の隊長？ が下がったのを確認し、能力を解除する。」

「ナギ。私は外の援護をしてから、中に行くわ。」

「へっ！ お前が来るころには全部終わらせてやるよ！！」

「頼もしいわね。じゃあ、道を作るわね。」

<星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ 貫け、星光 スターライト
ブレイカー！>」

ルインの補助と共に、最近使っていなかった、私のデバイスのゼロを使う。

カートリッジも全て消費し、魔力を込める。

魔法陣に周りの魔力が集まり、巨大な魔力の塊が生成され、それを敵陣に向かって放つ。

巨大な魔力が敵を飲み込んでいく。

「なあ！？」

後ろの方で何か騒いでいるが無視。

「さあ、行きなさい。援護はするわよ」

そう言って、‘倉庫’から、以前に作成した試作品の‘GNドライブ「T」’を搭載した私が扱える程小型化したGNスナイパーライフルを取り出し、構える。

「よし！ 行くぞ！！」

ナギ達が飛び出していく。

私はスコープを覗き、ナギ達に寄っていく敵を撃ち抜いていく。

放つビームは真紅色である。

ナギ達が墓守の人の宮殿に到達するのを確認すると、ライフルをしまう。

「よし。実験はOKね」

周りの敵を殲滅に移る。

「<裁きの時来たれり 帰れ虚無の彼方！ エクセキューション！
>」

巨大な闇が現れ、周りの敵を飲み込んでいく。

粗方敵を殲滅して、

「じゃあ、後はよろしくね」

混成部隊に後は任せ、私も墓守人の宮殿に転移する。

10話（後書き）

ガンダムネタ？でGNドライブを出してみました。

戦艦相手に効果的だと思って使ってみました。

殺す気なら対人にもOK？

対悪魔にもOK？

後に使いたいが為に出しちゃいました。

後に最低、4回登場予定です。

魔法を一切使っていない兵器で、且つ目立って印象に残る、しかも対軍が可能な兵器が他に思いつきませんでした。

因みにイメージはガンダムデュナメスのGNスナイパーライフルです。

様々な世界を巡り得た、色々な世界の技術などを使い、超小型化した‘GNドライブ「T」’をダブルオークアンタのGNシールドのようにGNスナイパーライフルに搭載しているとして下さい。

お便り待っています。

11話

side 祐依

外の敵の大半を倒し、残りの敵を混成部隊に勝手に任せ、私も墓守人の宮殿に突入する。

「さて、まだ戦闘中みたいね。任せろって自信満々に言ったんだから、見学に行きましょうか」

戦闘をしているだろう、音がする方に歩いていく。

あのバクたちがずっと戦ってるってことは、相手も強敵みたいね。私だったらどうだろう？

手段さえ問わなければ、なんとでもなるだろうけど…

そんなことを考えながら、ナギ達の下へ行く。

あつ。

ナギが白髪の少年に強烈な一撃を決め、首をつかんでいる。

「見事…理不尽なまでの強さだ…」

「黄昏の姫御子は…どこだ？消える前に吐け！」

ポロポロになりながらもナギは白髪の少年に問い詰める。

「フッフ……まさか君は未だに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なん……だと……？」

あっ、やっぱり…

黒幕が味方を引き連れて戦場に出てくるわけないわよね。

やっぱり、ボスは儀式をやっている場所ですよ。

-!

「ナギ!!」

少年の背後の気配に気づき、ナギの名をとっさに叫ぶが、

「がふっ!?!」

少年の背後から黒いローブが少年もろともナギを魔法で貫く。

「いかん!最強防御!!」

「気合防御!!」

追撃にゼクトが障壁を張る。
ラカンが気合を込める。

「ちっ！？リンク・蓬萊山輝夜・ロード？」

ゼクト達の障壁が破られた瞬間に、
蓬萊山輝夜の‘永遠と須臾を操る程度の能力’で、須臾の間に、紅
き翼のメンバーをできる限り遠くへ蹴り飛ばす。

「ぐっ」

全員が怪我を負っていたが、どうやら死んだ奴はいなかった。
私は、ダメージを殆ど受けていない。

「アル残っている魔力で俺を治せ。
倒してくる。」

「ナギ貴方たちだけでは危険です。」

「いいから治せ！！」

「30分持てば十分だ！！」

「なら僕も行くでしょう。」

「この中で一番傷が浅いしろう。」

ゼクトは決して反論は言はせない口調でいった。

「分かった。」

「分かりました。」

「貴方は引かない人でしたね。」

「ナギ！先に行くわよ！！ 追いついてきなさいよ」

紅き翼のメンバーを残して、ローブを追う。

後ろで何やら叫んでいたが、無視して追っていく。

ローブを追っていくと、若干開けた場所に奴は立っていた。

「私の名前はライフメーカー……造物主にして始まりの魔法使い」

突然、ローブの男はしゃべりだした。

「それが何かしら？」

‘倉庫’からmisfortuneを取り出し構えながら、問う。

「お前は、何故戦う？」

「あんたらが、私たちを殺そうと狙うからよ。逆に聞くけど、あんたらはどうしてこんなことをしているのよ」

「それが、世界を救うただ一つの方法だからだ」

「そう……そんな簡単に世界を歴史を消させはしない！ あんたが世界を無に還せば、この世界は、この世界が刻んできた歴史が消え

る。歴史はそんなに軽いもんじゃない！一人一人が今を生きた、その積み重ねこそが歴史なんだ！それを、あなたの考えだけで、かたずけられてたまるか！！」

そのまま戦闘に入る。

お互い、魔法を打ち合う。

向こうは、この世界の始まりの魔法使いらしく、この世界のだろう私の知らない魔法を使ってくる。

しかし、私はこの世界の間人ではない。

よって、ライフメーカーの知らない異世界の魔法、魔術そして、武器や技術を使い対抗する。

知らない魔法などを使う私にライフメーカーは驚くが、相手は始まりの魔法使いと言うだけあって決定打を与えられない。

このままだと、倒す・倒されるの前に儀式が完成してしまう。

儀式を完成させられたら、こっちの負けだ…

そう焦り始めた頃、突然相手の攻撃が止む。

「お前は一体何者だ？ これ程まで、私と互角な勝負をし、私の知らない魔法を行使し、見たこともない武器そして技術を使う」

相手の攻撃の気配が無くなり、チャンスかと一瞬悩んだが…

「お前が答える、もしくは攻撃してくるまで、儀式は止めている。

私の問いに答えてくれぬか？」

確かに、儀式を行うためであろう魔力の流れが止まっている。

「…わかったわ」

多少の逡巡をしたが、相手は対話を求めている。
なので、私も言語による対話をすることに。

「話し合いの場を招待するから、信じて来てくれる？」

武器を、倉庫' にしまい、そう尋ねる。

「よかるう」

私の提案に応えてくれる。

かつて、闇の書に取り込まれた時のように、ゲート？が開かれる。

「ついて来て。ここなら誰の邪魔も入らない。時間もかからない」

これはさらに改良を加えたもので、中と外で時間の経過が全く異なる。
外の一瞬が中の時間である。

中でいくら過ごそうが、外に出たら、時間の経過はほんの数瞬である。

今回は対話が目的なので、応接室っぽい部屋を作った。

中で、ルインとのユニゾンを解除し、今までの説明をする。

「ふっ、おもしろい。この世界の存在ではないとな」

「ええ。さつきも見たでしょ？ 私の攻撃を」

ライフメーカーに‘倉庫’から取り出したワイン（十六夜咲夜の時間を操る程度の能力で管理はバツチリの150年もの）をグラスに注ぎながら、答える。

「では、改めて聞くが、何故戦う？」

「あなたの部下が襲ってきたからよ。ここに来たのは、あなたの計画、世界を無に還そうとするのを防ぐためかしら。逆に聞くけど、どうしてあなたはこの世界を無に還そうとしたの？ 世界を救うってどういうこと？」

「それはだな………ということだ」

「なるほどねえ〜。じゃあ、もし世界を無に還さずに救える方法があれば、そっちでもいい？ 戦う前にも言ったけど、この世界だつて、人々が作って来た歴史があるんだから」

「…出来るのか？」

「当然。この世界しか知らないあなたでは知らない方法も私たちは知っているのよ。まあ、準備に時間がかかるけどね」

「間に合うのか？」

「間に合わせるのよ。まあ、間に合わなかったら、その時はあなたの考えを実行するしかないわね。と言う訳で、今回は計画を見送ってくれる?」

賄賂として、ワインやその他諸々を準備していく。

ライフメーカーは直ぐには答えず、ワインを飲んでいく。

数分後、

「いいだろう。私に物怖じせず、さらに対等に戦えるのだ。何よりお前はおもしろい。この世界の未来をお前に預けよう」

「ありがとう。期待に応えられるようにするわ」

その後、口裏合わせなどを行い、今回の処理について話し合う。

「ふっ、これなら、初めからアーウェルリンクスを交渉に出しておけばよかったな」

「そうね。私はそのアーウェルリンクスってのは誰か知らないけど、初めから対話だったら、こんなことにならなかったのにね」

「そうだな...」

そして、誓約書を書き、ついでに賄賂として用意した物をしまえる、特製のカバンをあげる。

「そのカバン捨てないでね。ロストテクノロジーとオーバーテクノロジーとこの世界にない魔法技術の塊だから。定期的に中身が補充されるから」

賄賂の品をカバンに詰めながら言う。

「わかった」

カバンを渡し、

「じゃあ、戻りましょうか」

現実に戻ってきて、

ナギと、ゼクトが追い付いてきたので、芝居をすることに。

芝居の為に儀式の速度を遅くして再開してもらっています。

「フツ 私を倒すか」

「未来はここにある。ここから始まる」

「ははははははは！私を倒すか人間。それもよからうツ！！私を倒し英雄となれ！羊達の慰めともなるう！！」

「私たちの未来は私たちが決める。そして、自分の足で歩いていく。それこそが私たちがこの世に生きる幸せであり、喜びよ！あんたの指図なんて必要ない！」

「武の英雄に未来を造る事はできぬ。
貴様達には何も変えられまいよ。」

ライフメーカーがナギ達に向かってそう語る。

「ドオンッ！」

先程の戦いの余波で天井の一部が崩れ、砂埃が舞い、視界を遮る。

「だが果たして・・・自らに問うが良い。人とは身を捨ててまで救うに足るものか？」

砂埃に姿が隠されながら、ライフメーカーが語る。

砂埃が収まるころには、その姿はどこにもなかった。

11話（後書き）

大戦は無事？終了しました。

ゼクトが生きています。

それどころか、造物主も健在です。

祐依が暗躍？しています。

お便り待ってます。

12話

side 祐依

ライフメーカーを倒し？

ライフメーカーが儀式の進行を遅くしてくれたので、儀式の間に行くまでに若干の余裕ができ、ナギとゼクトを連れ、残りの紅き翼のメンバーの下へ転移し、全員を死なない程度に治療をしようとしたら…

- ツ!!!

宮殿の外で大規模な魔力の流れが現れた。

「なっ!?!? これは!」

ライフメーカーの世界を無に還す儀式の魔力の流れとは異なる別な大規模魔法の為の魔力の流れだ。

『 - 艦隊、光 - - - 困み - え - - なさい! - 導兵 - 、大 - 模反
転封印術 - 展開! ! 全魔 - - 界の - 廃、 - の一戦 - あり! - -
全 - を - く - 後はな - ぞ! ! 』

アフリカ女王陛下の声が途切れ途切れに聞こえた。

「まずい!! 封印する気!?!」

この場には封印の対象の他に全員が怪我を負った紅き翼がいる。死にはしないだろうが、全員が傷つき、魔力や気は殆どつきかけて

いる。

こんな状態で如何に封印が目的だとは言え、あんな大規模な魔力の奔流にさらされたら、まずいかもしれない…

紅き翼を治療したり転移させてたら、儀式の間に行き、儀式を破壊し止めるには時間が足りない！

かと言つて、ほつといたら、ただじゃすまない…

儀式の間の辺りには転移が出来ないようにされている。

「まさか、ここまで早く外が動くとはね…」

「ノア、早く脱出を」

アルビレオが騒ぎ出す。

彼らには既に外に転移したりする力はないようだ。

「ちいつ！？リンク・八雲紫・ロード？」

スキマを外の部隊のところ落ちるように紅き翼の足元に開く。

「な、おい！ ノアー！」

スキマに落ちながら、ナギ達が騒ぐが、関係ない。

「ちゃんと、協力しなかったのがここで歪みを生んじやったか…

もう、外の封印術式を止めるのは間に合わない…」

外の連中が、ここまで早く封印を行おうとするとはね…

ナギ達、紅き翼の怪我を無視してさっさと儀式を止めておけばこんなことにならなかつたのに…

ライフメーカーが儀式の進行を遅くしてくれたから、気、抜いちゃった…

怪我してるナギ達を治してから、儀式を止めればいいって、考えちゃったから…

先に外の連中に連絡をとればよかった…

外の連中の方が、すっかり頭から抜け落ちていた…

「私の油断が、慢心が、招いた取り戻せないミス…か。これで、オスティアは…」

儀式は、連合と帝国が協力して封印をしてしまった。

数日後、記念式典が行われた。

そこで、紅き翼は名実ともに英雄となった。

だが、私たち黒き月はその場にはいない。

「始まったわね…」

「はい」

オスティアが魔力喪失現象により崩落が始まる。

その光景を少し離れた場所で見つめていた。

本来ならば、魔法が意味をなさない為、民の救出が困難になる筈なのだが…

『陛下！！ オステイアに誰一人おりません』

『何じゃと！？』

『既に崩落する危険性のない場所に避難している模様です』

『どづいつことじゃ！？』

『それが…人々の話によると、黒き月の黒猫が現れ、全員が誘導させられたらしいのです』

そんな会話をしているのが、ゼロのサーチャーを通して聞こえる。

伊吹萃香の‘密と疎を操る程度の能力’で、人々を集めて、誘導したのだ。

『全員に告ぐ！ もう一度、確認してまいれ！ 一人も残っていないか確認せよ』

「さつさと、退避すればいいのに」

そう呟きながら、確認作業中の人に被害が出ないように‘倉庫’から以前に使用した、

‘NGドライヴ「T」’を搭載した私が扱える程小型化したGNスナイパーライフルを取り出し、崩落していく岩を撃ち抜いていく。

ビームなど放っていれば、当然目立つ。

アリカ姫から、念話が入る。

『ノア！ 何故お主がこのことを知っている！！』

『そりゃ、これぐらいわかりますよ。魔法が使えなくなればね』

兵士が全員退避するのを確認するまで、手を休まず岩を撃ち抜いていく。

その後も何か言ってきたが、念話を強制遮断する。

全員の退避を確認し、‘倉庫’にライフルをしまう。

その場を去ろうとしたら、紅き翼のメンバーがやって来た。

「何の用かしら？」

「お前は どうしてこれが起きるってわかったんだ？」

「あの最後に連合と帝国が行った術式を見れば一目瞭然でしょ？」

何故か、一触即発の空気が流れるが、

「もうここにいる必要はないわね。怪我人や死者は一人も出なかつたんだし」

「な！？ おい！ ちょっと待て！！！」

「?リンク・八雲紫・ロード?」

スキマを開き、その中へ紅き翼を置き去りに入っていく。

12話（後書き）

オステイアの崩落でした。

お便り待っています。

13話

side 祐依

オステイア崩落から数か月後、アリカ姫いや、アリカ女王陛下が老害に戦争の責任を押し付けられて、ケルベラス無限監獄に収容された。

… 一体何をもって無限と呼ぶのかしら？

それはともかく、私たちはその時は、オステイア崩落後、村や小さな町などの集落に戦争中にできた伝手を使って難民の受け入れを頼んだり復興の手助けをしたりしていた中には、難民の一部を受け入れて、村を小さな町にしてしまったところもある。

そうした生活をしていたら、アリカ女王陛下が捕まってしまった。

オステイアの崩落に責任を感じ、復興支援：老害の監視⁸：2程度の割合で行動していたら、老害の中で、私たち黒き月に戦争責任を押し付けようとしている輩がいるのに気づき、潰していった。

悪役^{ヒール}ぐらいになら、別に今までも度々やってきたが、今回は違う。別に相手は問題ではない。

世界が相手でも、私たちは一步も引かずに戦うつもりである。どういった結果になるか、わからないが…

… 全員でやればいける… かな？

今回は私が、悪役^{ヒール}になっても、戦争の犠牲になった人たちには何もならないし、それよりも、老害が得をするだけである。

罪のない人たちのためなら、進んで悪役ヒールになるが、人々を苦しめてきただけの老害のために悪役ヒールになるつもりなどはさらさらない。

アリカ女王陛下も戦争復興のために色々と行動していたが、殆ど連絡を取り合わなかったのが不味かった。

陛下は、行政、言わば制度からの復興を目指して、奴隷制を認めてしまったり、父王をクーデターで引きずり降ろしてしまったのが痛かった。

そう言った上がチンタラやっているのを待っていると、被害に遭った人たちに手を差し伸べるのが、できない、若しくは、遅くなってしまう。

そんなのを待っていられなかった私は私の独自の伝手や技術、その他を利用し、戦争復興を行っていた。

老害の大半は黒き月に戦争責任を押し付けるつもりだったらしく、復興の合間に潰していたが、それ故に少数派だった、アリカ女王陛下に矛先をむけている連中の水面下の行動に気づけなかった。

とある日に老害を潰した後の情報収集で知った時には既に計画が実行されるところだった。

アリカ女王陛下の無実を証明しようにも、有罪であるという明確な証拠はないが、老害の小賢しい行動によって、既に信じられてしまっている。

逆に無罪であると言う明確な証拠もない。

世論を覆せるような無実であると確たる証拠がないために、訴えることができない。

…一番、手っ取り早いのが、完全なる世界の親玉のライフメーカーに証言してもらうことが、そんなことが出来る訳がない。

無実の証拠がなければ、いかに信頼を受けている黒き月でも、

完全に覆すことができない。
難癖をつけられて、こちらまで被害を受けてしまう。

かと言って、陛下を見捨てることはできない。

助けようと、ケルベロス無限監獄にチカラを使い、忍び込んだが…

監獄の仲の女王陛下の目を見て、助けるのをためらってしまった。

場所故に魔力と気が封じられていたが、彼女は何もする気が無いように見えた。

彼女は絶望の淵にいるようなそんな目をしていた。

「これは、私が今助けても駄目ね」

そう呟き、ナギ達の下へ向かう。

「ナギいる？」

「なっ ノア (ミナツキ) (黒猫) !?」

ナギに声をかけたのに、ナギは無反応で周りが驚いていた。

「あれ？ ナギはどうしたの？」

「あ？ ああ、ナギは陛下とちょっとあつてな」

詠春が答えてくれた。

「ふうん」

ナギの前に立ち、目を見る。

「これは…… 邪魔したわね」

ナギの目も、今は何を言っても意味がないと悟る。
そして、紅き翼の下から去ろうとしたら、

「ナギに何か話があったのでは？」

アルに呼び止められ、尋ねられる。

「ん？ あったけど、今は話すべきじゃないから。それに今の状態のナギに話しても、プラスにならないからね」

「わかりました。ナギに何か伝えることはありませんか？」

「ん… ナギが目を覚ましたら、もしくは、二年後に話があると」

「二年後ですか…？」

「ええ。アリカ女王陛下の処刑日の一週間前にね」

「な！？ 陛下が処刑！？」

「あら？ 知らなかったの？」

「ええ、陛下が捕まったのは聞いていましたが…」

「そう、二年後に処刑があるのよ。老害のせいだね。災厄の女王と汚名を着せられ、平和の礎に処刑されるそうよ」

「!？」

全員がそこまでは知らなかったのか絶句している。

「何故そこまで知っているのですか？」

「私も汚名を着させられそうになったのよ。その実行犯や発案者とかの老害は始末して、私には着せられなかったけど… その中で、陛下の事を知ったけど、その時には既に捕まった後だったのよ」

「あなたなら、助けることが可能では？」

「出来ないことはないわ。けど、今私が助けてもダメなのよ。もう既に行ったけど、陛下の目を見て思ったのよ。陛下は今絶望の淵にいる。今、私では、助けても、陛下の心までは助けることが出来ないのよ」

「…！ わかりました。ですから、ナギが目を覚ましたらなのです
ね」

その言葉でアルや詠春、ゼクト、ガトウがわかったようだ。

「ええ。もしも期日までに目を覚まさなかったら、ちょっと手を下さすから。それまでに目が覚めたら、これで連絡をして」

そう言いながら、一つの魔石を渡す。

「これは？」

「これに魔力を流し込めば、一度限りの連絡ができるのよ。盗聴も妨害も何もできないのがね」

「一度限りですか…わかりました」

「じゃあ、お願いね」

紅き翼と別れ、復興の手伝いと、これ以上よけいなことをさせないように老害の監視をしつつ、とある企業を起こす。

黒き月から名前を変え、‘白き月’と。

今は、復興のための活動をメインにやっているため、魔法世界での活動がメインになっている。

一息ついたら、旧世界にまで手を伸ばそうと考えている。

社長にギルさんを据え、黄金律を使って、企業を大きくしている。私が創設者であり、会長をやっている。

一年半後、白き月は急発展を遂げ、魔法世界の流通や生産などの殆どに何らかの関与をするほどになった。

活動の中には、復興や援助などもしている。

さらに時は流れ、紅き翼との約束の日。

13話(後書き)

お待ちしております。

14話

side 祐依

紅き翼との約束の日。

「とうとう、連絡が来なかったわね」

そう、結局連絡は来ることがなかった。

噂では、紅き翼は紛争地域などを回り、止めているらしい。

「そうですね」

「じゃあ、約束通り、お話に行こうか」

「はい」

紅き翼がいるアジトの前に転移する。

「ナギ！」

扉を開けながら、ナギの名を呼ぶ。

「約束通り、お話に来たわよ」

中では、ナギがらしくなく考えているようだった。

周りが、ナギに対して色々言っているが、大して成果は無いようだ。

「ノアか、見ての通りだ」

詠春が首を振りながら言ってきた。

「そうみたいね」

皆にちよつと離れてもらい、ナギの正面に立つ。

「ナギ、あなたは どうしてそこまで悩んでいるのよ？」

「ノア…か」

ナギの瞳には以前のような光がない。

戦争中の自分の意思で動いていたころのような、意思がほとんど感じられなかった。

「もう一度言っわ。 どうしてあなたは考えているの？」

「…ノア、正義って一体何なんだ…？」

ナギがそう呟く。

「そんなの簡単よ。 ただの幻想よ」

ナギの問いを切って捨てる。

「正義なんてものは存在しないのよ。 正義とはただの傲慢に過ぎな

いのよ。例えば、争いで勝った方が正義って言われるわ。勝った方が好きに言うからね。負けた方は死んでいるか、生きていても、何も言えないから。戦争だってそうよ。勝った方が正義名乗り自己保全をするわね。所詮は人殺しなんだから。争いなんて、自己の信念と信念のぶつけ合い。いえ、そこまで大層な物じゃないわね。自分に利益を得ようとしている奴ばっかだからね」

「……」

「ナギ、質問を変えるわ。貴方はどうしたいの？」

「……」

「ふう… バカのくせに難しい事考えてんじゃないわよ。あなたはあなたらしく生きてりゃいいのよ」

「……俺らしく…か」

「そうよ。あなたが本当にしたいことは？ 周りの事なんか一切考えずにあなたの本心は？」

「……助けてえ。姫さんを助け出してえ！」

ナギが顔を上げ、そう言い切る。

「そう。それがナギ、あなたの答えなのね」

「みんな！ 手伝ってくれ！！」

「そんなのは当たり前だろうに。助けたいから助ける
ただそれだけだ」

「オレはアリカを助けたい。頼む。力を貸してくれ」

「ハッ。今更何言つてやがる」

「そうですよ。ナギ」

「皆アリカ王女を助けたいと思ってここにいるんだ。断るはずがないだろ」

「お前ら……ありがとう」

紅き翼のメンバーが集まり、ナギに口々に告げる。

「ナギ、助けるだけなら、いくらでも方法はあるわ。けど、殆どの方法は一時しのぎの策でしかないわよ。おそらく、老害はアリカ女王陛下を指名手配して、追い続ける筈よ。その上、助け出した紅き翼も指名手配するでしょうね」

「だったら、どうすりゃいいんだよー!!」

「策はあるわ。一度限りのミスはできないのがね。失敗したら、そこで終わりだけど」

「それは何ですか?」

「それは……」

「それで大丈夫なのか？」

「ナギ、おそらくそれが唯一の方法でしょう。それならば、後始末も出来ます」

ナギが疑問を持つが、アルも賛成してくれる。

「ええ。処刑方法がケルベラス渓谷に突き落とすで良かったわね。射殺とか直接手を下さないものだからできるのよ」

「そうか…なら、その方法で行こう!! みんな、よろしく頼む!!」

こうして、一週間後の処刑の対策ができた。

14話(後書き)

次回、アリカ姫の救出です。

お便り待っています。

15話

side 祐依

処刑執行日既に全員がスタンバイしている。

紅き翼はナギを除き、処刑場に。

ナギは私と共にケルベラス溪谷の底にいる。

ルインはさらに別行動である。

詠春とアルに通信機を渡し、さらにサーチャーを撒いてあるので、上の様子は手に取るようにわかる。

side other

「魔獣うごめくケルベラス溪谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに「死の谷」」

元老院議員の一人がこれから行われる処刑法を説明する。

内容はこの処刑法が如何に残虐かを語り、目的は死刑囚に恐怖を与えることのようにだ。

そしてその説明も終わり、ついに処刑の時刻がやってきた。

「歩け」

兵士が槍でアリカ王女を急かす。

「触れるな下郎。言われずとも歩く」

アリカ王女は一歩一歩と自らの足で死に向かって着実に歩いて行く。

そして最後の一步というところで目元につつすらと涙を浮かべ、

「さらばじゃ。ナギ……」

アリカ王女はその身を投げ出す。

「よろし……」

「よおーっし。こんなモンだろ」

何か言い出そうとした元老院議員の台詞に一人の兵士の言葉が重なる。

「無礼者！ 何者だ貴様。名を……」

「おっさん」

再び台詞を遮り兵士は元老院議員の側に行き頭をアイアンクローのように掴み、そして告げる。

「録画はここで終わりだ。で、今からここで起こることは、なかっ

た'ことになる。わかるな？」

頭を掴まれた議員は一人の男の姿が脳裏をよぎった。

「貴様はッ」

「ぬんっ」

と、掛け声と同時に兵士の鎧が弾け飛ぶ。

「千の刃の……ジャ、ジャック・ラカンッ！！」

「青山、詠春ッ！！ アルビレオ・イマ！！ ゼクト！！ ガ
ガトウ！！」

そしてラカンに続き詠春・アルビレオ・ガトウと大戦の英雄が集結したのだから、会場は騒然に包まれる。

「バカなっ！ いかなサウザンドマスターとはいえあの谷底から生きては……」

「それはどうかな？」

再び元老院議員のセリフを遮る。

「あいつだけじゃねえんだよ！他にもいるんだよ。協力者がな！！」

ジャックが言う協力者は黒き月である。

「おおっとやるのか？ いいのかよその程度の戦力で」

「ふふ……その程度の戦力だと？ 愚か者が、このイベントの警備はここに見えるだけではない。周囲数十キロ二個艦隊と三千名の精鋭部隊が包囲している。いくら貴様らでもこれを……」

「だからその程度の戦力でいいのかって聞いてんだよ」

ジャックが言った途端、離れた所の戦艦が次々とオレンジ色の光によって撃ち落とされていく。

side 祐依

「ナギ!!」

「おう!!」

ナギがアリカ王女を助ける。

そしてジャックの言葉を聞き、

『ルイン。GO!』

『了解』

ルインに指示を出す、

遠くの艦隊が、オレンジ色の光線に貫かれ撃沈していく。

ルインは別働隊として、改良されたGNドライブ「T」を用いたGNスナイパーライフルで艦隊を潰していく。

上ではさらに騒然としていく。

谷底では、魔獣たちをGNソードを使い、切り殺していく。

近くの魔獣はGNソードで斬り殺し、離れた魔獣はライフルモードで撃ち殺していく。

ナギ達を地上まで送り届けるのが私の役目で、地上の敵は残りの紅き翼とルインが倒す。

魔法が使えないのなら、化学兵器で対処すればいい。
化学兵器でこの場に向かって来る魔獣を全滅させる。

上空を見上げると、ナギとアリカ王女がラブシーンをやっていた。

とりあえず、後でからかう為にカメラを取り出し、撮影しておく。

無事にアリカ王女の救出に成功し、紅き翼と一緒に旧世界の詠春の実家のある京都に行くことに。

15話（後書き）

無事、救出成功です。

二年間の間にGNドライブの改良に成功しています。もっとも、使えるのは祐依とルインだけです。

今回のGNソードのイメージはガンダムエクシアの最初期のGNソードです。

GNコアからのGN粒子の供給については、目を瞑ってください。ネタで考えたもので、詳細まで考えていません。

お便り待っています。

16話

side 祐依

紅き翼が旧世界の京都に行くと言ったので、ついて行った。

あの時、ナギがアリカに（王女でなくなったので、呼び捨てに）告白していたので、これは新婚旅行なのでは？

と思っただけど、誰も気にしていなかったから、私たちも気にしないで観光を楽しんだ。

その中で、写真を使って二人をさんざんからかって遊んでいたら、とうとうアリカが顔を真っ赤にして、キレて、一瞬で写真を破かれ、カメラが壊されてしまった。

…これが、ギャグ補正なのだろうか？

…自分が写っている写真を破るのは、なんとなく嫌だな

観光後、詠春も明日に婚約していた近衛さんと祝言すると聞いて、

「よし！ ルイン。釣りに行くっ！」

「はい？」

ルインが一瞬呆ける。

「祝い事には鯛でしょ！ と言っ訳で釣りに行くっ！」

「わかりました」

「詠春」

詠春を呼び、

「どうした？」

「明日、祝言するんでしょ？ だから、お祝いに鯛釣ってくる」

「どうしてそれを!？」

「ん？ 近衛さんに聞いたのよ。だから、ちょっと言って来るわね。

明日の朝には戻って来るから」

返事を聞く前にさっさと転移する。

海辺に転移し、

「?リンク・アーチャー・ランサー・ゼロアーチャー・サモン？」

三人を呼び出す。

「どうしたんだ？」

「一体どうしたのだ？」

「どうした？」

「鯛を釣るから、手伝って」

「釣りなら任せろ」

「別に釣り尽くしても構わないのだろうか？」

「我に任せろ」

三人が乗り気になっているので、

「じゃあ、第X回魚釣り大会！ 対象は鯛。一番大物を釣った人が優勝！ 制限時間は明日の朝日が見えるまで」

「「「よっしや〜〜！！」「」「」

なんとなく煽ってみたら予想以上に乗って来た。

「フィッシュ〜！！」

「てめ、五月蠅え!!」

「ははは！ 我から逃げられるとでも」

「お前も五月蠅え!!」

「フィッシュ〜〜!!」

「だから、五月蠅え!!」

皆が物凄い勢いで釣っていく。

「生態系大丈夫かしら…」

s i d e o t h e r

『では、結果発表』

参加が出来ないゼロが司会をする。と。

『アーチャー、39cm』

『ランサー、42cm』

『ギルさん、37cm』

『祐依、記録なし』

『ルイン、52cm』

orz 祐依は膝をつく。

「どうしたのだ？」

代表して、アーチャーが声をかけてくれる。

『マスターは魚は一匹も釣れていません。針が何故か岩とかに張り付いていたり、砂の中に隠れていたサザエやアワビなどの貝類ばかりに引っかかり、それらを引き上げていた状態です』

「・・・」

『ちなみに、サザエ52個、アワビ41個、ウニ63個、ホタテ25個、ホツキ貝31個です』

「・・・まあ、なんだ…元気を出せ。ある意味すごい結果だな」

「いいのよ…しばらく一人にしてくれない？」

祐依はフラフラと、近くの浜辺に行ってしまった。

『すみませんが、マスター特製のクーラーボックスに入れてもらえますか？』

「…ああ」

残された、四人は魚や貝を特製のクーラーボックスにしまい、

「では、マスターが戻ってくるまでどうするか…」

「ただ単に釣りでもしてるか？」

「そつだな。静かにマスターを待っていよう」

「マスターの釣果は逆にすごかったな。潜ってもあそこまで獲れるものか？」

「いや、無理だろ…」

一時間後。

「ごめんなさい。待たせて」

祐依が戻ってきた。

「いや、構わんよ」

四人が待っている間に釣り上げた魚はいいものだけを残して、放流していた。

「じゃあ、そろそろ戻りましょうか」

そうして、詠春たちがいる関西呪術協会に戻る。

時間は戻り、

side 詠春

「はあ… 何なんだ…」

ノアが突然呼んだかと思ったら、釣りに行くとは…
まあ、祝ってくれるためだから嬉しいのだが、

「これはな…」

今、大広間で紅き翼のメンバーが宴会で大騒ぎをしている。

そんなことが続いていると、

「たっ大変です!!」

「どうした!?!」

呪術協会の人々が慌てて入ってきた。

「リヨウメンスクナノカミが復活しました!!」

「何!? みんな! 手伝ってくれ」

「どうした? 詠春」

「スクナが復活してしまった。封印するのを手伝ってくれ!」

「いいけどよ、ノアはどうした?」

「ノアなら、今、釣りに行っている。念話は話を通じない」

「どづいつことだ?」

「いや、理由はわからんが、念話は届くが、あっちの話の意味がわからんのだ」

「何を言っていたのですか?」

「貝とか、またかとか、打ちひしがれているようだった。こちらの呼び掛けには一切反応がなかったんだ」

「どづいやら、いい釣果でないようですね」

「詠春様!」

「ああ、すまない。すぐに行く」

その後、スクナを無事に封印できた。

16話（後書き）

なんとなく、友人と貝について話していて、こんな話に。

季節や地理などは考えないでください。

ただのネタですから。

数はサイコロの目です。

お便り待っています。

17話

side 祐依

翌日、関西呪術協会に戻つてくると

「おい、ノア！ てめ昨日何処行つてたんだ！」

ナギたちが突然絡んできた。

「詠春に聞いてない？ ちょっとお祝い用の鯛を釣りにつて」

「昨晚、封印されていたリョウメンスクナノカミが復活して、私たちが対処してたんですよ」

「え！？ スクナがいるの？」

「ああ、もう封印しちまつたけどな」

「…ルイン。魚を渡しておいて。私は詠春にちよつと話があるから。ナギ、詠春はどこ？」

「あ？ 確か、奥にいるはずだ」

「ありがと」

ナギ達と一方的に別れ、詠春の下へ。

「バン

「詠春！」

襖を勢いよく開け、詠春を呼ぶ。

「どうした？」

「スクナどこ？」

「は？」

私の質問に詠春が呆ける。

「だから、スクナはどこ？」

「スクナ… あ、リヨウメンスクナノカミか」

「そうよ。どこに封印したの!？」

「ここから、少し行っただこの湖の岩屋だが…」

「わかった」

「ところで、どうする気なんだ？」

早速行こうとしたら、呼び止められた。

「ん？ スクナに久しぶりに挨拶に行こうかと」

「…知り合いなのか？」

「ええ。古いね。だから、ちょっと封印解いてくるね」

「な！？ ちょっと待ってくれ！！」

「何よ？」

私は不満を隠さずに聞き返す。

「スクナは封印したばかりなんだ。解くのは勘弁してくれ」

詠春が頭を下げてきたので、

「ん〜、わかったわよ。でも、次封印が解けたら、封印する前に呼びなさいよ」

「ああ。約束しよう」

「じゃあ、この話はお終い。宣言通り、いい鯛とか一杯釣って来たわよ。式の料理に困らないくらい。むしろ、食べられるか心配するくらい」

「そうか、ありがとう」

「鍋の材料もあるわよ。頑張ってるね。鍋將軍」

「待て！ それは」

詠春が何か言っていたが、無視して、去っていく。

式後にナギに写真を撮りたいと言われ、公開しないことを約束にOKを出し撮影に応じる。

どうやら、大戦の仲間として、残しておきたいそうだ。

正確には協力者であるが。

私も紅き翼のメンバーが映った写真を貰って、‘倉庫’にしまっておく。

式の翌日に別れ、‘白き月’の旧世界進出を始める。

まずは、魔法世界とは別に旧世界だけの活動で会社を大きくしていく。

最初にIT関連企業を設立し、特に力を入れ、対魔法使いの情報操作ように強力なセキュリティを作る。

調査の結果、魔法使いの財源は裏金が大きかったからね。

電子精霊とかでも書き換えができない、それどころか、侵入さえできないものをルインとゼロと共に作り上げた。

名前は一応‘光の月’にした。

ネット環境が整う頃には、殆どの情報が光りの月によって、管理されるようになって、どんな方法を用いても、改竄などは不可能に。

その後、評価されていない技術を持っている色々な中小企業を対象に買収し、その企業の技術をフルに活用できるようにして、特許を取得させていきます。

企業が大きくなってきたら、色々な分野に手を伸ばしていき、その分野のある程度の企業を買収して‘白き月’の傘下に入れていきます。

そして、その企業を大きくしていき、その分野のトップに。

それらの商品は‘白き月’の通販で大抵の物を買えるように。裏会員で魔法世界のモノも取り扱うようになりました。

数年後、殆どの商業に‘白き月’が関与するように。

それら以上に孤児院などの施設に協力したり、作ったり色々しました。

神木‘蟠桃’がある麻帆良学園からギリギリ外れた場所に孤児院を建て、そこでしばらく暮らす。

さらに数年後・・・

17話（後書き）

次回に原作キャラと遭遇予定です。

白き月は魔法世界からの流通を全て掌握しています。
他に麻帆良学園の流通も完全に掌握しています。

祐依の指示一つで、簡単に干上がります。

魔法世界のモノを扱っていますが、あまり積極的ではありません。
ある意味、旧世界の対魔法使いように全て管理するためです。
一応、商売はしています。

独占？禁止 何それ？ おいしいの？

お便り待ってます。

18話(前書き)

今回から、

念話を「(会話)」と表記します。

18話

side 祐依

五月ごろ。

研究の息抜きにフラフラと麻帆良学園をふらついていると、

「ん？」

とある少女が目につく。

小学校に入ったばかりだろうか？

ランドセルも真新しい。

「ゼロ。彼女、この学園の認識阻害結界の影響が全くないわね」

『はい。対魔力が高いのでしょうか？』

「うーん… ちょっと調べてみましょうか」

『はい』

女の子の後ろを一定の距離を保ちながら、フラフラと追っていく。ストーカーと間違われても、おもしろくないので、ゼロに追跡してもらって見失わない程度に店先を覗きこんだりして、時間をかけて調べていく。

直接調べたり、おおっぴらに魔法が使えないので、詳しく調べられないが…

『マスター、予想通りです。彼女は認識障害魔法が効いていません』

「やっぱり？ ……よし。彼女が通っている学校の同じクラスに転入しよう」

『はい？』

ゼロがめずらしく呆ける。

「あれくらいの歳なら、同じクラスで友達になった方が、関与しやすいじゃない。彼女の体質が原因なら、対策するのにある程度仲良くなっておいた方がやりやすいのよ。それに息抜きに丁度いいわ。小さい子供は柔軟な発想ができるし。と言っ訳で、『光の月』で調べてくれる？」

『わかりました。 ……マスターも十分柔軟な思考ができていますよ』

「ありがとう。じゃあ、一旦家にもどろつか」

家に戻って、『光の月』で戸籍の偽造して、転校の準備を行う。

「じゃあ… 五歳で、『白き月』の創立者の義理の子で、両親は現在会社が忙しく、世界中を飛び回っている。なので、両親の知人の家に居候している。っと」

「祐依、白き月の情報はいるのですか？」

操作をしているとルインに声をかけられる。

「ん？ その情報があれば、バカな魔法使いたちは私を取り入れようとするでしょ？ 電子精霊を使っても改竄が不可能な‘光の月’を管理している‘白き月’のトップに関わる人を丸め込みたいと思う奴らがいるのよ。それにあの女の子は認識阻害の影響を受けていない。もしかしたら、そういったある特別な素質を持った人たちをあの連合の老害たちが集めるかもしれないでしょ？ その中に女の子が含まれるかもしれないからね」

返答しながら、操作を続ける。

「これでよし。小学一年生か…ルインはどうする？」

「私ですか？ そうですね… 私もお供します」

「わかった。それと、名前はどつする？」

「マスターの家族ですよね？」

「ええ。ルインは外国で両親が引き取ったってことにしてあるから」

「…では、ルイン・F・相沢フォースで」

「了解」

ルインと私の転入手続きを行い、受理される。

「これで、明日から麻帆良学園小等部の一年生ね」

次の日。

容姿を小学一年生程度に変え。

存在しない両親の代わりにアーチャーについて来てもらい、正式に転入手続きを済ませる。

アーチャーは今、衛宮士郎と名乗り麻帆良学園内に喫茶店を営んでいる。

他の黒き月のメンバーも偽名を名乗り、色々なところで働いていたりする。

身分や戸籍などは、光の月で管理しているため、偽造に気付く者はいない。

「士郎さん、ありがとね」

「これくらい構わんよ。祐依も頑張ってきたまえ」

「ええ。それじゃ、行って来るわね」

「ルイン。あり得ないと思うが、絶対とは言い切れないのでね、も

しもの場合、頼むぞ」

「わかっていきますよ。そろそろ、戻ってお店の準備をしないと開店が遅れますよ」

「ああ。ではな」

マスターと呼ぶのは私がノア・ミナツキとして行動している時だけにしている。

相沢祐依の時には本名で呼ぶようにしている。

「失礼します」

職員室で、担任となる先生に会いに行く。

「今日からお世話になる相沢祐依です」

「同じくルイン・F・相沢です」

「ああ。こちらこそよろしく。僕の名前は弐集院 光だよ。じゃあ、今からクラスに案内するからついて来てね」

「「はい」」

「（ルイン。この先生も魔法使いね）」

「（はい）」

「（一応、警戒しておこうか）」

「（わかりました）」

「どうしたんだい？ 急に黙り込んで」

「ちょっと、緊張を。入学したばかりにすぐ転校だったので」

「そう言えばそうだね。まあ、みんな元気いっぱい、すぐに仲良くなれると思うよ」

「はい」

「じゃあ、呼んだら入って来てくれるかい」

「「わかりました」」

教室の前に着くと先生はそう言って、入っていく。

「ふう、むこうは無警戒ね」

「そうですね。小学一年生が魔法に関与しているとは思わないですようから」

ルインとそんなことを話しているよ、

「二人とも入って来て」

「行きますか」

「じゃあ、挨拶を」

「はい。転校してきた相沢祐依です。特技は強いて言うと特にありません。大抵の事はある程度できます」

「同じく転校してきましたルイン・F・相沢です。父がアメリカ人でこの蒼い目は遺伝です。祐依さんとは親戚で、今は祐依さんと同じ家に住んでいます」

ルインはあらかじめ決めておいた偽の紹介をする。

「じゃあ。何か質問はあるかい？」

何問か質問に答えて、

「質問はそれくらいにして、じゃあ、祐依さんは一番後ろの席に。ルインさんはその隣に」

「よろしくね」

「ああ。長谷川千雨だ」

「長谷川さんね。これからよろしく」

「ああ。こちらこそ」

偶然か、昨日の女の子の隣の席に。

放課後。

「長谷川さん。一緒に帰ろ」

「ああ」

三人で話しながら、歩いていると、

「なあ」

「ん？ どうしたの」

「どうしました？」

「あんたら、この学園どう思う？」

そう尋ねてきた。

「ん、はっきりに言って異常だね」

「そうですね。私もそう思います」

「そうだよな！ おかしいと思うよな！！」

「ええ。全てを知っている訳じゃないけど、大学部とかの技術とか生徒の身体能力とか一般とか離れているじゃないかしら」

「あんたもおかしいと思ってくれるのか！」

「そうですね」

そう言った話をして、その日は別れる。

18話(後書き)

ルインが絡繰茶々丸っぽくなってきているような…

ヒロインというか、長谷川千雨がまず、仲間に。

お便り待ってます。

19話

side 祐依

ターゲットと偶然隣の席となり、ある程度の交友ができたある金曜日。

「ねえ、千雨ちゃん。明日暇？」

帰り道に尋ねる。

「ああ。特に用事はないが…」

「じゃあ、明日家に来てほしいんだけど」

「別にかまわないけど」

「じゃあ、明日の一時ごろに来てくれる？」

「いいけど、家の場所わかんねえんだけど」

「でしたら、私が迎えにまいります」

「ルイン、お願いね」

「ああ、頼む」

その後、別れて。

「祐依、明日話すのですか？」

「ええ。早いに越したことはないしね」

「戻ったら早速準備しなくちゃね」

「何処まで話すのですか？」

「ん？ 理解できるところまで」

翌日。

孤児院の一室で待っていると。

・ガチャッ

「祐依。お連れしました」

「はい。こっちに連れてきて」

「ようこそ。私たちの家に」

「お前の家って孤児院だったのか…」

「あ、勘違いしないでね。孤児院を経営している方だから」

「何だ。そうなのか」

「今日は大事な話があって呼んだんだけど」

「大事な話？」

首を傾げながら聞き返してくる。

「ええ。けど、もしもの為にこっちに来てくれる？」

「ああ」

とある一室に案内する。

「さ、かけて」

椅子をさして言う。

「お茶を用意するわね」

そう言って、お茶を入れつつ、部屋内の物を少し動かす。

「ッ！」

「な、何だ!？」

千雨ちゃんが驚くような声を出す。

「ああ。気にしないで。害は何もないから」

今やったのは、以前に訪れた世界で教えてもらった日用品を用いて行う魔術の一種で、情報遮断の結界を張っただけである。

「さて、準備もできたから、さっそく本題から入ろうか。千雨ちゃんはこの学園がおかしいと思うんだよね？」

「…ああ」

「だけど、他の人は何も違和感を持たない。それどころか、おかしいのは自分と言われる」

「…ああ」

「その理由を知りたい？」

「わっ、わかるのか!？」

急に食いついてくる。

「もちろんよ。だから呼んだのよ。それを話すためにね」

「頼む。教えてくれ」

「じゃ、直球に言うところには魔法使いの本拠地の一つなのよ」

「…は？」

『マスター、直球すぎます』

ゼロから突っ込みが入った。

「何だ？ 誰だ？」

千雨ちゃんが辺りを見回す。

「あ、紹介が遅れたわね。私の相棒のゼロよ」

『よろしくお願いします』

ゼロを見せながら、紹介する。

「…デバイス？」

「あれ？ よく知ってるね？」

「いや、テレビでよく似たのがあったからな」

「！ ゼロ、今すぐ調べて」

『了解！』

「どうした？」

「ん？ 魔法が知られていると、厄介だから、まあ、便利にもなるんだらうけど…」

「そうか… って。魔法が実在するのか！？」

「え？ デバイスを知っているんでしょ？」

何だろう、話がかみ合っていない気がする。

「魔法って、空想ものだろ？」

「…あれ？」

『マスター。検索終わりました。この世界では、あの世界とよく似た話が物語として存在しています』

「……っえ？」

「マスター…？」

私とルインが呆けることに。

「どうしたんだ？」

千雨ちゃんが呆けている私たちに声をかけてくる。

「あ、ちょっと、処理落ちしちゃったわ。ゼロ、他にも調べてみてくれる？」

『了解』

「ちよつと話がずれちゃったけど、戻すわね。さつき言ったみたいに、魔法は存在するのよ。そしてここ、麻帆良学園は魔法使いの団の本拠地の一つなのよ。その魔法使いたちがばれないように学園全体に認識を阻害する境界が張つてあるのよ。簡単に言えば、おかしいをおかしいと思えなくなるのよ。その認識阻害魔法が千雨ちゃんには何故か聞いていない」

「…そうだったのか…。ってことは、お前らも魔法使いなのか？」

「ん〜？ 答えは是でもあり否でもあるわね。ここの魔法使いたちと同じことはできるけど、私たちがメインに使う物は全く違うもの。それに、ここの魔法使いの組織には属していないしね」

「それで、それを私に話したのはどうしてだ？」

「ん？ それは、千雨ちゃんが認識阻害魔法が効いていないから、どうにかしようと思つたからかな？ 真実を知っているのに偽物扱いされるのって酷いことだからね」

「で、私をどするんだ？」

「案は二つ」

指を二本立てる。

「一つ目は千雨ちゃんに魔法…いや、呪いに近いかな？ その体質を無理やり変化させて、認識阻害魔法が効くようにして、今の魔法

の話をお忘れさせて、普通の暮らしをしてみよう。

二つ目は魔法を知り、全てを知った上でこちら側に入る」

「幾つか質問いいか？」

「どうぞ。今後の人生に大きく影響を及ぼす起点にいるんだから」

「一つ目の案をとった場合、絶対に安全なのか？」

「私が行う体質の変化で及ぼす体への悪影響は皆無よ。けど、魔法使いの根城にいるんだから、当然危険は存在する。忍び込んできた敵対勢力の魔法使いの戦闘に巻き込まれる可能性もあるし、敵対組織との抗争に巻き込まれて、死ぬ可能性もあるわよ」

暫し沈黙し、

「…二つ目の案の場合は？」

「こちら側に引き込む以上、並大抵の敵には負けないようにしてあげるわよ。抗争に巻き込まれても制圧できる程度にね。こちらを選んだ場合、前者よりも死ぬ危険性は激減するわね。魔法も教えてあげるし、アフターケアも完璧よ。だけど、デメリットは自称正義の魔法使いから敵視されるかもしれないことかな？ バレなければ何も問題ないけど。バレてもどうにかなるだろうけどね」

「そんなこと言われたら、選ぶのは決まってるだろ。後者を選ぶよ」

「わかったわ。じゃあ、今から、基本的な魔法の説明するから」

説明を休憩や質問時間をはさみながら、二時間程していたら、

『マスター、検索終わりました』

ゼロからの報告が入った。

「わかったわ。千雨ちゃん。ちょっと待ってくれる？」

「ああ。こつちも情報の整理したかったからな」

「ルイン。質問があったら、答えてあげて」

「わかりました」

『では、報告します。固有名詞などから検索した結果。マスターたちが今までに訪れた世界はこの世界ではアニメや漫画、小説と呼ばれる空想の世界に酷似しています』

「酷似？」

『はい。調べたところ、どの物語もマスターは存在しておらず、尚且つ、物語の終盤に行くほど、異なっています』

「それは、私というイレギュラーの存在のせいね」

『おそらく。マスターの介入によってでしょう』

「それは、まあ、いいわ。おそらく、その世界は平行世界ってことね」

『おそらく。詳細は後でまとめておきます』

「わかったわ。よろしくね」

その後、説明会も終わり、

「千雨ちゃん。明日も来れる？ 明日は、実際にやってみようと思っから」

「わかった。今日と同じ時間でいいか？」

「ええ。あ、これを渡しとくわ」

三日月を模した黒いペンダントを渡す。

「これは？」

「簡易の障壁とか自動で張れるようにした特別性の物よ。まあ、私たちの仲間の証にもなってるんだけどね。情報隠蔽とか完璧だから、できる限り外さないでね。防水も完璧だから」

「わかった。また、明日な」

19話（後書き）

長谷川千雨が主人公組へ。

書いてみてから思う。

絶対に小学一年生の会話じゃない…

千雨もまた、異常だった・・・？

お便り待ってます。

20話

side 祐依

・ピンポーン

「はい、少々お待ちください」

インターホンが鳴り、ルインが対応に出る。
おそらく、千雨ちゃんが来たのだろう。

私は地下室で準備を始める。

「マスター、千雨さんがいらっしやいました」

「はい、地下室に連れてきて」

「こちらへ」

ルインが千雨ちゃんを連れて降りてくる。

「ようこそ。始める前にこれを」

そう言って、ゲームのコントローラーを渡す。

「ん？ 何だ？」

「ちょっとね」

コントローラーを持ったのを確認して、ルインに目配せする。

ー！

ルインが小物を動かすと、結界が張られる。

「もういいわよ」

「何だったんだ？」

「まあ、後でまとめて話すわ。その前にこれをつけて」

ブレスレットを渡す。

「つけたわね？　じゃあ、こっちに来て」

「まだ、どっか行くのか？」

「隣の部屋にね」

隣の部屋にはボトルに入ったミニチュア模型が鎮座している。

「じゃあ、私について来て」

ボトルの前に移動すると、

「な！？ 何だ？ どこだここは！？」

千雨ちゃんが驚きな声をあげる。

目の前にはパツと見、武家屋敷のような日本家屋があり、後ろには自然が開発されずに残っている。

「さっきのボトルの中よ。さあ、とりあえず、上がって」

家の中のリビングに案内する。

「なあ、何で見た目、屋敷みだいだったのが、入ったら全然違うんだ？」

「ん？ 魔法…？」

「何で、疑問形なんだ！」

「冗談よ。別に深い訳はないわ。強いて言うならこっちの方が話易いからかしら」

ルインにお茶を淹れてもらって、

「さあ、説明をしましょうか。先に言うのは、二こと、そのプレスレットね。他の質問は後ね」

「ああ」

「ここは、本当はダイオラマ魔法球という魔法具よ。中と外の時間の流れが違うのよ」

「本当ってことは何か違うのか？ それとどんだけ時間は違うんだ？」

「これは、私たちが特別に改造したもので、時間設定は今は、中の一日が外の五分よ。普通は中の一日が外の一時間で、中で一日過ぎなきゃ出られないって物なんだけど、これは何時でも好きな時に出られるわよ。時間設定はほぼ、自由自在よ」

「それって、歳がすごいことにならないか？」

「あら、良く気付いたわね。その通りよ。ダイオラマ魔法球を多用すれば、それだけ早く歳をとるわよ。だからのさっきのプレスレットよ。あれには着用者に抗老化の作用があるのよ千雨ちゃんに渡したのは単純に抗老化だけで、肉体に何の変化はないわよ。記憶や知識とかの精神的なものには作用しないから、ここで話をする時には重宝するのよ」

「そんなことまで出来るのかよ……」

随分と驚いている。

「じゃあ、他に質問はあるかしら？」

「ん〜、じゃあ、お前は何者だ？ それと、此処に来る前にしたのは何だったんだ？」

「ここに来る前にコントローラーを渡したのは、魔法使いを誤認させる為よ。たまに監視している魔法使いたちには、今頃、あの部屋で、ゲームをしているように見えているはずよ」

「そうか…」

「私の正体は昨日も少し話したけど、大まかに言えば、私たちはこの世界の住人ではない！！」

「…は？」

私の返答に千雨ちゃんが完全に呆ける。

「ん〜、私たちは色々な世界を巡っているのよ。証拠の一つに、ルイン」

「はい、わかりました」

ルインが「黒き月」のペンダントを外す。

「リインフォース…？」

「残念！ ルインの髪や瞳、服装以外はそっくりでしょ？ 彼女は私がかつて、この世界で魔法少女リリカルなのはと呼ばれる物語とよく似た平行世界で夜天の魔導書の防衛プログラムの管制人格だったのよ。似ているはそのせいね」

「・・・」

「続けるわよ。ルインのペンダントには特殊な魔法とかの処理を施してあるから、わからなかったでしょ？ リインフォースとそっくりなルイン、それに昨日も話した、デバイスのゼロ。これが、他の世界の証拠の一つかしら」

「…わかった」

「じゃあ、次に私についてね。世界を巡っているって言ったから想像できると思うけど、年齢も違うわ」

そう言つて、ノア・ミナツキの時の姿になる。

「な!？」

「まあ、これは私だけのチカラだから。ルインは別の方法よ。こればかりは教えないわね。さて、本題に入りましょうか。千雨ちゃんは何になるか」

「ん？ 魔法を教えてくださいませんか？」

「魔法も当然教えるけど、何に特化するとかね。前衛として戦えるようにするとか、後衛でも魔法を放つとか、それとも支援に徹するかとかね」

「あゝ、できたら後衛がいいわ。前衛なんかつとまらんと思つ」

「そうね。後衛にするのね。じゃあ、まずは魔術アルス・マギナ、黄金錬成アウロ・メタモルフィカを

使えるようにしましょうか」

「アルスィマゲナ黄金錬成’ って、どんなどんな魔術何だ？」

「世界に干渉し、自分の思い通り現実を歪める魔術よ。自分の思い通りに現実が歪むのよ。でもそれは、可能と思えば、大抵の事は出来るけど、もし、不可能と思ってしまつと、絶対に実現しなくなつちやうのよ」

「それって、不可能って思わなければ、最強じゃねえか？」

「そうでもないわ。当然、対抗策は存在するわよ。まあ、それについてには後にしておいて、さあ、やるわよ」

一応、屋敷から出て、草原に行く。

「？リンク・キャスター・サモン？」

「お呼びかしら？」

「今から、千雨ちゃんの^{アルスィマゲナ}黄金錬成’の為に準備するから、手伝つて」

「お安い御用ね」

「じゃあ、千雨ちゃん。私が手を挙げたらこれを読んで」

そう言つて、紙を渡す。

「高速神言……………」

私とキャスターが高速神言で詠唱していく。

そして、手を挙げる。

「
」

「よし。キャスター、ありがとう」

「これぐらいなんでもないわ」

そう言っつて、消えていく。

「さて、これで、千雨ちゃんも、アルス・スマグナ黄金錬成、ナが使えるようになったわ」

「どうやって使うんだ？」

「ん〜、じゃあ、『銃』って、想像しながら言ってみて」

「ああ。『銃』」

千雨ちゃんの手に一般的な自動拳銃が現れた。

「おっ、チャンとできたわね。そんな感じに色々なことが出来るわよ。あとは、効果を設定したり…例えば、弾丸は魔弾。効果は障壁突破とか、弾は必中にしたりとか、そこは想像力次第ね。他にも、遠くに瞬間移動したり、空間制御できたり、記憶の操作とかもできるわよ」

「ん〜、大体わかったわ。これって、魔術って言うぐらいだから、魔力とか使ってるのか？」

「そうね。その通りよ。ちょっと、待ってね。千雨ちゃんの魔力量を測るから。…うん。千雨ちゃんの魔力量は今の段階では、この魔法生徒の上位に入るか入らないかぐらいね」

「それは、どれくらいなんだ？」

「ん〜、心持ち頼り無いわね。でも大丈夫よ。慣れば効率的に魔力運営できるようになるし、それにこれをあげるし」

今度は「黒き月」のペンダントを渡す。

「今回は丸いな」

「それは、私の仲間の証だから。大事にしてね。因みに材料に賢者の石モドキを使ってるから、莫大な魔力を秘めてるわよ。他にも色々効果があるから、出来るだけ肌身離さず身に着けていてね。来週末は防衛用にデバイスを作るから」

「ああ。わかった」

「わかってると思うけど、誰にも言っちゃダメよ。ばらしたら、それ相應の事が待ってるから」

「わかってるよ」

「じゃあ、今日はこれくらいにして、あっちに戻って、ゲームでもしましょうか」

「そつだな」

向こうに戻って、ゲームをしたら、ほぼ勝ちました。

20話（後書き）

と言う訳で、千雨の改造計画が始まりました。

まず手始めにとある魔術の禁書目録のアウレオルス＝イザードの黄金錬成です。

お便り待ってます。

21話

side 祐依

あれから数日過ぎ、週末に。

ん？ 学校？

特に何もないわね。

小学生程度の問題なんて簡単すぎる。

専ら、人間観察をしている。

クラスメイトの中には千雨ちゃん同様、何かある人がたくさんいた。何かの才能を持つ人、特異な人間性を持つ者。

まあ、千雨ちゃん程困る人はいなかったけど。違った意味で困る人はたくさんいたけど…

「じゃあ、先週言った通り、千雨ちゃんの防衛用のデバイスを仕上げよう」

「あれ？ 作るって言ってなかったか？」

「ん？ 暇だったから、大体終わってるわ。後は、バリアジャケットとマスター登録ぐらいね」

「名前は何て言うんだ？」

「名前は『ロジック』ね。早速登録しましょうか」

「ああ」

無事に登録が終わり、

「バリアジャケットはどうする？ ロジックは特別性だから、何度でも変更できるわよ」

「ん〜、とりあえず、学校の制服を模したのでいいや」

「そう、じゃ、ロジックの説明ね。待機状態は見ての通り、プレスレット状態ね。起動させると、指輪になるわ。基本は千雨ちゃんを守るための魔法を自動で行うようにしてあるから。あと、任意でリカルなのは魔法も使えるし、ここの魔法使いが使うような魔法のための発動媒体にもなるわよ」

「何か…やり過ぎじゃねえか？」

「やっぱりそう思う？ つい授業中とか暇だったから、考えてたらこうなっちゃった」

「…はあ、授業はいいのか？」

「別に平気よ。分野によっては大学で教授出来るくらいかな？」

「…問題ないな」

千雨ちゃんが呆れたような声を出す。

「じゃあ、実際に試してみようっか」

「いいけど、何処でやるんだ？ また別荘に行くのか？」

「そうね、そうしますか。魔法使いに見られても面白くないし」

そうして、別荘に行き、

「じゃあ、ルイン。軽く魔法で攻撃してみて」

「わかりました。穿て、ブラッディダガー！」

「なっ！？ ちょっと！」

ルインの攻撃に千雨ちゃんが慌てる。

『 protection 』

- ガガガ！

ロジックがバリアを張り、ルインの魔法を全て防ぐ。

「大丈夫みたいね。流石にスターライトブレイカーは防げないでしょうけど」

「絶対にするな!！」

「わかってるわよ。改良してからよ」

「何時かはやるのか!？」

「もちろん　じゃ、今度はなのはの魔法を使ってみる?」

「ああ、で、何が使えるんだ?」

「ん? ルインの協力の下、大体の魔法は使えるわよ。一先ず、アクセルシューターでも使ってみて」

「アクセルシューター!」

千雨ちゃんのまわりに幾つかの魔力弾が作られる。

「操作できる?」

「ちょっと、無理だな。単純に飛ばすだけなら問題ないけど、操作するのはまだ無理だ」

確かに見る限りでは、操作は上手くできていない。

「まあ、それは慣れだから。ロジックと馴染んで来ればもっと楽になるわよ」

そのまま、魔法の練習をさせる。

「じゃ、それくらいにして、今度は『アルス・マグナ黄金錬成』の方に移ろうか」
「わかった」

「前回の例は銃だったけど、剣とかも作れるわよ。剣を飛ばしても面白いわよ」

「大体の事は出来るんだよな？」

「ええ。千雨ちゃんの想像力次第でね。ただ単に相手を殺すだけなら、内から弾ける、って、やればその通りに相手は内側から弾けてほぼ100%殺せるわよ。まあ、そんな状況にならないといいけどね。でもここは魔法使いの根城の麻帆良学園だからね」

「絶対にやりたくねえ！ そんなもん、トラウマ決定だろ！！」

千雨ちゃんが叫びながら言うてくる。

「まあ、今のは極論だから。話半分でいいわよ」

「ああ、わかったけどよ。祐依は何ができるんだ？」

「ん、相沢祐依は何もできないわね。ノア・ミナツキなら何でも出来るわよ」

「どづいつことなんだ？」

「ん？ 基本こういったことは裏の顔というか、ノア・ミナツキって名乗ってるから。で、何が出来るかだけど、接近戦でも遠距離で

もオールOKよ。刀、剣、槍、弓、短剣、銃、ライフル、投擲術、手裏剣、魔術、魔法、錬金術、精霊魔法、呪術、天使術、召喚術、陰陽術、ロボットの操縦……」

「いや、もういい。何でもできるのはわかった」

千雨ちゃんが今までで一番呆れた声を出しながら、止めてきた。

「戦闘じゃないけど、デバイスとかも作れるし、呪物も魔法具も薬も作れるわよ。今、一番はGNドライブを屋敷の地下から行ける、研究所で作ってるわ」

「は？ GNドライブ？」

「そ。GNドライブ「T」は十年以上前にできたんだけどね。GNドライブはあともう少しで完成できそうなところね。今は稼働実験中。安定してるから、これで終わりだと思うんだけどね」

「あのOOに出てくる奴だよな？」

「ええ。みんな元気かしら？」

「お前はどんな世界に行ってるんだよ……」

「さあ？ 幾つだろ？ 数えてないわね」

「はあ、もういい……」

「じゃあ、今日はこれくらいにして、土郎さんの喫茶店に行こうか、奢るわよ」

「あ

土郎さんの経営する喫茶店「NEUE^{ノイエ}」に行き、ごちそうしました。

21話（後書き）

喫茶店の名前は深い意味はありません。

私が好きなゲームの一つの世界の名前です。

もし、他に名前が思いついたら変更するかもしれません。

因みに、千雨のデバイス、ロジックは、インテリジェントデバイスです。

ですが、普段は寡黙で殆どしゃべりません。

管理局が有するどのデバイスよりも超高性能です。

一部はゼロをも上回ります。

お便り待ってます。

22話

side 祐依

千雨ちゃんの特訓を始めて、一月程…

「よし、これぐらいかな？」

「あ？ 何がだ？」

「ん？ 千雨ちゃんの特訓の基礎。次は実践編」

「お前らと戦うのか？」

「ん？ やりたい？」

質問に答えるが、

「やりたくねえ… お前らの理不尽は知ってるからな…」

遠くを見るような目で、そっぽを向く。

「でしょ、じゃ、？リンク・酒吞童子・コンタクト？」

「おお、どうした？ ヨミはん？」

「あ、酒吞さん、ちょっと配下の鬼の力を貸してほしいんだけど？」

「ヨミはんの頼みなら、断る理由はあらへん。好きに使ってえな」

「ありがと。じゃあ、魔力を送るから、テキトウに選んで召喚の準備させてくれない？」

「よっしゃ！ おうい… ヨミはん。準備できたで」

「わかったわ」

呪符を三枚投げ、呪符が煙を上げる。

煙がはれると、そこに三体の鬼がいた。

「酒吞さん。ありがと。また、お酒を届けるわね」

「おお。楽しみにしてるぞ」

「じゃあ、皆さん。千雨ちゃんの実践訓練の協力をお願いね」

「よっしゃ。任せときー！」

「手加減してあげてね」

「大丈夫や」

「さ、始めよか」

「ちょ、ちょっと待って！ー！」

「何？」

先程まで呆然としていた千雨ちゃんが待ったをかける。

「初っ端から、一対三かよ!？」

「大丈夫よ。千雨ちゃんの今の力なら、死にはしないわ。それに手加減もしてくれるし。相手は、私の魔力を基に呼び出している分身だから、千雨ちゃんは本気でOKよ。今の千雨ちゃんがどんな攻撃しても本体には何の害はないから平気よ」

千雨ちゃんを説き伏せ、半ば強引に訓練を始めさせる。

く祐依の呟き

初めは、千雨ちゃんは防ぐこともできず、ロジックの自動防御に守られていた。

鬼たちも加減して攻撃をしているため、怪我は負っていない。

数分後、慣れてきたのか、アルスィマゲナ黄金錬成で反撃に出る。

因みに、身体能力は肉体強化の魔法及び、アルスィマゲナ黄金錬成で強化している。一般人相手なら、簡単に殴り殺せる程だ。

まあ、しないだろうけど。

十分後、何とか、鬼たちを還すことができた。

「まあ、千雨ちゃんの魔術は基本後衛だから、前衛のいない戦闘だところういったもんかしら？」

「はあはあはあ… 私は後衛でいいんだよ…」

千雨ちゃんが息も絶え絶えにそう言う。

「うーん…まあ、何時も前衛がいるとは限らないからね、出来る方がいいのよ。とりあえず、クリアできたから、今日は奢りだ！ 今度、私がつと上の戦いを見せてあげるわ」

いつもの、訓練後の喫茶店、^{ノイエ}NEUE' に行き、お茶にする。

ルインは用事でいません。

GNDドライブ稼働の確認中です。

「まあ、出来るなら、出来た方が自分の為になるからね。さて、明日は、別の方達と訓練よ」

「なあ、それは構わねえけどよ、お前の交友関係ってどうなってるだ？」

「ん？ そうねえ… 人間じゃないなら、殆どに何らかの関係があるわね。妖怪とか、幽霊とか、魔物とか他にもたくさんいるわよ」

「なんでだよ…」

ため息をつかれる。

「大抵は揉め事の関係で、止めに行ったり、その手の伝手で色々依頼されたり、保護したりとか、で知り合ったのから、紹介されたりしてたら、…ねえ」

「ねえ、じゃねえよ！ 意思の疎通は出来るのかよ!？」

「ん？ 大抵は人間が話している内容ぐらい理解してるわよ皆。それに殆どは人間が話す言葉を使えるのよ。さっきの鬼たちもそうだったでしょ？」

「そうだったが、…って、酒吞童子って言ってなかったか？ それと、お前のことを相沢祐依でもノア・ミナツキとも呼んでなかったよな？」

「酒吞さん？ 以前に助けたことがあって、それから仲がいいのよ。それと名前は私が黒き月の代表で、それと最近なら白き月の創設者で現会長だからね。私の事を妖怪の一人（？）が、私が月とつく名前をよく使っているから、月読命からもじって、ヨミって呼んだのが初めかしら。それが広がって、人外の知り合いからはヨミって呼ばれるのよ。それに本人に許可は貰ってるし。」

「はあ、もういい」

千雨ちゃんが諦めたようにため息をついて会話を終わらす。

「話は全く変わるけど、近くのゲームセンターに新しいゲームが入ったから、やりに行かない？」

「いいぜ。この近くのってことは、‘白き月’系列の‘エルシオール’か？」

「ええ。新しい格闘ゲームとか数種類のが入荷されたからね」

「じゃあ、食べ終わったら行くか」

そうして、ゲームセンターに千雨と行くが、そこで予想外の人物と遭遇する。

22話(後書き)

次回、新たな原作キャラが！

三日連続投稿行きます。

お便り待ってます。

23話

side 祐依

白き月の系列のゲームセンター‘エルシオール’に行くど、

「だー！！ 何故勝てん！？」

十歳くらい金の髪の子が新しく入った格闘ゲームの前で叫んでいた。

「じゃ、こつちのレースゲームをやるっか」

なんとなく、関わらないように違うゲームをすることに。

その後、レースゲームの他に音楽ゲームやシューティングゲーム等を楽しんだ。

あの女の子はあの後も数回やっていたが駄目だったらしく、落ち込んで帰って行った。

『マスター』

帰宅途中にゼロが声をかけてくる。

「どつしたの？」

『先程の金色の髪をした女性は』

「吸血鬼でしょ」

『はい。データでは闇の福音 エヴァンジェリン・A・K・マクダ
ウエルかと』

「闇の福音ね〜 よし。明日勝負を挑もう!」

『はい?』

ゼロが呆けるが、ほっというて帰途に着く。

次の日の放課後、

「千雨ちゃん、今日の訓練はお休みね」

「どうしたんだ?」

「ん? 今日はちょっと巷で最強って言われてる吸血鬼に私が挑戦
するから、挑戦状を渡しにね」

挑戦状と書かれた紙を見せながら、言う。

「わかったけどよ、大丈夫なのか?」

「平気よ。彼女を倒して、私が最強よ!」

そう言って、私はゲームセンターに向かう。

店長に前日の内に聞いたところ、エヴァンジェリンは新台が入ると、ほぼ数日は入り浸るらしい。

店内に入ると、昨日と同じように格闘ゲームの前にいた。

私は見学に徹し、終わるのを待っていた。

数分後、ゲームが終わったのが、帰途に着くエヴァンジェリンの後ろを追う。

暫く歩いたところ、

「何のようだ？」

人通りが少ない場所で彼女は振り向きそう言う。

「エヴァンジェリン・A・k・マクダウエル。貴方に今宵挑戦したく思い、文を渡すために追って来た」

私はすぐに姿を現し、臆面もなくそう言う。

「ほう… お前は私の事を知っているようだな。それでも、なお私に挑むのか？ それに正面から挑んでくる。面白い！ その挑戦に応えてやろう」

私は文を渡し、

「場所と時間はそこに書いてある。誰の邪魔も入らないようにしてある。全力をお願いしたい」

「ふん。そこまで言うか。よかるう。首を洗って待っている!」

そうして、エヴァンジェリンと別れる。

s i d e エヴァンジェリン

ゲームセンターからつけられているな…

面倒だ…

誘い出すか。

どうせ、私の事を快く思わない奴だろう。

人通りのない場所に行き、周りを探るが、そいつしかない。

「何のようだ？」

そいつをおびき出すためにそう言つと、

建物の後ろから、小学生くらいのガキが出てきた。

そのガキが私に挑戦を申し込んできた。

私は封印されていて、魔法が十分に使えないが、今夜は満月。吸血鬼の私は、満月の日は多少だが、魔力が戻る。

そいつは魔力は並だった。

私はそいつが真正面から、おくびもなく私に挑戦状を持つてくるような奴で、ゲームで上手くやれて、気分が良かったため、多少なりとも興味が湧いたから、挑戦を受けることにした。

渡してきた文を読むと、

『今宵、十時。‘エルシオール’にて待つ。 相沢祐依』

と要件のみ記した簡潔な文があった。

「ふむ… あの辺りは、白き月系列ばかりだったな。たしか、白き月は魔法世界の戦争後に起業し、独自の商売ルートで、帝国にも連合にも属していなかったな。今は、旧世界でも一、二を争う大企業だったな。奴も関係者か？」

あそこなら、正義の魔法使いどもも文句が言えない地区だからな。

時間通りにエルシオールの前に行くと、奴の隣に二人増えていた。

「わざわざありがとうございます。この二人は一人は、今宵の私の貴方への挑戦のために誰にも邪魔されないようにサポートしてくれる、ルインです」

「よろしくお願いします」

黒髪の方が頭を下げてくる。

「そして、こちらが、私の弟子です。今宵は見学です」

「よろしく」

眼鏡をかけた栗色の髪の子供が頭を下げる。

「ふん。三体一でも構わんぞ」

「え？」

私がそう言った途端、相沢が呆けた声を出す。

「どっした？」

「いや、一対一しかないから……」

「貴様は対一しかしたことないのか？」

「あなたは、一人対多数をやったことがあるの？」

「ああ。当然だ」

「それはどこで？ 白き月系列じゃない？」

「は？」

何か、会話がかみ合っていないな…

「祐依、会話がかみ合っていませんよ」

黒髪の方が私と同じことを考えたようだ。

「ちょっと、整理しよう。祐依は何を挑んだんだ？」

眼鏡の方が相沢に尋ねる。

「ん？ エヴァンジェリンさんは、エルシオールで格闘ゲームの王者だから、挑戦したかったのよ」

「は？」

何と言った？ こいつは…

こいつはゲームを挑んできたのか…

「ややこしいことしてんじゃねえ！ 私はてっきり、魔法戦闘する

のかと思ったじゃねーか。それで参考にしようと思ったのに、ゲームかよ！」

眼鏡の方が、ツッコんでくれた。

side 祐依

「なによ。ゲームセンターの前に呼び出したんだから、ゲームしかないでしょ？」

私は文句を言うが、

「最強に挑むとか言ったら、てっきり、決闘とか思うだろ！」

「それはそっちが勝手に勘違いしただけでしょ」

「私が魔法戦闘の実践に入ったから、上の戦いを見せるって昨日言っただから、普通そっちだと思っただろ！！」

千雨ちゃんと押し問答していると、

「おい相沢、さっきの話は本当か？ ゲームというのは」

「ええ。本当よ。魔法とかは一切関係ないわ」

「そうか… わかったが、紛らわしいことをするな！」

「え、何？ 魔法戦闘の方が良かった？ 闇の福音さん」

「…知っているのか。それで私を倒しに来たんじゃないのか？」

「倒しに来たわよ。ゲームでね！」

その後、色々と揉めたが、無事ゲームの試合が行われ、十五回戦い、六勝・六敗・三引き分け。

「どうする？ リアルファイトでもする？」

なんとなくそう提案すると、

「良いだろう。お前の魔法戦闘を見せて見る！ 弟子がいるぐらいなら、十分強いのだろう？」

「じゃあ、やりましょうか。どこでやる？」

「家に来い。誰にも邪魔されない場所がある」

「じゃあ、行きましようか。千雨ちゃんも来る？」

「ああ。私はそっちの方が本題だったからな」

四人でエヴァンジェリンの家に向かう。

23話（後書き）

原作キャラ二人目。

エヴァンジェリンでした。

繋がりを持たせるためにエヴァンジェリンは暇な時にゲームをやる
といことで、このような話に…

次回、エヴァンジェリンと戦闘です。

24話

side 祐依

エヴァンジェリンの後について行くと、森の中に入って行った。

暫く歩いていると、一軒のログハウスが見えてきた。

「ここだ。入って来い」

エヴァンジェリンが家の中に入っていく。

私とルインが躊躇せずに入ろうとすると、

「おい、大丈夫なのか？」

千雨ちゃんが聞いてきた。

「ん？ 何が？」

「畏とかだよ、相手の本拠地なんだろう？」

「平気よ。あってもなくても。畏ぐらいでどつじにかなると思っつ？」

「いや。思わない」

キツパリと即答された。

家の中に入ると、地下室に連れて行かれた。

地下室にはダイラオマ魔法球が鎮座していた。

「あれって、お前んとこのと同じやつだよな？」

「ん、基はね。私のは手を加えてあるから。一概に同じとは言えないわね」

質疑応答をしていると、

「何をごちゃごちゃ言っている。さっさと来い」

エヴァンジェリンが魔法陣に足を踏み入れ、消える。

「じゃ、行きましようか」

中に入ると、南国だった。

「お前のやつとは全く違うな」

「そりゃ、私のやつは基本は実験、研究、訓練仕様だから。こついったのはまた別のやつよ」

「千雨さん。危険ですから、下がってください」

ルインに促され、二人して下がっていく。

「じゃあ、始めましょうか」

‘倉庫’から、misfortuneを取り出し、左手に構える。
右手にはゼロを扇子の状態で持つ。

「銃に扇子だと？ 変わった装備だな」

「これを甘く見ない事ね」

side other

「行くぞ！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。氷の精霊34頭。集い来たりて敵を切り裂け」

「ゼロ行くわよ」

「了解」

「魔法の射手・連弾・氷の34矢」

『アクセルシューター』

魔法の射手と魔力弾がほぼ中間地点で相殺し合っていく。

「ちっ、やるな」

「<氷結せし刃、鋭く空を駆け抜ける！ フリーズランサー>」

祐依は間髪入れず、魔術を放つ。

「な!？」

さっきの魔法はゼロが主体で行ったため、祐依は術後の隙はほぼない。

エヴァンジェリンが魔法障壁で氷の槍を防ぐ。

『ディバインバスター』

環状魔方陣を4つ生成し、魔法を放つ。

はたから見れば、ビームのような魔法だ。

「くっ！」

障壁のせいで大きなダメージは与えられない。

今の攻撃で、煙幕が上がる。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪 闇の吹雪」

一瞬視認出来なかった隙に先程の魔法の射手よりも強力な魔法が放たれる。

「<炎帝の怒りを受けよ。吹き荒べ業火！ フレアトーネード!>」

吹雪と炎の竜巻がぶつかり合い、大量の水蒸気が上がり、視界を完

全に遮る。

「な！？ 何だこれは！？」

その直後、エヴァンジェリンが驚きの声をあげる。

ゼロがバインドでエヴァンジェリンがを拘束したのである。

「これで終わりよ。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ 貫け、星光 スターライトブレイカー！」

祐依の足下に魔法陣が現れ、周りの魔法の残滓おも集め、収束していく。

巨大な魔力の塊になったモノをエヴァンジェリン目がけて放つ。

「な！？ ぐあああああああゝ」

魔法障壁を張るが容易く破壊され飲み込まれていく。

side 祐依

「ふう」

「ふう、じゃねえ！ やり過ぎだろ！」

千雨ちゃんが突っ込んできた。

「最後のコンボは千雨ちゃんも出来るでしょ？ 参考になればいいかなって」

「お前はどこそその魔王だ？」

「ん〜、現まのかな？」

「お前に勝てる奴はいるのか？ どの勇者だ？」

「勇者って、イマイチはつきりしないよね。他のパーティのメンバーは戦士とか僧侶とかはつきりしてるのにね。勇気を持つ者なら一緒に戦っている皆もそうだよ。勇者の定義って何なんだろう？ 魔王を倒した人？ それだと、パーティのメンバー全員がそうだよな」

「いや、それは今はどうでもいい。ところであの吸血鬼は大丈夫なのか？」

「大丈夫でしょ。ちゃんと非殺傷設定でやったから。そう簡単に死なないでしょ。ショック死は知らないけど… まあ、吸血鬼なら大丈夫でしょ」

その後も問答していたが、

「待ってる間、どうする？ これは中で一日過くさなきゃ出られないタイプだし」

「どうするかな？」

「せっかく南国なんだから、スイカ割でもする？」

‘倉庫’から、よく冷えたスイカと木刀と手拭いとシートを出しながら尋ねる。

「いや、そこまで準備しておきながら、拒否できるか？」

「私なら出来る！」

「自信満々に言われても困るんだが……」

エヴァンジェリンが起きるまで、色々と南国を楽しみました。

24話（後書き）

対エヴァンジェリン戦終了です。

次回、戦後対談？

お便り待っています。

25話

sideエヴァンジェリン

「…！ 奴は？」

相沢の見たこともない魔法で拘束され、障壁を障子紙の如く簡単に突き抜く魔法にやられた…

「そろそろ焼けるわよ」

「どれどれ… おっ、美味しいな」

近くで奴らの声がする。

「む？」

さらにいい匂いと肉や野菜が焼かれる音が…

「って何をやっている！」

side祐依

あ、起きた。

「さすが、闇の福音。バーベキューが食べごろに焼けるぐらいに目をさますとは」

ふざけて返す。

「これぐらいどうってことでは… っで違う!! 何をやっているんだ! お前らは!!」

エヴァンジェリンがノッてからツッコんできた。

「何って… 見ての通り、バーベキューだけど… っは! まさか、さっきの影響で!？」

「やっぱりやり過ぎだったんだよ」

千雨ちゃんもノッてくれた?

「それぐらいわかるわ!! whatではない! whyの方だ!」

「ん〜、お腹がすいたから。 …… 一日も閉じ込めるなんて酷い!」

途中からふざけ出す。

「仕方がないだろう。そういう物なんだからな。外は一時間だからいいだろう」

「で、食べる?」

皿にとりながら、尋ねる。

「頂こう・・・美味しいな」

「千円になります」

「金とるのか!？」

「冗談よ」

その後、バーベキューを食べ終え、

「じゃ、千雨ちゃん。続きをやるつか」

「そうだな」

「ん？ 何をやるんだ？」

エヴァンジェリンに尋ねられる。

「何って… 試作品のゲームのバグ探し&勝負」

「三連勝か、バグを発見したら、願いが叶えられるって」

「何が出来るんだ？」

「大抵の事は。例えば、エヴァンジェリンさんだと、背を伸ばすとか、呪いを解くとか。背を伸ばすとか？」

「何！？ 解けるのか！？ って、何故、身長について二回言った！？」

先程よりも詰め寄ってくる。

「ふふつ。それぐらいわね。エヴァンジェリンさんもやる？」

「当然だ！」

その後、

「何故勝てん！？」

エヴァンジェリンが9連敗してキレている。

「試作品だからね。やったことないでしょ？ これのアイデア出したのは私だから。プログラミングもやってあるからね」

「お前は一体何者だ！？」

「相沢さんは何処にでもいるただの小学生ですよ」

「ただの小学生が私に勝つか？ ゲームにアイデア出すか？」

「ん〜、じゃあ、千雨ちゃんに勝てたら教えてあげよう」

「よし。やるぞー!」

「何、私を巻き込んでるんだよ!」

「千雨ちゃんが三連勝したら、特別会員にしてあげるよ」

「マジか!？ よっしゃあ、やるぞー!」

2人が予想以上にヒートアップしてしまった…

結果。

五戦やって、千雨ちゃんが四連勝したが、最後に接戦でギリギリ破れてしまった。

なので、約束通り、二人との約束を果たすことに。

「じゃあ、千雨ちゃんのは、家に帰ったらやるから、週明けにカードを渡すから」

「ああ」

「じゃ、エヴァンジェリンさんは今回一勝出来たから、私の紹介をしよう」

別荘のリビングに移り、

「何処から話そうかな…?」

「初めから話せ」

「えー、じゃあ、永いからダイジエストで。

- ・魔法世界に落ちる。
- ・龍種に襲われる。
- ・倒す、剥ぎ取る。
- ・近くの村に招待される。
- ・悩みを解決する。
- ・近くの小さな集落を中心に悩み相談をする。
- ・有名になる。
- ・『黒き月』が有名に。
- ・帝国に協力を求められる。
- ・連合に従えと命令される。
- ・帝国には丁重に断る。
- ・連合は無視する。
- ・戦争に巻き込まれる。
- ・迎撃する。
- ・紅き翼に襲われる。
- ・テキトーにあしらう。
- ・ジャックに襲われる。
- ・髪を筆る。
- ・紅き翼のストーキングに遭う。
- ・面倒になって、一時協力する。
- ・グレートブリッジ奪還作戦に参加。

- ・紅き翼から離れる。
 - ・完全なる世界に度々襲われる。
 - ・全てやり返す。
 - ・最終決戦に参加。
 - ・復興中に‘白き月’を企業。
 - ・語られない歴史に参加。
 - ・紅き翼について行って、旧世界の京都へ。
 - ・‘白き月’の旧世界進出。
 - ・‘白き月’の拡大。
 - ・麻帆良近くに孤児院を建て、住み着く。
 - ・麻帆良で、千雨ちゃんを発見。
 - ・巻き込む。
 - ・鍛える。
 - ・ゲームセンターで、エヴァンジェリンさんを見
かしたら？」
- ざっくり説明すると。

「突っ込みどころが満載なんだが……」

「お前のことが、さらにわからなくなっただが……」

2人が呟く。

「じゃ、質問いいよ」

「結局、お前は何者なんだ？」

「ん、錬金術師、魔術師、魔導師、魔法使いで、武器は何でも使える。科学者。白き月の創設者。黒き月のリーダー。魔法使いには

魔法具などは売っているけど、協力的ではない。事と金額次第で手を貸さないことはない。正体を隠している」

「…」

千雨ちゃんには以前に多少説明したので、そこまで驚いていないが、もっとも、事の大きさがわかっていないだろうが…

エヴァンジェリンは絶句している。

「私の事は誰にも言わないでね。言ったら…ねえ」

顔を半分、ゼロで隠しながら言う。

「ねえって何だ？」

「因みに、私には不死相手でも関係ないわよ。不死殺しだってあるし、他にも手段はあるからね」

「わかった」

「じゃあ、今日はここまでで、寝ようか。まだ何かあったら、明日以降にね」

そうして、話を終わらせる。

25話(後書き)

お待ちしております。

26話

side 祐依

別荘内での翌日。

24時間まで、まだ数時間があるので昨夜に続き質問を受けることに。

「で、結局お前は何者なんだ？」

「異世界人よ」

真実をあつさり話す。

「…は？」

「祐依の言うことは本当だぞ」

千雨ちゃんが、私の話を肯定してくれる。

「昨日の戦闘で見たろ？ 祐依が使っていたのを」

「ああ、確かに600年生きてきて見たことのない魔法だったか…」

「そ。私はこの世界の生まれじゃないのよ。もちろん、魔法世界でもなくてね。最初は事故だったんだけどね、一度異世界に行っただけから、そこから色々な世界に行ってるわけ。まあ、どこに行くのか

はわからないんだけどね。同じようなことをできる人に聞いたら、その人は、平行世界の運営って言ってたわね。他の人を連れて行くことはできないんだけどね。」

「あ？　じゃあ、ルインはどうしてだ？」

「ん？　ああ、世界を渡るときはユニゾンしてるから、一緒に渡っているのよ。で、話は戻るけど、色々な世界を巡っているから、見たこともない魔法や技術を持つてるのよ。まあ、私の本職は錬金術師なんだけど。それに、魔法じゃなくて魔術がメインだけだね。」

「魔術だと？」

「そ。まあ、この世界の魔法と大して変わらないんだけどね。もっとも、使えるのは私たちだけだけだね。」

「貴様も使えるのか？」

「あ？　私は魔術は一つしか使えねえんだよ。それと、私が使うのはまた違う世界の魔砲らしい。」

「魔砲？　魔法とは違うのか？　相沢は一体どれだけの引き出しがあるんだ？」

「魔砲って言うのは、さっきみたいにエヴァたちが使う魔法じゃないくて、で、見た目が魔砲っぽいからね。それで区別するためよ。で、まだ何か質問ある？」

「本当に私の呪いが解けるのか？」

「ん、やってやれないことはないかもしれない。解いて欲しいの？」

「はつきりしろ！！ それと当然だ！ ナギは三年経ったら解きに
来ると言っていたのに、8年も経っているのに未だに来んのだ！」

「あ、それならいいか。じゃあ、ちょっと待って」

エヴァンジェリンの呪いの解析をし、私は四枚の紙を用意する。

「じゃ、一枚引いて」

「何だこれは？」

「ん？ 解く方法の選択」

「四つもあるのか!？」

エヴァンジェリンが驚いた声を出す。

「いくらでもあるわよ。とりあえず、四つ、ランダムに選んでみた。
だから、一枚引いて」

「はあ、わかった」

ため息をつきながら、一枚引く。

「どれどれ… あ、メンドクサイの引いたね。まあ、これが一番
偶然っぽく処理できるけど」

「何だったんだ？」

「ん？ 『お百度参り風』よ」

「さっぱりわからないんだが…」

「じゃ、確認するけど、呪いは登校地獄の呪いとさらにその上にエヴァンジェリンさんの魔力を麻帆良を覆う結界に送っているのいいですね？」

「は？ 貴様今何て言った。 登校地獄の呪いだけではないのか？」

「ん？ 気づきませんでしたか？ 登校地獄の呪いはかけられた人物を登校させる呪いですよ。元は学校に來ないサボリの生徒に使う発案者はどう思ったのかイマイチわからない呪いだけど、それだけです。魔力を封印するなんて登校地獄の呪い上ありませんよ。いくらあの馬鹿ナキが魔力任せに強引にかけたとはいえ、魔力を封印なんて登校地獄の呪いの術式上あり得ませんよ。どうせ、自称正義の魔法使いが勝手にやっているんでしょうけど…」

「あいつら!!」

エヴァンジェリンが怒りで震えている。

「当然、それも解くわよね？」

「当たり前だ！」

「じゃあ、実行するのは来週末ね。準備があるから。それと当然、呪いを解くには代償があるわよ」

「…何だ？」

「あ、警戒しなくてもいいわよ。ただ、数時間の苦痛を受けてもら
うけど」

「どづいうことだ？」

「それは来週の金曜日に詳細は説明するわ。まあ、死ぬことはない
わ」

その後、簡単な説明をして、時間になったので魔法球から出て、帰
宅することになった。

26話(後書き)

次回、エヴァンジェリンの呪い、封印を解きます。

お便り待っています。

27話

side 祐依

エヴァ（長いから、そう呼ぶことに）の呪いを解くために詳細を説明し、週末になり実行することに。

現在、打ち合わせ通り、‘エルシオール’の帰り道。

「だから、あれは一旦、攻撃を止めて…」

「いや、あそこは一気に攻めるべきだ」

エヴァとゲーム談義をしながら歩いていると。

- キキッ

車が一台横に停まる。

「あら、祐依。今帰り？」

車窓から顔をのぞかしたのは、紫色の髪を伸ばし、眼鏡をかけた女性。
ライダーさんだった。

「はい。丁度今、‘エルシオール’で新記録を出してきたんです」

「そう。それはよかったわね。そうだ！ 乗ってく？ 孤児院までなら送って行くわよ」

「良いんですか？ あ、でも…」

そう言つて、エヴァの方を見る。

「あ、新作のゲーム。あなたの部屋に届けておいたわよ」

「えっ！ 本当ですか？」

「ええ」

「ぜひ、お願いします。乗せて行って下さい。エヴァも行こ！ ガ
○ダムシリーズの最新作だよ」

「何！？ それは本当か！」

先程まで、ガン○ムのゲームをやっていたのだ。
エヴァも当然食いつく。

そして、ライダーさんの運転する車に乗り込む。

しばらく走つて、麻帆良の境界を越えた途端、

「うっ！」

エヴァが突然苦しみます。

「何！？ どうしたの！？」

「祐依、直ぐに病院に連れて行くわよ」

エヴァの突然の体調の急変にライダーさんも一瞬慌てるが、すぐに気を持ち直し、そう提案する。

「わかりました」

そうして、進路を麻帆良の外にある、'白き月'系列の病院に変更する。

理由は単純にこちらの方が近いからだ。

病院に着くと、直ぐに診察が行われるが、原因不明。

病室に移され、そく入院に。

ライダーさんが担当医から話を聞いて、私にも説明してくれる。

「よしー！」

私はある考えを実行する。

「ライダーさん。ちょっと、出てきます」

「構わないけど、どうしたの？」

「この前、教えてもらったお百度参りしてくる。お医者さんにわか

らないなら、神様に頼るんだよ」

そう言っつて、病院を後にする。

近くにある、'白き月'が管理している神社を訪れ、さっそく始める。それほど大きいわけではないので、一回にかかる時間はそう永くはないが、百回も行うので、時間がかかる。

顔見知りの神主さんたちに協力してもらって、数を数えてもらう。

数時間かけて終わると、疲れ果てて、終わるとほぼ同時に倒れてしまう。

神主さんに助け？られて、居住スペースのある部屋で休ませてもらう。

sideエヴァ

麻帆良を出た途端、激しい痛みが体中にはしり、倒れてしまい、病院に運ばれる。

麻帆良を出たことが原因なのだが、痛みのせいで伝えることができない。

その病院で診察を受けたが、一般人の医者では原因はわからない。そのまま、入院させられてしまい、点滴を打たれ、薬のせいも眠ってしまっ。

夢の中で、相沢のような奴が出てきた。

ようなと言っのは、容姿が違っただからだ。

歳は二十歳前後であっだ。

何より違っのは、若干体が透けていた。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。あなたの呪いを解きましょう」

そう言って、私の額に触れると何か私の中に入ってくるような感じがした。

それが一分ほど続き、

「終わりました」

そう言っど、手を放した。

「お前は何者だ？」

「私は、少女の願いが叶ったモノ。あなたを助けて欲しいと願い、私はその願いの結晶です」

そう言っど、さっさと消えてしまった。

目を覚ますと、

「な！？ 呪いが…」

本当に呪いが解除されていた。

病室を見渡すと、ルインが壁際の椅子に腰かけていた。

「目が覚めましたか？ それと、体調はいかがですか？」

「ああ、問題ない。それよりも祐依は？」

「祐依でしたら、今は神社の一室で寝ているそうです。神社でお百度参りをした後、過労で眠ってしまったそうで、保護されていると孤児院に連絡がありました」

「そうか… ところで、何故貴様がここにいる？」

「あなたの様子を見るためと、連絡役です」

「そうか… 祐依のおかげか…」

「では、目が覚めたようなので、連絡してきます」

そう言って、ルインが部屋を出て行く。

「ふっ、相沢祐依か…」

そう呟きながら、窓の外を見る。

27話（後書き）

祐依のキャラが違いますけど、今回は魔法使いに見せるための演技です。

ルインもエヴァもライダーも医者も神社の関係者も全員、台本通りの行動です。

これで、エヴァの呪いが解かれました。

15日の正午に一話あげます。

お便り待っています。

28話

sideエヴァ

「と言うのが、私の呪いが解けた理由だ」

次の日、ジジイに呼び出され、事情の説明をさせられた。

事前に打ち合わせをした通りの説明をする。

「ふむ…解けたのか」

「ああ」

「それで、お主はここから出て行くのかの？」

「出て行ってもいいが、それよりも相沢に興味をもった。あいつのクラスにするなら、とどまってやる。まあ、夜の仕事も手伝ってやる。なんせ、全盛期の魔力が戻ったのだからな」

魔力を少し洩らせ、脅迫しながら交渉する。

「……………」

ジジイが何やら考え込んでいる。

「…わかった。お主の要望を受け入れよう。警備をしてくれるなら、こちらでも安心できるからの。ただ、攻撃をしてこんでくれるかの？」

「いいだろう。だが、そちらから攻撃してきた時は知らん。正当防衛だからな。まあ、よほどのことが無い限り殺しはしないだろうよ」

「わかった。来週に転校するようにしておこう」

「ああ。ではな」

約束を交わしたので、もうここには用は無い。さっさと帰って、ゲームの特訓だ。

side 学園長

「ふむ… エヴァの封印が解けてしまったのか…」

まあ、引き続き警備をしてくれるならまあ、いいかの。

エヴァの魔力が戻ったなら、全盛期の力を出せると言っておったから。

それなら、今まで以上に警備は安心じゃの。

まあ、負担を掛けすぎたら怖いがの…

「それよりも問題は相沢祐依じゃの」

エヴァの呪いだけでなく、わし等が施した封印まで解除してしまうとは…

エヴァの話の通りだと、無意識らしいがの…

それは、彼女の力なのかの？

今まで、‘白き月’の創設者の養子じゃから、警戒していたが、予想を遥かに超える事態を引き起こしたの…
彼女を今まで以上に警戒するべきかの…

「ふむ… 彼女は既に魔法を知っているのかの？」

知っているなら、引き込む計画を早急に練らねばならないのう。

「タカミチ君と弐集院君に探ってもらうかの」

side 祐依

エヴァが学園長との対話が終わり、

「エヴァ。OK!」

エヴァに盗聴器を持って行ってもらい、対話を全て聞いて、台本通り進めてくれたのでOKを出す。

「ところで、本当に小学一年生からやるの？」

「ああ。お前と同じ方が面白そうだからな」

「まあ、エヴァの容姿なら問題ないかな？」

「うるさい！ 真祖なんだから、これ以上成長しないんだ！ 不老

不死だからな…」

「それはともかく、エヴァって麻帆良に八年もいたんだよね？ だったら、正義バカじゃない、魔法使いじゃなくてもいいから、面白い人いなかった？」

不憫に思えてきたので、話題を変え、

「そうだな… 確か、中等部に幽霊がおったぞ。50年以上浮遊霊をやってるらしいぞ」

「何！？ それ、本当！？」

エヴァから、予想以上のネタを提供され、食いつく。

「よし、会いに行こう！」

「だが、中等部に小学生がいけないぞ」

「ふっふっふ。もうすぐ学園祭があるでしょ？ それで麻帆良小等部はエスカレーター式でそのまま中等部に上がるんだから、見学に行ってもおかしくないでしょ？ その時に探して会ってみよう」

「ところで、祐依は魔法使いとばらすのか？」

「いや、素質はあるけど、実際には知らないと装っわ」

「だが、正義の魔法使いは探りにくるぞ」

「平気よ。うちは、白き月」の要人がいるんだから。下手な探りだ

と、逆に捕まるわよ。それに一度捕まえてしまえば、光の月に載るから、魔法使いがどうすることもできないからね。検察にも知り合いがいるから、速攻裁判よ」

「それもそうだな。だが、度々結界を張っているとばれるぞ」

「ああ。それなら、エヴァ。今度流して欲しい情報があるんだけど」

「ん？ 何だ？」

「私が時々張っている結界は日用品の配置が偶然、魔術的意味を成して、その結果が結界だった。」と

「どう言うことだ？」

「ん？ 私がよくやってるのが、今話した通り、日用品、魔法に全く関係のない物を使って、魔術を行使してるのよ」

「そんなモノまであるのか…」

「色々あるわよ。これは、以前に訪れた世界で教えてもらったのよ」

「まあ、いいが…」

「じゃあ、よろしくね。で、これからどうする？」

「ふっ、決まっている。リベンジだ！」

「じゃあ、やるっか」

そうして、エヴァとゲームの対戦をやった。

28話（後書き）

現在、エヴァの封印が解けたと知っている自称正義の味方は、学園長と高畑教員のみです。

他の人にはばれないように、誤認用の魔法具を学園長が白き月に高額をはたいて、作ってもらい、エヴァに身に付けてもらっています。製作者は言わずとも、祐依ですが。

15日の正午に一話あげます。

お便りまっています。

side 祐依

麻帆良学園の学園祭の時期がやってきました。

小等部一年生は巨大な学園に慣れるために一日目はクラスの発表はなく、グループに別れ、先生やボランティアの保護者が連れて学園祭をまわることに。

入学早々に遠足を兼ねて麻帆良を回る行事があったそうさ。(千雨談)

が、今回はイベントなので、再度、回るそうさ。

「何？ このメンバー…？」

当然、グループなのでしっかりとした人を各グループに配置しようとしたのは、先生の手伝ってくれる保護者への配慮なのだろうが…

麻帆良には、色々な意味を含めて、普通の人は殆ど皆無である。

「はぁ…面倒だ…」

トラブルには事足りないメンバーがそろってしまった。

だが、手伝ってくれている班員の誰かのだろう保護者には迷惑を掛けたくないので、ギルさんほどではないが、カリスマを発揮し、トラブルを起こさない程度に纏める。

その甲斐あつてか、私の率いるグループは大事なく一日は終わった。

二日目。

二日目以降は自由に行けなかったところを回れるらしく、グループでも個人でも構わないらしい。
なので、いつものメンバーでまわることに。

「で、どうするんだ？」

千雨からの質問。

「ん？ 私は夕方以降に中等部に行きたいだけだから、何処か行きたいところある？」

「こういう時は、この麻帆良の異常性が役に立ちますね。この世界ではオーバーテクノロジーがあつて、時間つぶしには事足りませんから」

と、ルイン。

「私は今更だがな。八年もいると厭きたわ」

と、エヴァ。

「ケケケ、オレハ、酒ガ飲メレバイインダケドヨ」

エヴァの封印を解いたために魔力の供給が出来るようになったので、動くことが出来るようになったエヴァの従者のチャチャゼロがルインに抱かれながら、そう言う。

「いや、学生の祭りで酒を出してるとこなんて無いだろ」

千雨のツッコみ。

「じゃあ、チャチャゼロには今晚特製の100年もののワインをあげるから、それまで我慢ってことで」

「オツ、ソリヤイイナ。楽シミニシテルヨ」

「で、何処に行きましょうか？」

「じゃあ、千雨がエントリーしようか悩んでた、麻帆良祭？コスプレコンテストに行こっか」

「な!?!」

千雨が一瞬で顔を赤くし、慌てる。

「一位を当てたら、?球プレゼント」

「?球とはなんだ?」

と、エヴァからの質問。

「?球から?球まで書かれた球を全て集めると、龍のようなものが現れて願いを一つ叶えてくれると言ー」

「どこのドラゴンボールだ?」

最後まで言う前に千雨に突っ込みを入れられた。

「私特製だ! 三日前に作ってみた」

「願いはどんなものでも叶うのか?」

「ん? 常識的なモノだけに限定してみた」

「お前の常識が私たちとかけ離れてる気がするんだけどよ」

「大丈夫。ルイン監修の下作成したから」

「大丈夫なのか?」

「はい。私の知識を基に作成しましたから」

「…例えば?」

千雨が疑うような眼差しで聞いた来た。

「宝くじの十万が当たる。宝くじの五万が当たる。宝くじの一万が当たー」

「宝くじばっかじゃねえか!」

「失礼ね。他にもスクラッチくじが当たー」

「大して、変わんねえよ!!」

「ん〜、千雨ちゃんなら、特別会員から、さらに上位のプレミアム会員になるとか、エヴァなら、背が伸びるとかかな？」

「何!?!」

2人が食いついてきた。

「ケケ、酒モアルノカ？」

「ええ。もちろん」

『さっさと行くぞ!!』

皆が乗り気になってよかった。

結果は、正解者はアニメなどに詳しい千雨が勝ち取った。
私は今回は非参加だった。

その後も、体験型のクラス展示に色々参加して、争奪戦が盛り上がっていた。

29話(後書き)

学園祭って、何がありますかね？

うちは特に特徴のないモノばかりです。

お便り待ってます。

30話

side 祐依

麻帆良際の一日目が間もなく終わりを告げるころ、私たちは中等部の校舎に足を運んでいた。

以前、エヴァが言っていた幽霊を探しに来たのだ。

「で、エヴァ。その子の特徴ってわかる？」

「一言で言えば、一目でわかる。名前は確か…相坂さよと言ったか」

「そりゃ、どういふことなんだ？」

「ああ、姿が透けていて、宙に浮いているのだ」

「うーん、わかりやすいわね…」

「まあ、周りの連中は気づいておらんかったがな」

「気づいていたら、大騒ぎになるでしょう」

「でもさ。中等部にもエヴァ以外の魔法生徒はいなかったの？」

「いや、数はそう多くはないが、それなりにはいたぞ」

「はあ…」

「どうしたんだ？　ため息何てついて？」

「ん？　いや、最近の魔法使いの質の悪さにね……」

「どう言うことだ？」

「籍があるってことは、学園長は知っているんだろうけど、他の魔法使いの連中はその相坂さんに何もしないってことは、気づいてさえいないってことでしょ？　自称正義の魔法使いの連中は、そう言ったのを喜々として倒そうとしてたことがあるからね」

「祐依は知ってるのか？」

「ん？　私？　当然知ってるわよ。そう言った現場に何度か鉢合わせして、自称正義の魔法使いを気絶させて、幽霊と対話したこともあるし」

「何で幽霊と対話してんだよ？」

「まあ、基本、成仏させてあげてたけど。自称正義の魔法使いは消滅させてお終いだから。救わずに一方的にやって、『はい。お終いだからね。そんなだったから、キチンと成仏させてあげてたのよ』」

「何かもう、魔法使いって呆れて何も言えねえな」

千雨が呆れている。

「そう言えば、エヴァは誇りある悪の魔法使いって言ったよね？」

「ああ。あんな連中と一緒にされては適わんからな。もっとも、連

中が私を一方的に悪呼ばわりだけだな。最近だと魔法世界であった大戦をよく知らん奴らは、黒き月も悪呼ばわりしているがな」

「黒き月って、祐依たちの団体の名前だったよな？ 戦争を終結させたって言う」

「名前はあってるけど、正確には戦争には殆ど関与してないけどね。まあ、戦争の黒幕との対話で計画を一旦止めてもらったぐらいで、連合にも帝国にも関係ないけどね。で、連合のお偉いさんにはほとんど嫌われてたから、何時かはこうなると思ってたけどね… そうね… 千雨やエヴァも一緒にいるし、名前を変えよっかな… まあ、とりあえず、‘影の月’でいっかな」

連合の管理する魔法学校で次期自称正義の魔法使いにそういった教育（洗脳）をしているのは白き月にスパイとして潜り込もうとしていた魔法学校の卒業した奴から聞き出した。

因みにそいつらは現在、学校での洗脳を解いて、白き月で立派に働いている。

真実は教えていないが。

話は戻り、

「見つからないな」

中等部の校舎を歩き回って結構だったが、一向に相坂さんが見つからない。

「エヴァ。相坂さんのクラスってわかる？」

「同じクラスだったからわかるが…？」

「よし。なら、案内して。そこから、相坂さんの霊魂を探すから」

「わかった。こっちだ」

エヴァに案内され着いたのは二年A組。

Aクラスの発表は体育館で劇を行ったそうで、クラスには何もなかった。

「で、エヴァ。席ってわかる？」

「窓際の最前列だ。そこだけ何時も空席だったからな。そこによくふわふわと浮かんでいた」

「ありがとう」

机に手をついて、解析をして彼女の霊体の痕跡を調べる。

一分ほど経って、

「よし。あとはこれを基に探すわね。時間がかかるかもしれないから、一応今日はここで解散ということだ。あ、エヴァの家には八時ごろにチャチャゼロ用の例のブツを持っていくから」

「わかった。けど、私もその時間帯ぐらいに行ってもいいか？」

千雨がエヴァにそう尋ねる。

「構わんが、どうした？」

「あゝ、ちよつとエヴァン家の別荘を借りたんだ」

「何がしたいんだ？」

「さっきの祐依の話を聞いて、ちよつと自称正義の魔法使いに対するための手段の練習に」

「何かあつたの？」

「いや、何か、ここの魔法使いがヤバいモノに思えてきたから、對抗するためにちよつとな。そもそも、私が魔法を知ったのはこの奴らの所為だし。身を守るようにと」

「いいぞ。それぐらいならいくらでも使え。多少なら相談にも乗るぞ」

「ありがとう。その時は頼む」

そうして、エヴァと千雨が去って行って、

「さて、始めますか？リンク・ナズーリン・ロード？」

ナズーリンの「探し物を探し当てる程度の能力」で搜索を開始する。

30話(後書き)

次回こそ、相坂さよが登場します。

お便り待っています。

31話

side 祐依

麻帆良に生息？しているらしい幽霊を探して、夕暮れになってあかね色に染まる道を歩く。

学園祭で人がまだ多くいるので、ネズミを使っておおっぴらに探すことはできないから、近くの出店が出している机について地図を取り出してダウジングで探すことに。

彼女の霊魂の特徴は既に知っているので探すのは苦ではないが、チヨロチヨロと動きまわっている。

ダウジングの示す情報と昨日、今日とで麻帆良を回って見た情報を照らし合わせてみると、共通点が出てきた。

・・・明るい所や人が多い所にいるなあ

それはともかく、会いに行こう。

日が沈み、辺りが暗くなった頃、コンビニの前でようやく見つけた。

「こんばんわ。相坂さよさん？」

「えっ！？ 私が見えるんですか？」

突然声をかけられて驚く浮遊霊。

「見えなかったら、声かけられないでしょうが…」

ため息まじりにそう返す。

「そう言われるとそうですね。えと、初めまして。幽霊をやってる相坂さよです」

「こちらこそ初めまして。一応この小等部一年に通ってる相沢祐依よ」

とりあえず、自己紹介を済ます。

「一応ですか？」

「ええ。詳しい話は後でいい？ 待ち合わせの時間がそろそろだから」

「あ、はい。えと、何処へ行くんですか？」

「相坂さんの元クラスメートのエヴァの家よ」

「知り合いなんですか？」

「ええ。色々あってね」

道すがら色々と質疑応答を繰り返してエヴァの家へ。

「へへ。さよさんはもう50年以上も幽霊やってるんだ」

「はい… どうして幽霊をやっているのかも覚えていないです…」

「あちゃ〜、それじゃ、成仏できないわね…」

「はい… 最近は何が怖くてコンビニとか、明るいところにいるんです」

「そうなんだ。っと、此処此処。エヴァ。入るよ」

「ああ。あいているから、入って来てくれ」

「こんばんわ」

「お邪魔します」

私は知っているから、堂々と入る。

相坂さんはオドオドしながら入っている。

「よ。祐依。見つかったのか？」

「あ、千雨。当然よ。さあ、さよさん。紹介お願い」

「わかりました。ここです50年ぐらい幽霊やっている相坂さよです」

「私は長谷川千雨だ。お前の隣の祐依の弟子をやっている。魔術使

「兼魔砲使いだ」

「魔術使い…ですか？ 魔法使いじゃなくて？」

「あら、さよさんは魔法使いをしているの？」

さよさんの発言に疑問を持つ。

「あ、はい。50年幽霊をやっていますから、麻帆良の色々なことを見てきましたから」

「そうなんだ。じゃ、質問はあとにして、エヴァ」

「ああ。私はエヴァンジェリン・A・k・マクダウエルだ。久しぶり、か？」

「えと、エヴァンジェリンさんは、私のこと見えてたんですか？」

「エヴァで構わん。今日ほどではないが、たまに見える程度だったかな」

「そうだったんですか。それはともかく、よろしく願いします」

「ところで、エヴァは見えない時があったの？」

「ああ。今日は魔力が結構満ちているからな。だから、いつもよりも見えるんじゃないのか？」

「そんなものなのか？」

「そうじゃない？ あゝ数年後にある22年おきの神木‘蟠桃’の発光する時よりは及ばないけど、満ちているからね」

雑談？を混ぜながら自己紹介をして、

「じゃ、皆の自己紹介がすんだところで、さっきの質問に応えようか。千雨が魔術使いって言ったのは、此処の自称正義の魔法使いとは区別するためかな。まあ、この連中とは使う魔法は違うし、基本は魔術に分類される錬金術を使うからね。それに所詮は道具や手段として使っているから」

「違うんですか？」

「ああ、こいつらの使うのは、私たち魔法使いとは全然違うな。初見なら余程のことが無ければ対処できないくらい非常識なものだからな。まあ、殆どの奴らは知っていても無理だろうがな」

「エヴァ、それは言い過ぎじゃない？」

「何処がだ！ 吸血鬼の真祖を普通に殺せる攻撃を当たり前に使ってくるじゃないか！」

エヴァが、怒りを振りまいている。

「そっか、千雨。やっとエヴァを殺せるたおせるぐらいにまでなったんだ」

私が弟子の成長に喜んでいると、

「おい、今、倒すの字がおかしくなかったか？」

「気のせいよ、気のせい。さて、本題に入りましょうか」

ふざけるの止め、裏の顔。

ノア・ミナツキと切り替える。

エヴァが張っている結界の内側にさらに幾重にも結界を張り巡らせる。

そして仮面を身に着け、姿を変える。

「では、相坂さよさん。改めまして。ノア・ミナツキです」

「え？ あの、祐依さん？」

「ああ、今のこいつは裏の顔、ノア・ミナツキだ。さっきまでの祐依とは、別人だと思え」

エヴァが、そう補足する。

「今日、さよさんをここに招待したのは、あなたの今後についてよ」

「えと、どういうことですか？」

「さよさんは、今、浮遊霊をしているとエヴァに聞いて、これからどうするのか。よ。本当は、成仏してもらうつもりだったんだだけ
べ...」

「何かあったのか？」

「それが、私、どうして幽霊をやっているのか覚えていないんです」

「だから、現世に残っている未練がわからない。さすがにそれだと私でも成仏させれないのよ。かと言って、このまま放置していると自称正義の魔法使いがさよさんを消しにくるかもしれないからね」

「正義の魔法使いが、ですか？」

「ええ、自称正義の魔法使いはさよさんみたいな幽霊は話を聞かずに消そうとする奴らが多いからね。成仏じゃなくて、消されるんだから、救われないのよ。だから、これかをどうするか」

「えと、何か選択肢はあるんですか？」

「直ぐに出てくる案は三つ」

指を三本立てながら言う。

「・このまま、過ごして何時か自称正義の魔法使いに消されるのを待つか。

・悪霊に堕ちるか。

それか……」

「まだ何かあるんですか？」

「ええ。もう一度、人間をやる？」

「え？ どういうことですか？」

さよさんの疑問の声をあげる。

「私はこれから、人間と同じように成長するホムンクルスの生成実験をするんだけど、そのカラの肉体に事故が起こって、さよさんの魂が巻き込まれるかもしれないのよ」

「蘇生は禁じられているぞ。魔法使いを敵に回す気か？」

エヴァがそう口をはさむが、

「何言っているのよ。私は成長するホムンクルスの器を作るだけよ。その過程で偶然浮遊霊のさよさんが実験の事故に巻き込まれて器に入っちゃうのよ」

エヴァの物言いにしれっと答える。

「てか、それって、わざと起こす気満々だろ!？」

「気のせいよ。あくまで不慮の事故よ。それで、さよさん。どうする？ ちなみに事故が起きた場合、その後の保障もバッチリよ」

「それって、既に答えが出てますよね… あの、実験をして下さい」

「わかったわ。と言う訳で、今から実験を行うから見たい人は？」

「そんな。見たこともない技術見たいに決まっているだろ」

「ホムンクルスってことは、錬金術だよな。私も興味があるな」

「て、事は、全員参加だね。じゃあ、今から私の別荘に行くから。ラインが既に準備しているから」

「あ、いないと思ったら…」

「じゃ。行くわよ。？リンク・八雲紫・ロード？」

スキマを開いていざ、別荘へ。

31話(後書き)

相坂さよの加入です。

お便り待っています。

32話

side 祐依

「さて、さつさと始めますか」

人間と同じように生活し、成長することができるホムンクルスの錬成を始める。

ホムンクルスの意思を作らないことにより、肉体に対する細工を事に細かに細工することが出来る。

本来の作り方だと、肉体の寿命が短いと、試験管の中から出ると死んでしまうぐらい短くて、長くても人程長く生きられない。

なので、始めのうちは調整のために手がかかるけれど、キッチンと調整さえ終われば人として生活することが出来る。

まあ、堕ちていない魂がいるから出来ることなんだけどね。

ルインはじめ、見学の人は、部屋の外、ガラスを隔てた向こう側にいる。

念には念を込めて、錬成陣から一から丁寧にやっていく。

数分かけて錬成陣を描き上げて、材料をセットしていく。

「さて、さよさん。始めるから、部屋に入ってきて」

「わかりました」

この部屋には入口はない。

失敗の時のためにこの部屋を隔絶している。

中に入るにはスキマを使うか、さよさんみたいに壁を通り抜けてくるしかない。

さよさんが錬成陣の上に浮かぶのを確認し、錬成を始める。

「つく！」

通常の本ムンクルスの錬成とは異なり、膨大な魔力の奔流が部屋を駆け巡る。

「な！？ おい大丈夫か！？」

千雨の声が聞こえる。

…何故か、この部屋は隔絶しているはずなのに、声などは簡単に届き、会話ができる。

周りの声は全て無視し、錬成に集中する。

数分後、一際強い光が部屋に満ちる。

「ふう」

部屋を出る。

「おい、大丈夫か？ あんな無茶をして」

「これくらい平気、平気。あと、三〇分もすれば、目を覚ますだろうから、一先ず休憩」

そう言うと、ルインがお茶を淹れに行き、私は「倉庫」から机と人数分の椅子とお茶菓子をとり出す。

数分後、ルインが戻って来たのでお茶会が始まる。

「お前の技術はとことん常識を覆してくれるな」

エヴァの呟きに対して、

「そんなあゝ、これはこの世界の転移魔法に近いものだよ」

「そうなのか、…って違う！ これはこれですが、ホームクルスの錬成の方だ！」

「いやゝ、誰でも錬金術をキチンと理解して、代価をちゃんと用意して支払えば出来るかもしれないわよ」

「ところで、あれほどの錬金術だ、一体代価は何なんだ？」

「ん？ あれは、魔力だけよ」

「そんな簡単に済ますな！ あれほどの魔力を使えば普通は魔力が枯渇して死ぬぞ！」

「そうなの？ 私は魔力を結構持つてるし、それにこの賢者の石に助けてもらってるしね」

「賢者の石だと！？ 何故そんなものを持っている!？」

「あゝ、それは・・・省略・・・という訳なのよ」

「…そうか、お前にそんな過去があったのか」

「まあ、そんなことよりも、そろそろ時間ね。さて、行きましょっ
か」

さよさんの様子を見に行くと、

「うーん」

上半身を起こして、伸びをしていた。

「さて、調子はどうかしら？」

「あ、まだ、違和感がそこらじゅうにありますけど、大丈夫だと思
います。手足も動かせますし」

「そうね。ずっと霊体だったけど、肉体を持ったからそこは慣れね。

じゃ、軽く魂と肉体の調整するから、横になつてもらえる？」

「わかりました」

その後、数十分かけて調整を行い、

「さて、今日はこれぐらいかしら。続きは一週間後にするから。それが終わればこの別荘から出られるから」

「わかりました」

疲れていたので、今日の夕食は別荘内で、ルインに作ってもらって、皆で食べました。

千雨やエヴァにも好評で、さよさんに至っては、泣きながら食べていました。

曰く、約五十年ぶりの食事だったらしい。当時にはなかったものを食べたので美味しさと驚きでいっぱいだったらしい。

当時の食事情の話聞いて、千雨とエヴァはもっと味わって食べよう、感謝して食べようと思ったらしい。

32話(後書き)

相坂さよの復活です。

お便り待っています。

33話

side story

祐依さんと出会って、今までの生活が一変しました。

思えば、学園祭の日に、私に気づきに来て、話を色々しました。クラスメイトだったエヴァンジェリンさんの家に招待されて、そこで色々話をした後、祐依さんがノアさんと名乗ってから、選択肢を与えられました。

その中の一つ。

私に新たな肉体を与えてくれるというもの。

ノアさんがほむくるすという、肉体を作るときに、私が偶然事故で巻き込まれて、その身体に宿るといって、確信犯的な行動のおかげで、私は新しい身体を手に入れました。

ただ、調整と今後の身体と魂の同調のために肉体年齢が千雨さんと同じくらいになってしまいましたが…

話を聞くと、千雨さんのクラスに祐依さんとエヴァさんもいるそうです。

祐依さん曰く、調整が終われば、希望があれば一緒にクラスに入れるように細工するそうなので、

せっかく、皆さんに会い、祐依さんにもう一度生きることが出来たので、一緒に学園生活を送ることにしました。

その際には祐依さんとルインさんがいる孤児院から行くことになる

そうです。

名前もちよつと変わって、相坂さよから、相坂小夜になりましたが、普段はさよのまま、通すそうです。

追記すると、このメンバーは人外魔境と言っても間違いいではないそうです。

side 祐依

さよの調整も終わって、別荘から出ると、まず、‘光の月’の情報にさよの情報を追加し、孤児院の経営者に姿を変え、市役所にさよの色々と手続きを行った。

「さ、これで、さよも私たちの一団に入ったから、これを手放さないでね」

そう言って、黒き月のペンダントを渡す。

「これは？」

「ん？ ああ、それは私の仲間の証。色々と機能がついているからその説明はおいおいしておくとして、絶対に手放さないでね。むし

る、外さないでね」

「よくわからないですけど、わかりました」

「で、話が変わるけど、さよ。転入の件は細工したからOKだけど、自己紹介の時に言って欲しいことがあるのよ」

「何ですか？」

「ん〜。大したことじゃないんだけど、まあ、小学生どもは親がいないとイジメの対象になりかねないから、親は白き月で働いていて、現在は海外に出張中でうちの孤児院に預けられたってね」

「わかりました」

「情報の操作は完璧だから」

孤児院の一室で打ち合わせをしている時にふと思った。

「対魔法使いの改竄防止ために『光の月』を作ったのに、私が改竄ばっかしてるわね…」

「どうしました？」

さよが心配そうにのぞきこんできていた。

「ん？ 対策用に作ったものを私がしょっちゅう使っているな。」

「そうですね、何の事だかわからないですけど、使えるものは使えばいいと思いますよ。死んでしまったら、使えなくなるんですから」

「そうですね」

まあ、そう簡単に死にはしないだろうけどね。

黒の月のペンダントには色々細工してあるから、よっぽどのが起きてても平気な気がする。

そんな事態になったら逃げる気がするし。

「まあ、そうですね。話は変わるけど、さよの転入は来週の月曜日だから。それまで、自衛の手段を考えなきゃね」

「あ、あの〜」

「ん？」

千雨みたいにデバイスを作っただけよかと考えていると、態々手を挙げながら何か言おうとしていた。

「自衛できるかわからないんですけど、私、今、ちょっとした幽霊みたいなことが出来ます」

そう言っつて、ポルターガイストやラップ音、幽体離脱？等を披露して見せた。

「ん〜、それは自分でやっているの？」

「あ、いえ。周りの幽霊さんたちに手伝ってもらってます。え」と
何かを探すかのように周りを見渡していると、

「あっ」

そう言っている一点を見た後、その手には万年筆とメモ帳みたいなものを持っていた。

「それは？」

「あ、これは、道具の幽霊さんです。私を媒介に実体化しているんです」

「それは、離れても実体化し続けるの？」

「え…と、今は10mぐらいで消えちゃいますね」

「そう。他に何かできることはある？」

「そうですね…」

席を立って、部屋の中をうろろろし始める。

「わかるのは、周りの幽霊さんがわかるのと、物に憑いているものがわかります」

「ん〜、その物についているものは付喪神の事かしら？」

「あ、はい。そうです」

「ちょっと、そこに座ってくれろ?」

「わかりました」

椅子に座ったさよの後ろに立って、頭に手を置く。

数分、過ぎて。

「大体わかったわ。さよは、魔力は殆ど無いわね。気は少しで、代わりに膨大な量の霊力をもってるわね。その霊力を媒介に霊に干渉しているみたいね。さて、どうしますか…」

「何がですか?」

「さよの自衛手段よ。霊を使役するか… それとも、ポルターガイストを使うか… 幻想郷の皆みたいに弾幕でも覚えさすか… むしろ、全部合わせるか!」

「え、え…と」

「大丈夫よ。千雨やエヴァとは全く違った最強にしてあげるわよ。と言う訳で、しばらく特訓になるけど…」

「あ、大丈夫です。ご鞭撻のほどお願いします」

「OK」。悪いけど時間が無いからま別荘での生活にしばらくなるけど」

「わかりました。これからよろしくお願いします」

そうして、さよの特訓がはじまった。

33話(後書き)

さよの改造がスタートしました。

お便り待ってます。

34話(前書き)

東方キャラが出てきます。

と言うより、幻想郷に行きます。

34話

side 祐依

基本的なことを別荘でさよに教えていたが、

「うーん… 私じゃ霊的なことは上手く教えれないわね…」

こればかりは、私は真似事は出来るが、上手く教えることができない。
さすがに幽霊になったことがないから。

「そうなんですか？ 結構わかりやすいと思うんですけど」

「それは、教える人が私しか知らないからね。比較出来ないからね。さて、どうしようか…」

幸い、今日も学園祭だし、終われば連休になる。

「よし、やっぱり、その道の人？に聞きに行こう！」

「え？ 知り合いがいるんですか？」

「さよ、ちょっと遠くなるし、辛いかもしれないけどいい？」

「あ、はい。大丈夫だと思います」

「じゃ、行きましようか。幻想郷に」

「幻想郷…ですか？」

「ええ。そこにさよの師匠役になりそうな人？たちがいるから」

「幻想郷って何ですか？聞いたことないんですが」

「幻想郷…人外の者達が人と共存する、最後の楽園………忘れられた者達のたどり着く場所…まあ、行ってみればわかるわ」

「はあ…？」

さよは初めて聞くことに首を傾げる。

「ルイン、後の事よろしく。学校は病欠にしておいて。エヴァと干雨にも説明よろしく」

「わかりました」

「じゃ、行きましようか。？リンク・八雲紫・ロード？」

スキマを開き、いざ、中へ。

スキマを抜けると、きれいな桜の木があった。

「幽々子さ〜ん。いる？」

玄関に向かいながら呼ぶと、

「どういった御用でしょうか？」

緑のスカートに白いブラウス。体には霊が纏わりつき、そして手には刀を持つ銀髪の少女が現れた。

「やつほ、妖夢。幽々子さんいる？」

「あ、こんにちわ。祐依さん。幽々子様は今、お食事中です」

「あ、やっぱり。…ふむ、台所借りていい？」

「構いませんか？」

首を傾げながらも承諾してくれる。

「外で覚えた新しい料理で驚かしたいから」

「わかりました。ところで、こちらの方は？」

「あ、さよ。自己紹介してて。妖夢、終わったら、台所に連れてきてくれる？」

「わかりました」

2人を置いて、いざ、戦場へ！

突然、庭に侵入者が現れ、撃退の為に向かおうとすると、聞き覚えのある声がある。

この声は… 玄関に行きますか。

案の定、祐依さんでした。

何やら、幽々子様に用があるようだったけれど、まずは料理みたいです。

さて、

「初めまして。魂魄妖夢と申します。西行寺幽々子様の剣術指南役兼白玉楼に住み込みの庭師です。半人半霊です」

「あ、相坂小夜と言います。普段はさよって呼ばれます。えっと、外で50年程浮遊霊をやっていました。今は、祐依さんにホームクルスという体を作ってもらって、もう一度、人間をやっています。私も半人半霊になるのでしょうか？」

「そこはわかりませんが、さよさんですね。よろしく願います。祐依さんが連れて来たのですから、大丈夫でしょうから」

「こちらこそよろしく願います。妖夢さんでいいですか？」

「はい。では行きましょうか。こちらについて来てください」

台所に行くと、机には見たこともない料理が並んでいた。

side 祐依

「あ、自己紹介終わった？　じゃ、運ぶの手伝ってくれる？」

「わかりました」

移動中に

「あの、祐依さん。これの材料は？」

「ん？　持参よ持参」

「そうですか」

幽々子さんが居るといふ居間の前に着き、

「妖夢。悪いけど、ここから一人で行ってもらえる？」

「構いませんが」

「反応が見たいからね。こっから、覗き見してるから」

「わかりました。幽々子様、失礼します」

「あら、どうしたの？」

「追加の料理です」

「ありがとうございます」

すごい勢いで食べていくわね。

…どこに入っただけでいってるとるのかしら？

「！ 妖夢！！」

「はっ、はい」

「この料理って？」

「はい。祐依さんの料理です。評価を聞きたかったそうです」

「祐依。出てきなさい」

襖をあけ、居間に入る。

「久しぶりです。幽々子さん。元気ですか？」

「久しぶりね。祐依。まあ、死んでいるから元気とは言い辛いけど。料理は最高よ」

「ありがとうございます。食事が終わったら、頼みたいことがあるんですけど」

「いいわよ。こんな美味しい料理を作ってくれたし、祐依との仲だからね」

「ありがとうございます。どございゆっくら」

幽々子さんの食事が終わり、

「さて、私に頼みたいことって？」

「その前に、さよ。自己紹介」

「はい。……」

省略。

「それで、さよに色々教えて欲しいのよ。私じゃ教えきれないし、それに、私のは自己流だから本職？の幽々子さんに教えて欲しいのよ」

「そうね、今晚、また料理を作ってくれたらいいわよ」

「交渉成立ね。さっそくいいかしら。私はその間、夕食の仕込みをしてるから」

「わかったわ。期待してるわよ。妖夢、妖夢は祐依を手伝ってあげて」

「わかりました」

「さよ、幽々子さんに色々教えてもらうのよ。っと、忘れてた。幽々子さん。弾幕については後でお願いします。まずは、霊についてみっちり教えてあげてください」

「わかったわ。さて、庭に行きましょつか」

「わかりました」

さよは幽々子さんについて行った。

「じゃ、私たちも行きましょつか」

「わかりました」

私たちは台所に向かう。

34話(後書き)

少し幻想郷が続きます。

お便り待ってます。

35話

side 祐依

夕飯の仕込みをやりつつ、妖夢に料理のレシピを教えながらやっていたら、少々時間がかかってしまった。

そんな訳で、庭にさよたちの様子を見に行くと、

幽々子がさよに私にはよくわからない指導をしていた。

…？

「靈にしかわからない何かがあるのかしら？」

「いえ。私にもわかりません」

「あ、そうなの？」

お茶を淹れてきた妖夢がそう私の独り言にかえしてくれた。

その後、お茶をはさみ、私たちは厨房に戻り、夕飯の準備に戻る。

色々と妖夢にレシピを伝授していたので、少々時間がかかったが、

許容範囲内だろう。

だが、問題は…

「妖夢。久しぶりに見るけど、こんな量で大丈夫なの？」

机に乗り切らない程、大量に作られた料理。

「はい。幽々子様なら大丈夫です。いつもこれぐらいの量は余裕で食べています」

「…そう」

夕飯の時に、

「祐依、さよちゃん。すっごく筋がいいわ。もう殆ど完璧よ。教えることがもうないくらいよ」

「そうなの！？ さよって才能あったのね。数日でコツをつかんでもらえればいいぐらいのノリできたのに」

「そうだったんですか？ でも、幽々子さんの教え方がいいんだと思います」

「あら、ありがとね。でも、これはさよちゃんの実力よ。あえていうなら、霊を懐かせ使役する程度の能力かしら？」

「そうなんですか？」

「ええ〜。さよちゃんは霊たちにすっごく好かれやすいのよ〜。それで、こんなに早く習得できたのよ〜。これまた違った意味で、さよちゃんは人には教えれないわね〜。霊が進んでやってくれるんだから〜」

「ありがとうございます」

「そっか〜、じゃあ、明日は予定を変えて、博麗神社に挨拶に行こっか」

「博麗神社ですか？」

「ええ。博麗神社は幻想郷と外の世界の境界線ね。詳しいことはまた明日ね。と言う訳で、明日博麗神社に行くので、今晚泊めてください」

「明日の朝ごはん作ってくれるならいいわよ〜」

「交渉成立ね。じゃあ、デザートを持ってくるわね」

そうして、デザートをみんなで食べて楽しんだ。

翌日。

「お世話になりました」

「幽々子さん、どうもありがとうございました」

「いいのよ。私も楽しかったわ。またいらっしやい」

「祐依さん、勉強になりました」

幽々子さんと妖夢と別れ、白玉楼から出て、

「?リンク - 八雲紫 - ロード?」

スキマを開いて、博麗神社へ。

「霊夢、いる?」

「朝ぱつらから、うるさいわね。賽銭箱はそこよ」

腋が出ている変わった巫女服を着た少女が奥から出てくる。

「ふむ…」

・チャリン、チャリン、チャリン、チャリン。

×X エックス

賽銭箱にお賽銭を入れる。

「え！？ほんと！？　ありがと！…って、あら、祐依じゃない」

「やつほ、霊夢。久しぶり。神社は大変みたいね。お賽銭の他に肉とか、外の世界の料理あるわよ」

「え！？　ほんと！？　嘘じゃないわよね！！」

霊夢が顔でマジで詰め寄ってくる。

「ちよ、落ち着いて。話聞いて」

「あ、ごめんなさい。で、何の用かしら？」

「まずは、さよ、自己紹介」

「あ、はい。………」

省略。

「それで、霊夢にさよに弾幕を教えてあげて欲しいのよ」

「え、面」

「チャリン、チャリン。」

「良いわよ。私に任せなさい」

渋っていたのが180度態度を変える。

「霊夢、誰か来てるの？」

奥から金髪の紫色の服を着た日傘と扇子を持つ女性が出てくる。

「あ、紫。祐依が来てるのよ。それと、お客もいるわよ」

「あら、祐依。久しぶりね。っと、そうだね。祐依、映姫が探してたわよ。何やら話があるそうよ」

「あ、紫。久しぶり。映姫さんが？ 何だろ？ ってな訳で、霊夢、悪いけどさよのことお願いね。ちよっと、話を聞きに言ってくるから」

「わかったわ。こつちのことは任せておいて」

「じゃあ、ちよっと言って来るわ。あ、材料を置いていくから、遅かったら先に食べて」

そう言つて、特製クーラーボックスを置いていく。

「こんにちはわ。四季映姫さん何か御用ですか？」

「あ、祐依さん。最近霊に身体を与えたそうですね！」

「あ、はい。どうして幽霊をやっているかもわからないという浮遊霊に身体を与えたんです。悪霊にもならず、50年以上浮遊霊をやっている、理由がわからないからって」

「それでもです！ 生き物には……………」

- 説教になったので省略。

「わかりましたか？」

「はい。すみませんでした。ところで、お仕事の方は大丈夫ですか？」

「ッ！」

顔色を変える。

「あの、手伝いましょうか？」

つい敬語に。

「お願いします。最近人が多いんです」

「わかりました。？リンク・四季映姫・ヤマザナドゥ・ロード？」

映姫の白黒はつきりつける程度の能力を共有する。

仕事を手伝っていると、ある人物が…

35話(後書き)

お待ちしております。

36話

side 祐依

四季映姫さんに説教を受けて、そのついでにお手伝いをする事を申し出て、

最初は、錬金術の応用で書類をぱっぱと終わらせていたが、途中から、私も審判をすることに。

殆どの待ち人？が捌け終わりが見えて来た頃、

「あれ？ ガトウさん？」

「お？ 誰だ？ 嬢ちゃんは？」

「えと、映姫さん、ちょっと外しますね。ガトウさんこちらへ」

ガトウさんの手を引き、個室へ引き込む。

その部屋は、ソファが二つ向き合うように並び、間にテーブルそして、部屋の隅にはイスと机がある。

‘倉庫’からお茶の用意をして淹れる。

「ガトウさん。死んじゃったのね。何やったの？」

「まあ、死んだのは、アスナの嬢ちゃんと弟子を助けるためだったんだが、ところで嬢ちゃんは一体誰なんだ？」

「ん？ ああ、そっか、素顔を見るのは初めてか…」

仕方がないので、‘倉庫’から仮面と外套を取り出し、身に纏う。

「改めまして、黒猫ことノア・ミナツキです。素顔を見せたのは偶然ね。てか、こんな知り合いがいるとは思わなかったから」

「そっか、嬢ちゃんがああ黒猫だったのか。まあ、もう死んじまつたから、特には思わないな。あん時は色々思うことがあったんだがな…ナギとジャックとかが、仮面を必死に剥して素顔を見ようとしてたんだがな。それで、どうしたんだ？ 俺を呼び出して」

「まあ、気まぐれかな。手伝いに疲れてきたから。息抜きを兼ねてところで、さっきアスナって言うてたけど、黄昏の姫御子のこと？」

「ああ。嬢ちゃんの親代わりをしてたんだがな、魔法世界で襲われちまつてな。弟子のタカミチと嬢ちゃんを逃がすのが限界だった」

「それで、誰が相手かは…わからないでしょうね。いくら戦争が終わって月日が流れようと、戦場でしか生きられぬ者。未だに争いを起こそうとする者。自分たちの利益のためにする者。そして、競争中に紅き翼に恨みを持つ者。例をあげたらきりが無いわね。それで、アスナは無事なの？」

「俺の弟子に任せたからな。タカミチには旧世界に逃げるよう言うておいたが、どうなったかはわからねえな。まあ、タカミチも俺たち紅き翼の一員だ。大丈夫だろ」

「……ガトウさん。その弟子って、連合の悠久の風に入っているわよね？」

「ああ、俺が教えた、居合拳と咸卦法でやってるみたいだな。魔法は使えねえみたえだけど」

「悠久の風：連合：黄昏の姫御子：正義の魔法使い」

「おい、どうした？ ぶつぶつ言ってる？」

ガトウさんに肩を揺さぶられて、目を覚ます。

「あ、ごめんなさい。ちょっと、考え事を」

お茶を飲みながら、一息つく。

もしかしたら、連合の駒にされてないかしら？

大丈夫よね。

戦争を体験してるんだから…

「（ゼロ。タカミチ・T・高畑の足取りを追って。光の月を最大限に使っていいから、それとガトウを除く他の紅き翼のメンバーも）」

「（わかりました。少々お待ちください）」

「どうした？ 今度は黙り込んで？」

「ん？ ああ、ちょっと、依頼の念話を。ちょっと気になることがあったから。ありがと。話を聞かせてくれて。閻魔様はありがたい話がちよつと長いけどいい人？ だから、ちゃんと聞く方がいいわよ」

「ああ、わかった。ところで、黒猫はどうしてこんなところにいるん

だ？」

「ん？ ありがたい話を聞きに、それとお手伝いかしら？」

「お前は本当に人間か？」

呆れたように言われるが、今更なので。

「人間（笑）よ。そろそろ時間のようね。よい旅を」

「ああ。ありがとうよ」

部屋を出て、映姫に事情を話した後、ガトウさんの審判の前に別れを告げる。

博麗神社に戻ると、さよが神社の縁側でへばっていた。

「あら、お帰りなさい。思ってたより早かったわね。置いてった材料の量からして、もう数日かかるかと思ったんだけど」

「ただいま。霊夢。さよはどう？」

「そうね、妖精相手なら、数人程度なら問題ないかしら。あ、でも、回避はダメね」

「回避は経験がものをいうからね。それで、霊夢以外に誰か指導してくれた？」

「ん〜、弾幕が撃てるようになった頃に幽々子たちが弟子の様子を見に来たって言って、少しコツとか言っていたわね。そんな時はスperlカードの予備をとりに行ってたから、詳しいことはわからないわね。あとは、文が指導じゃないけど取材をしてたわね。で、最後に魔理沙がさよを撃ち落としてたわ。初心者相手にスperlカード使って、実践型式って言って、弾幕ごっこを申し込んで。それで、さよはそこに寝てるわ。魔理沙は魔法の森にキノコをとりに行ってるわ」

「そう。私たちは明日帰る予定なんだけど、いいかしら？」

「いいわよ。祐依はお賽銭くれるし、美味しいもの食べられるし。さよはいい子だし」

「ありがと。じゃ、今晚は奮発していいもの作っただげるから」

「ほんと！ あの食材よりも!？」

詰め寄ってくるのを押しとどめながら、

「ええ。大半はあれと同じだけど、いいものもあるわよ」

「あ、でも文が祐依が来てるって知っちゃったから、宴会があるわよ。それで魔理沙はキノコを採りに行ったのよ。それに祐依に会いたがってる人？もたくさんいるからね」

「いいわよ。宴会料理もOKだから」

そんな話をしていると、さよが復活し、

「うう、まだクラクラします」

「大丈夫？ <癒しの力よ！ ファーストエイド！>」

さよを光がつつむ。

「あ、ありがとうございます。もう大丈夫です」

「そう、まだ、無茶しちゃダメよ。さて、台所借りるわよ」

そうして、宴会に備えて料理の仕込みを始める。

36話（後書き）

突然ですが、さよのスペルカードのアイデアを募集したいです。

スペルカードのアイデアが出てきません。

どなたか、知恵を貸してください。

> (_ _) <

お便りまっています。

37話

side 祐依

やはり幻想郷の宴会はカオスの一言に尽きた。

開始早々、さよがつぶれた。

その後、皆をテキストにあしらいながら、料理を続け、お酒に飲まれないように注意して過ごした。

翌朝、朝食の準備をしていると、

「うっ、頭がガンガンします」

さよが頭をおさえながら、起きてきた。

「あつという間につぶれてたもんね。はい、二日酔い用の薬。食前に飲んでね」

「わかりました」

私特製の薬を注意を説明しながら渡す。

食事が出来上がるころに霊夢が起きてきた。

「うっ、頭が」

「ほら、霊夢しっかり。薬渡すから飲んでね」

「ありがと。でも何であんたは平気なのよ」

「ん？ 正直に言うと、殆ど飲んでないからね。料理してたり、飲まされそうになった時にはコップの中身を水に変えたりしてたからね。最初の一杯しか飲んでないわ」

「え？ でも祐依、あんたテンション高かったわよね？」

「ん？ あれは、素面でのテンションよ。飲まなくてもあれぐらい楽勝よ」

「はあ、もういいわ」

霊夢がため息をつきながら、あきらめる。

「じゃ、朝ごはんにしましょうか」

朝ごはんを食べた後、幻想郷を後にする。

「さて、やっと戻ってきたわね。えと、今日は日曜日の夕方か。明日から学校ね。ってことは、さよの転入は明日のようね。とりあえ

ず、孤児院に戻りましょうか」

「はい」

孤児院に戻ると、

「祐依。エヴァさんと千雨さんが戻ってきたら、エヴァさんの別荘に来るようにと連絡がありました」

ルインが開口一番にそう言った。

「わかったわ。さっそく行って来るわ。さよはどうする？」

「別荘つて時間が遅いんですよね。あの、ゆっくり休みたいんで、行ってもいいですか？」

「別にいいじゃないの？ 来るなって言われてないんだし」

そうして、ルインとさよと共に、エヴァの別荘にスキマを利用して、さっさと行く。

エヴァの別荘に着くと、

「貴様は一体どこに行っていたんだ！？」

「ルインに聞いてない？ 幻想郷にさよの特訓にね」

「そう言うことではない！ 学校もサボりおつて、そんな面白そうなどこに行つて！」

「だって、さよを強くしなくちゃいけないのよ。身を守るようにね。でも、さよには一般人並みの魔力しかないんだから、強くするなら、その手の人？ たちに教えを乞わなきゃいけないんだから」

「それで、学校をサボった成果はでたのか？」

「まあね。まだ、修行中だけど、成果はあつたわよ。予定の三つのうち、一つ目は完璧。二つ目はギリ及第点かな？ 三つ目はこれからね。まあ、エヴァを相手にするにはまだまだだね。低級な妖怪相手なら、善戦出来るくらいかしら？ 戦うのはまだ待ってね。あ、お土産の幻想郷の地酒」

そう言つて、お酒を渡す。

「昔ながらの手法で丁寧に作ってるから、味は最高よ」

「ほっ……」

「おい、エヴァ。買収されてるぞ」

「はっ！？」

「ちっ」

エヴァの買収&意識誘導が失敗した。

「お前確信犯か！？ 舌打ちって！？」

最高の営業スマイルを浮かべて、

「何の事かしら？」

「あんな堂々と舌打ちしておいて、とぼけると思いつのか？」

千雨のツッコみにが入る。

が、正論であるため、

「ところで、何の用かしら？ ルインに言伝を頼むぐらいだから何かあったんじゃないの？」

スルーすることに。

不利な立場にいても何も好転しないから、話題を変える。

「ちつ。逸らしたか。まあ、いいか。幻想郷ってのは一体何なんだ？」

「あゝ、そっからか。ルイン説明は？」

「幻想の最果て。」

.....

沈黙が流れた。

「...他には？」

静寂を破ろうとしたが、

「いや、それだけだ」

千雨が補足した。

.....

「ルイン、さすがにそれは…」

「すみません。幻想郷の事はあまり知られるべきではないと思いましたが」

「あゝ」

なるほど。
納得した。

もし、ここの自称正義バカどもの魔法使いに知られたら、乗り込もうとするかもね。

まあ、行くには私か八雲紫のスキマを通るしか、幻想郷に行く方法はないだろうけど。

・・・世界も違うし。

黒き月や影の月のメンバーに渡している満月のペンダントには情報漏洩防止の処置をしてあるからと言って、古明地さとりみたいな相手だと効果ないからね。

…対策を考えるか。

出来そうな魔法使いはいないと思うけど、念には念をこめて。

「おい、どうした？ 黙り込んで」

「ん？ ああ、ゴメン。ルインの説明に納得してたから。まあ、ルイン。大丈夫でしょ。幻想郷には自称正義バカどもの魔法使いには行く方法何て無いんだから」

「紫さんは大丈夫でしょうか？ おもしろうそうな人と言う理由でスキマを開かないでしょうか？」

「大丈夫よ。紫は幻想郷について考えているんだから。そんな紫が幻想郷に不利益を被るような輩を招くもんですか。いくら、幻想郷は来るものを拒まない謳ってても。それに幻想郷のみんなが魔法使いごときにやられると思う？」

「…いえ。大丈夫でしょう。余程のことがあっても大丈夫な気がします」

ルインを説得し、

「じゃ、さよにはもう説明したけど、…省略…ってことよ」

「そうか。お前も何か能力を持っているのか？」

「持ってるわよ。そうね…」

話を一時中断し、‘倉庫’から、ある本を取り出す。

「何だそれは？」

「これは幻想郷縁起つていう本で、幻想郷の実力者のことをまとめ

たものよ
「

説明がめんどくさいので、宴会の前に阿求に最新版を貰った物を渡す。

私だけでなくルイン、さらにはさよの項目まで増えたもの。

私が映姫のそこに行っている間に取材を受けたらしい。

37話（後書き）

次回、幻想郷縁記で紹介風な物をします。

お便り待っています。

38話

side other

幻想郷縁記

- 黒猫。歩く非常識。幻想の体現者。一人百鬼夜行。

・相沢祐依（あいざわゆえ）

・能力 共にする程度の能力。

・危険度 極低

・人間友好度 極高

・主な活動地域 普段は博麗神社。

自称他の世界の住人。だが、八雲紫にスカウトされ、幻想郷を作るのを手伝ったらしい。

八雲紫とは、偶然出会ったらしい。とある戦いの場にいたのを八雲紫が覗いていたらしく、その後、対話を経て、意気投合。協力者に幻想郷の創設時以前から生きているため、さらに時間の流れが全く異なる他の世界にもいるので、実年齢は本人しか知らない。だが、彼女は肉体の操作が出来るため、外見年齢は全くあてにならない。年齢を聞くと、叩きのめされる。

幻想郷にいる時の普段は博麗神社に居候している。

・能力 共にする程度の能力
完全個人だと何も脅威ではない。祐依の能力は誰かと契約や交友を結んで初めて脅威となる。

祐依は契を結んだ者と対象とほぼ同じことが出来る。

しかし、オリジナル相手には勝つことは不可能に等しい。弾幕なら、一発を相殺するのに数十発当ててやっと相殺できる。

オリジナル以外の相手ならば、ほぼ、オリジナルと同じ強さを持つ。だが、恐ろしいのは二人以上の能力を共にし、同時に使用できることである。

ただし、その場合はスペルカードを使うことが出来ない。

けれど、切り替えることで、スペルカードを使用することが出来る。

契を結んだ者は意識を一部共にすることで遠く離れていても会話をすることが出来る。

祐依は胸元の満月を模したペンダントに契約者のチカラの一部を形骸的に宿している。

なので、一度契を結べばその契約者のチカラを何時でも共にすることが出来る。

正に、仲間を増やせば増やすほど強くなっていく。

祐依は何故か人間・人外問わず好かれるため、幻想郷の殆どの住人と契を結んでいるため、彼女と戦うのはある意味幻想郷の住人全てを相手にするようなものである。

・目撃報告例

祐依は幻想郷に来る度に神社に来てくれて、お賽銭を入れてくれるし、神社に泊めてあげると外の料理を作ってくれるし、何でもこなせるから、すっごくありがたいわね。（博麗霊夢）

- 祐依のおかげで、一冬越せたこともあるらしい。外の世界どころか、異世界の料理まで作れることから、祐依がいる時は、博麗神社に人間・人外問わず祐依の料理を目当てに博麗神社に参拝客が増えることもある。能力故に巫女の仕事も手伝うことも出来るらしい。だが、博麗としての仕事を手伝うことはほぼゼロに等しい。本人曰く、私は博麗ではないかららしい。

祐依は何でも出来るから、弾幕ごっこでも何をしてくるかかわからねえから、何度戦ってもおもしろいんだぜ。(霧雨魔理沙)

- 祐依は能力を使って、戦う場合、複数人が代わる代わる戦うようなものであり、切り替えによつては、あつと驚くような、弾幕になるようだ。能力を使わなくても、祐依は錬金術師であり、魔砲使いでもあり、体術でも強く、武器も何でも使える上に、外の技術も持つため、何をするかわからないので、組合せによつては数えきれないような何通りも出来るため、対処するのが難しいのである。

祐依の運命は見ても意味がないのよ。(レミリア・スカーレット)

- 祐依はいつの間にか別の場所にいたり、別の事をしていたりなど猫以上に気まぐれであり、運命さえ覆して行動するらしい。なので、祐依の運命を見ても数分で変わることもあるらしい。

祐依は完璧な先輩です(十六夜咲夜)

- 祐依は十六夜咲夜がまだメイドとして未熟だったころに色々と教えたらしい。メイドとしての技量も完璧らしい。ナイフ捌きも祐依が基本を教えたらしい。

お姉ちゃんのおかげで、地下から出れたの！よく一緒に遊んでくれるの！(フランドール・スカーレット)

- 祐依は外の世界の魔術というもので狂気を封印処理を行い、地下からだけでなく、屋敷の外にまで連れ出せるようにしたらしい。そ

の際は教育係として、十六夜咲夜とともに、面倒を見ていたらしい。その際にお姉ちゃんと呼ばれ好かれている。

他省略。（ほぼ幻想郷の住人全員からの目撃報告がある）

・対策

怒らせると、どうしようもない。殆ど無いが本気でキレると殺される可能性がある。その際は運に任せるしかない。

大半は虎竹刀で鎮圧される。被害者は気づくと敗れて、地に伏しているらしい。

怒らせないのが一番である。

キレたら、後はもう運に任せるしかない。

祐依は幻想郷の住人全てと契を交わしているため、彼女と戦うのは幻想郷相手と戦うようなものである。

side 祐依

幻想郷縁記を渡して、千雨とエヴァが読み終わるまで、さよとルインとお茶を飲んでいると、

読み終わったのか、2人が顔を上げた。

「お前は無茶苦茶だな」

「祐依、貴様を倒せる者などいるのか？」

「ケケケ、勝テネエ訊ダナ」

いつの間にか、チャチャゼロまでいた。

「失礼ね。これでもベースは人間よ」

「ベースとか言ってる時点でもう普通じゃねえな。ほんとにお前を倒せるのか？」

確かに、千雨の言うとおり、人間辞めてるな。

まあ、そんな今更のことは置いて、

「倒せるわよ。でも、殺せはしないでしょうね。私は不死に近いから。不死殺しの武器でも殺せないでしょうね。もし、殺そうとするなら、存在を事態を消さないと無理でしょうね」

「不死に近い？ 不死とは何か違うんですか？」

「そうね。契約者の中に、不死の人がいるし、さらには英霊が持つ、宝具【十二の試練^{ト・ハン}】があるから」

「何だそれは？」

「ん。効果は以下の三つ。」

- 1 . ある程度以下の攻撃を全て無効化
- 2 . 自動蘇生
- 3 . 既知のダメージに対する耐性付加

1 の場合だとこの世界の魔法なら、熟練者の上級の魔法じゃないと無効化される。

次に2 は、蘇生魔術を重ね掛け。どんなに致命傷を負っても彼の「戦闘続行」により戦い続けられる。

加えて、代替生命のストックが11あるため、倒すには12回殺さなければいけない。

ただ、強力な攻撃を繰り返せば一気に数回分のストックを奪える。最後に3は、一度受けたダメージを学習し、その克服の為に新しい耐性を肉体に付加するもの。

故に攻撃方法が乏しければ例え実力の差がどんなにあっても勝てない。

なお、正確には受けた攻撃ではなく殺された攻撃に耐性が付く。

って言う宝具なのよね。それで私はもう不死殺しに対する耐性を持つてるのよ。だから、殺すのは無理ね。封印すればわからないけどね。まあ、普段は使ってないけどね」

「わかった。貴様を倒すのは無理だ」

私の説明にエヴァがそう判断を下す。

「そうだな。お前を倒すのは無理ゲーだ」

千雨も同様な判断を下す。

「…良いもん。別に。私には仲間がいつぱいるから」

私は窓から遠くを見つめながらそう呟く。

「その仲間が、祐依の非常識を作る原因の一つを担っているんですね」

38話（後書き）

最近東方にはまっているruinです。

東方やら色々書いてみたい作品が増えつつある今日この頃。

でも、一番は、禁書目録やバカテスなんですけど、最後の構成が出来ず、書くことが出来ない今日この頃。

読んでいる人がいるのなら、未完にしたくないと思うruinです。

他には、先程述べた東方。ISやゼロ魔は少々ネタがあるぐらい。

後、ティルズ オブ ザ ワールドを祐依を主人公でやってみたいなと思います。

ですが、物語の構成が出来ず、書くことはできませんが。

最後に個人的にruinの初投稿作品のキセキの錬金術師の再構成物として書きたいなと思っている現在です。

もし、上記の中でリクエストがあれば、確約はできませんが頑張りたいと思います。

最優先はネギまでですけど。

作品によってはよく一緒にいる友人の一人、男子の自称オタクの友人Kに原作を借りるために遅くなるでしょうが。

ですが、東方ばかりは無理です。ruinはシューティング系のゲームがとことん苦手の為、クリアできるかわからない為、インターネットなどで、資料を集めます。

お便り待っています。

39話

side 祐依

現実逃避の現実時間での翌日。

私、ルイン、千雨、エヴァはHRが始まるのを待っていた。

教室の一角ではパパラッチこと朝倉が今日からやって来る転入生の話題で盛り上がっている。

「ほんと、あいつはどこから、情報を仕入れてくるんだか」

そんな様子を離れて見ながら千雨が呟く。

「ま、別にいいんじゃない？ 真実にはたどり着いてないんだし」

「それもそうだな」

暫くすると、チャイムがなり、弐集院教員が入ってきた。

「はい、今日から二人新しくみんなと一緒に勉強をすることになりました。みんな仲良くするんだよ」

クラス中から元気な返事が返っていく。

「おい、さよだけじゃないのかよ？」

千雨が小さな声で問いかけてくるが、

「ええ。どうやらもう一人いたようね。朝倉が初耳って騒いでいる所を見ると、ただの転入生じゃないみたいね。さよは正規の手続き（戸籍などは偽造だが）を踏んで転入だけど、おそらくもう一人、ここではとりあえずAとするわね。Aはこの関係者か、それに準ずる者みたいね」

「どうして、そこまでわかるんだ？」

「情報ルートは知らないけど、正規の手続きを踏んで転入してくるさよのことは朝倉は情報を手に入れている。だけどAの情報は無い。朝倉の情報収集能力は結構あるみたいだからね。ここまでは一つ目の仮説。これも続きになるんだけど、偶然かもしれないけど、朝倉は情報を手手できなかつた。これはこここの自称正義クッスの魔法使いが情報の操作をしていた可能性が高いのよ。裏に参与している人物の可能性が高いのよ」

「じゃあ、そのAてやつは裏の人間なのか？」

「おそらく…でもまだそんなに警戒しなくてもいいわよ。たかが小学一年生が裏にそんなに参与している可能性は殆どないから」

「てことは、私は普通じゃねえのか…」

「そつなるわね。　　っつ」

「どつしたのか？」

「いや… 何でもないわ」

千雨を誤魔化し、前を向く。

どうやら、さよの自己紹介が終わったところのようだ。

「神楽坂明日菜です。これからよろしくお願いします」

-!

Aはオッドアイのツインテールをした少女だった。
そこまではよかったのだが、

「おい、どうした?」

私の一瞬の驚きの顔をエヴァに見られたようで、声をかけてくるが、

あれは…

「おかしい…」

アスナによく似ているが、違和感が離れない。

解析してみると、何かの術式がかけられているのが見えた。

あの大戦時とは異なる術式が…

「(ゼロ。以前頼んであった、紅き翼のメンバーの居場所の割り出し終わってる?」

ゼロにプライベートチャンネルの念話を繋げる。

「（はい。ですが、リーダーのナギ・スプリングフィールドとその妻、アリカ・スプリングフィールドが行方知れず。フィリウス・ゼクトとジャック・ラカンが魔法世界のどこかにいる程度しかわかりませんでした）」

「（…タカミチ・Ｔ・高畑と紅き翼の頭脳役のアルビレオ・イマと近衛詠春この三人の居場所は？）」

「（タカミチ・Ｔ・高畑はこの麻帆良学園の中等部の教員そして、あの明日菜と名乗る少女の保護者となっているそうです。アルビレオ・イマもこの麻帆良学園の図書館島の司書として地下で養生をしているそうです。近衛詠春は関西呪術教会で長となっています。それと、補足となりますが、二つ。スプリングフィールド夫妻の息子がイギリスのウエールズの山奥にいるそうです。それから、神楽坂明日菜は孤児として、タカミチ・Ｔ・高畑に引き取ったと、正式なルートで役所に登録されています）」

「（わかったわ。ありがと）」

アルビレオ・イマは行っても無駄な気がする。養生と言ってるぐらいだから、面会できないだろうし、できたとしても、あいつの性格からして真実を話さない気がする。

となると、後はタカミチ・Ｔ・高畑と近衛詠春か。

タカミチ・Ｔ・高畑とは話したことないし、先に面識のある近衛詠春か。

「ルイン」

「わかってます」

アイコンタクトでルインとの意思の疎通が完了する。

HR終了後、私はさっさと早退する。

後の事は、ルインに任せ、私はノア・ミナツキと姿を変え京都へ向かう。

「？リンク・八雲紫・ロード？」

スキマを開き、京都の関西呪術協会の本山の門のところへ移動する。

「貴様、何者だ!？」

突然、現れた私を警戒する巫女装束の女性が現れた。

「近衛詠春はいるか？ ノア・ミナツキがやって来たと伝える」

私はちょっときているので口調が厳しくなっている。

「…わかりました」

巫女の一人が伝えに行った。

しほはくじし、

「お待たせしました。こちらへどうぞ」

先程の巫女の案内について行く。

大広間に通され、座っていると、近衛詠春がやって来た。

「どうしたんだ？ 突然やって来るなんて？」

「近衛詠春。お前は紅き翼のメンバーとして、アスナ・ウエスペリ
ーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの今の処遇を知っているの
か？」

「明日菜ちゃんのことですか？ ええ。聞いていますよ。それは彼
女のためには私も賛成です。彼女の過去は辛い事ばかりです。戦争
は終わりました。兵器としての記憶を忘れ、生きていつて欲しいで
すから」

「…そう。もういいわ。それがあなた達の答えならもう関係ないわ。
黒き月とあなた達とはもう関係がない。人を蔑ろにする人達とはね」

「な！？ どういうこと？」

私は近衛詠春の言葉を無視し、孤児院に転移する。

その際に本山の結界があつたが、この程度の結界など私たちにはあ
つてないようなものだったので、無視した。

孤児院に戻って、頭を冷やしていると、学校が終わったのか、ルイ

ンが帰ってきた。

「エヴァさんが自宅でお待ちです。千雨さんも一緒にです」

「わかったわ」

エヴァ宅に着くと、

「どうだったんだ？」

どうやら、急な早退の理由をルインに聞いていたようだ。

「明日菜は今裏に隠してないわ。ただ、記憶を消される前は深い所で利用されたわ。詳細は念のために言えないわ」

「そうか…」

「で、どうするんだ？」

「私は今後、関東魔法教会及び連合、関西呪術協会には協力しないわ。例えそれが、裏の世界をよく知らない一般人でもそちらにいたら、もう知らないわ」

「いいのか？ 救いの【使者】がそんなこと言っても？」

「エヴァ。勘違いしないでね。私は今まで一度も正義なんて名乗ったことは無いし、その二つ名だって、元はと言えば、大戦時に村などを回っている時に勝手につけられたものなのよ。魔法使いと衝突

している時にね。それに私は不幸を届ける【黒猫】で【悪役】^{ヒール}よ。
私は私の心情に肩入れする。その果てに何があるうとも。私の心情
を貫く。誰にも、何人たりとも、我々は飼いならすことはできない
のよ」

そう、後半は独白するように話す。

ここの魔法使いは元々、千雨やエヴァの件があったから、いい思い
を抱いていないし、今回の一件で関西呪術協会の長である近衛詠春
の答えを聞き、関西も見限った。

…だけど、バカとある意味のバカとの子供には少し興味があるわね。

39話（後書き）

魔法使い側アンチがここに正式に決定しました。

詠春さんには悪いとも思いますが、この物語では紅き翼のメンバーとして、アスナの記憶を消すことに賛成になりました。

将来、明日菜とは衝突するのが、ほぼ、決定です。

他にも、自称正義の魔法使いや、他の人もそちらについた以上、敵対勢力です。

ある種、堕ちた？

お便りまっています。

40話

side 祐依

魔法使いたちを見限ったが、白き月としては関与せざるを得ない…
魔法使いたちの抑制・規制をするために。

因みに、白き月での偽名はシャトヤーンである。

さすがに、本名や一部で忌避や有名すぎるノア・ミナツキの名前が
使えない。

ただし、研究者としての方では満月光みつきひかりと名乗っている。

シャトヤーンと言う偽名は創設者兼代表取締役で使っている。

社長はギルさんにやってもらっている。

私は創設者兼代表取締役。こちらは重役や月のメンバー以外知って
いる者はいない。

基本、開発など研究者として活動している。

そして今は、私の別荘の研究スペースで、

「これで完成ね。GNドライブの量産の見込みは？」

「はい。今現在、製法が製法故に生産は出来ませんが、大量生産には
及びません。材料のこともありますし。現在はGNドライブ「T」
は数個を残し、封印及び破棄を行っています。GNドライブは起動
実験完了した物は6個。作成中の物は、3個。GNソード？二本で
計二つ・GNソード？一つ・GNソード？一つ・GNスナイパー

イフル？一つ・GNシールド一つ以上です。そして、GNドライブ「T」をGNスナイパーライフルに搭載しています。あとは、封印処理を行い地下に保管しています。GNドライブが完成次第残りの武器に搭載していきます」

「わかったわ。無茶をして事故を起こしたら元も子もないから。確実に一つずつ作っていきましょう」

「了解しました」

その後、鍛錬場に入り、漫画を見て使えそうだなと思ったとある二つの武術の流派を真似、習得するための特訓に入る。

「はっ！ せい！ ふっ！」

漫画の内容を完全に覚え、再現すべく動作を真似ていく。

数時間、特訓をしていると、

「貴様も特訓するのだな」

エヴァが入ってくる。

以前にエヴァの別荘と私の別荘を魔法陣で繋げたのでそれを利用したのだろう。

エヴァは魔法使いたちに封印が解けたとまだ知られたくないため、麻帆良から出ようとしない。騒がれるのが面倒らしい。

「当たり前よ。私の能力でもあくまで、共にする程度よ。使いこなせるように修練を積まなくちゃ、使えないのよ。全て、長年の努力の結晶よ」

そう言つて、外に出て、倉庫から *misfortune* と *フライングディスク* を取り出す。

そして、*フライングディスク* を投げ、*misfortune* を構え、撃つ。

それを何度か、繰り返す。

「エヴァもやってみる？」

ずっと見ていたエヴァにその声をかける。

「そうだな… たまにはそう言った物を使って見るか」

エヴァに特製の極力反動を抑えた銃を渡す。

「使い方はわかる？」

「当然だ。それぐらい」

「じゃ、いくわよ」

的を投げ、エヴァが狙って撃つ。

ど真ん中に命中する。

「お見事」

そう言えば、多少変わるが、魔法の射手も似たようなものね。種類によって変わるけど、狙って撃つことは。

魔法の射手を忘れてたわね。

この世界の魔法なんて、使わないからな。

「エヴァ。ちよつと、体術を見てもらってもいい？」

射撃訓練を終えたエヴァに尋ねる。

「それぐらい構わんが、どうした？」

「ん？ ちよつと漫画を読んでね。使えそうな武術があったから、それを真似てたんだ」

「どんなものだ？」

「百聞は一見に如かず。見ててよ」

「通り、出来るようになったところまで、見せる。」

「ほう… 確かにまだ粗削りだな。まあ、それは漫画を真似てるんだから仕方がないか。そこは訓練次第だな。一つは単純に使えそうだな。だが、もう一つは制圧・無力化用に近いな。こちらは、程度によるが、表だと周りが引くかもしれないな」

「私もそう思うわ。基本は裏仕様だから。問題は前者は武器との併用が出来ないのよ。後者は出来ないことはないという程度のものだ」

けど」

「それは何故だ？」

「前者は原作で刀を使えないみたいだったのよ。それをそのまま真似たからかしら？」

「そこまで真似る必要はあったのか？」

「いや、別に無いんだけど、これはあくまで、武器が使えないもしくは体術戦ように覚えようと思ってたから。とりあえず、数年後の麻帆良祭の麻帆良武道会に出てみようかなと。名前とか偽証して」

「何故来年じゃないんだ？」

「中途半端で出場したくないから」

その後、人形相手に訓練を行う。

流石に人間相手に行く訳にはいかないかな。

その後、特に大きな問題も起きず、二年生に進級した。

いや、問題と言うほどのものではないが、クラスメイトの中に関西呪術協会の長の近衛詠春の娘の近衛木乃香がいた。

彼女は関東魔法教会の理事長の孫娘でもあるらしい。

何で、こっちに来てるのかしら？

ま、いつか。

私が守るのは影の月のメンバーだけだし。黒の月のメンバーは単独でも十分強いから、大丈夫だろうし。魔法使いでも呪術師でもどうでもいいわ。

そして、休みのある日。

「GNドライブの搭載武器も殆どできたし、そろそろハイブリッドボーンを見に行こうかしら」

「はい？」

ルインが何？というような顔をしている。

「ん？ あゝ、スプリングフィールド夫妻の子供を見にね」

「わかりました。そう言えば、白き月のヨーロッパ・イギリス支部の一つで特許をとったそうですが、その視察が終わっていないので、ついでにお願いします」

「わかったわ。それじゃ行きましようか」

因みにノアの時に使っている仮面が使えないため、素顔を隠すために仮面を作った。

モデルはラウ・ル・クルーゼがつけていた物である。後、何種類かネタで作ったのがある。

千雨は両親と旅行。

さよは幻想郷の幽々子さんに呼ばれ、送って行ったので、いない。

エヴァは買ったゲームのやりこみをすると言っていたので、置いておくことに。

ゼロが調べてくれたので場所がわかっているの、二人でさっさと転移すると、

目の前には赤々と燃える村と悪魔の大群が村を襲っていた。

「！ ルイン。これはさすがに不味いわ。見て見ぬ振りはできない！ ルインは村から離れた場所に転移したのち、魔砲で上空及び周囲の悪魔を殲滅。そしたら、ライフルで狙撃！」

ルインにGNスナイパーライフル？を渡したのち、ノア・ミナツキの姿に変え、もしもの為に宝具の？フォー・サムワンス・グロウリー己が栄光の為に？を發動したのち、村の中にいる悪魔の殲滅に移る。

「はっ！」

不謹慎だが、試し切りを兼ねて、GNソード？を両手に持ち、悪魔を斬り倒していく。

村の中では大規模な魔術は使えない。

だが、幸か不幸かGNシリーズの武器の試す機会としてはいい場を得た。

上空では、ルインの魔砲により、悪魔が倒されていく。倒しきれなかった悪魔は地上に落ちていくが、そこを撃ち抜かれて倒されていく。

私は武器を変えつつ、GNシリーズの武器を試して悪魔を倒していくと、

ズガガガガガガーーーーー！

大規模な雷が辺り一面に降り注いだ。

当然、私にも。

「GNフィールドのいい試しになったわ。けど悪魔は倒せたけど村が無茶苦茶ね。こんなことをするのはナギバガしかないわね」

私は残っている悪魔を倒しながら、魔力を追って高台に向かう。ルインと合流し、ルインが狙撃している間、私はGNピストルビットを手に持ち、乱れ撃っていた。

ー！

ナギらしき姿を高台で見つけた。

ナギは若干似た少年と向き合っている。

その背後に悪魔が一体現れた。

ナギは反対を向いている！

「ルイン！」

ルインの名を呼ぶと、返答する前にGNスナイパーライフル？を投げ渡してくれる。

「狙い撃つ！」

ナギの背後の悪魔をピンク色の光線が吹き飛ばす。

「な！？ この攻撃は！」

ナギが色が違うが、かつて大戦の最終決戦時やケルベラス溪谷で私たちが使っているのを憶えていたのか：

「新手か！？」

光線が来たこちらを睨むと、

「喰らえ！！ 千の雷！！」

前言撤回。

全く覚えてないようだ。

さらに、悪魔にも気づいていなかったどころか、私が倒したことに気づいていない。

態々くらう必要がないのでGNシールドを‘倉庫’から取り出し、GNフィールドを展開する。

偶然の攻撃だけではなく、狙ってやったナギの魔法が防げるくらいだ。

これは申し分ないだろう。

さすがに、これ以上攻撃されたらたまったもんじゃないので、煙に紛れ転移で逃げる。

まあ、ナギも気を抜かなければ、この世界の最強の一角を担うやつだ。

もう大丈夫だろう。

村の中の至る所に石像がいくつもあつたが、悪魔の殲滅と消火を優先する。

粗方終わったところで、消火のし損ねた場所がないか、村から離れた場所に転移し、村をみていると、村の近くに連合の魔法使いどもがやって来た。

見つかると、私たちのせいにされかねないわね。

ナギとかに見られたけど、顔は仮面で隠してあるから大丈夫だろう。そもそも、行方不明のナギが堂々と出て行かないだろう。

悪魔たちはしもの為に使っていた宝具のおかげで分からないだろうし。

「ずらかるよ！」

もしもの為にスキマを使って、孤児院に帰還する。

「あ、イギリス支社に行つてない」

再びイギリスにとんぼ返りで視察を行った。

40話（後書き）

ネギにGNシリーズの武器の一端を見せたいがための重要イベントに強制参加です。

これが、この物語にGNシリーズの武器を出した理由の一つです。

因みにGNシリーズの武器はOOガンダムの第4世代以降の武器です。

お便り待っています。

41話(前書き)

月日が飛びます。

41話

side 祐依

ハイブリッドボーイを見に行ったら、襲撃事件に巻き込まれるという、珍妙な出来事に巻き込まれた日から月日が経ちました。

あの後、家に戻った後、エヴァに話したところ、ナギを見たというところに食いついてきた。

どうやら、ナギに淡い恋心を抱いていたようだ。だが、ナギに子どもがいるという事実の数日落ち込んでいたのを初めのうちは笑って見ていたが、それが数日続くと、さすがに私を含めた周りの人も慰め始めた。

そんなこんなでエヴァの憂さ晴らしにエンドレス組手（模擬戦闘）を（エヴァの気が晴れるまで）ひたすら私とルイン、たまに千雨とさよが変わりを務めていたりした。

さすがに二人の時には大規模な魔法は控えてもらっていたが。

そのおかげで、二人の戦闘技術が格段に上昇した。

そのおかげで魔法使い相手なら結構戦えるところまで成長した。

これは怪我の功名と言ってもいいのだろうか…？

その後、傷心旅行として、エヴァを別荘経由で旅行に連れだしたりした。

その際にはエヴァは病気として夜の警備などは全て休み、家には偽物を用意して行った。

それから、色々あった。

三年生の時の麻帆良祭で図書館探検部主催の催し物で大人同伴で図書館島を探検することができた。

その時のメンバーは私、エヴァ、千雨そして、保護者役のランサーと孤児院の先輩役としてセイバーの五人で最深レコード記録を大幅に塗り替えた。

因みにルインときよはクラスの出し物の当番の時間が被り参加できなかった。

五年生の時には‘空を飛部’という非公式同好会を作った。

夢見がちな人や夢に向かって頑張っている人が入っている。

けど、非公式なので部室や部費などは一切ない。

だが、月日が経るにつれて、入ってくる人が増えていった。

因みに非公式なので、部活の掛け持ちにもならず、正式には登録されないから、気軽に入れる。

大学生から小学生まで幅広い人員がいる。

空を飛部の利点は同じ夢を持つ人が集まっていると言うことだ。

例えば、野球で甲子園を目指している少年がこの部に入った場合、高校生や大学生の先輩が手が空いている時などに指導をしてくれる。同じ夢を持っていた人が近くにいただけでなく、先輩が後輩に夢を託すこともあるし、親近感を持つこともあるし、何より、同年代だけでなく歳の離れた先輩と縦の繋がりができたりなど、メリットも多いのだ。

部活ごとで入っているとこもある。

中には野球部ではないが、スポーツが得意な人が練習の手伝いや試合の相手をするなど、内部に壁などはほとんど存在しない。

シーズンオフの時などは他の人の夢を手伝ったりするなど暗黙の了解が出来ていたりする。

格闘系の部活の方がわかりやすいかな？

総合格闘をする人が、各分野の人に教えてもらっていたりなどする。

運動部関連だけでなく、文化系の人も多くいる。

作品に煮詰まった時などに身体を動かしたり、他の分野の人の作品を見たり気分転換をする人もいるし、他の分野の作品の特徴を取り込んだ作品を作り上げる人もいたりする。

そんな感じで非公式のくせに麻帆良で最大規模の団体になっていたりする。

そんなこんなで小学六年生になりました。

修学旅行が明日から始まります。

場所は北海道。

美味しい食べ物がいっぱいです。

エヴァも今回は修学旅行は学校の行事だと、学園内の魔法使いには言って、やってみたらできた。と、説明している。

学園長と高畑教員だけが魔法使い側で真実をしっている。

それを踏まえて、白き月に強力な認識阻害用の魔法具を注文してい

た。

当然作るのは私。

高値で引き受けた。

効果を重視し、期限が一月程度しかもたない様に作ったので、中学校の修学旅行の時に再び金儲けができる

明日の準備をするためにいつものメンバーで買い物に来ている。

「ところで、明日から修学旅行なのに前日に準備が出来てないってどうよ？」

「別にいいじゃない。私はチカラを使えば、手ぶらでアマゾンの奥地に行っても平気でサバイバルできるわよ」

千雨の呟きに私はそう返す。

だが、千雨とさよはずでに準備は出来ている。出来ていないのはエヴァとルインと私である。

エヴァは行けるとは思っていなかった（説得が上手くいくとは思っていないかった為）ので準備ができていない。

ルインと私はカバンさえ用意すれば色々な物が‘倉庫’に入っているから、どうしてもよかったからである。

単純に日用雑貨から旅行用品、サバイバルセット、非常食から通常の食材、戦闘用の装備などなんでも‘倉庫’には揃っている。

物によっては錬金術で作ることも出来るし、何か足らなくても、どうとでもなるから、準備を忘れていた。

「で、何を見るんだ？」

「そうね。まずはエヴァの旅行用品の調達かな。その後はテキストにお店を回って、物色かな？」

「私のだけでいいのか？ 貴様らは大丈夫なのか？」

「私は既に終わってるよ」

「はい、私も準備できてます」

「擬装用のカバンがあれば」

「てな訳でエヴァのを見に行こう！」

そう言つて、白き月系列のお店を回る。

私とルインはともかく、三人には、以前に白き月系列の殆どのお店で使えるプレミアム会員のメンバーカードをあげているので、お得な買い物ができる。

「ほんと、このカードって便利だよな。安くなるし、ポイント付くし、交通機関の一部区間がタダでのれるし」

「あつはつは。プレミアムの一桁ナンバーだからこそだよ。それが一番高いから。あとは、関係者の上の方の人たちはまた別物のカードがあるけどね」

エヴァの買い物を終え、喫茶店「ノイエNEUE」でお茶にする。

「これで一通り揃ったか？」

「大丈夫じゃない？ 必需品はしおりに書いてあったし、それさえあればなんとかなるわよ」

店長の土郎さんことアーチャーのケーキを食べながら予定を話し合う。

「二日目の班別自由行動はどうしましょうか？」

「どうする？ どうかに美味しいもの食べに行く？」

「いいじゃねえか？それで。修学旅行なんて所詮は名前だけなんだし。基本は遊びじゃん。この学校じゃ」

「そうですね。楽しんだ方がいいですよ」

「じゃ、それでいきましょうか」

予定をアバウトに決め、明日に備える。

41話（後書き）

因みに麻帆良の魔法使いにとって、祐依たちのグループの認識は、エヴァを起点に、

- ・祐依 - ゲーム仲間
 - ・千雨 - 同上
 - ・ルイン、さよ - 祐依と同じ孤児院仲間
- という、認識です。

お便り待っています。

42話

side 祐依

修学旅行で北海道にきました。

初日は半分以上が移動で終わると言う、伝統的な欠陥だと思うのは私だけでしょうか？

「私もそう思いますよ」

バスで宿泊施設に移動中にルインの賛同を得た。

「あれ？ 今、声出てた？」

「いや、私には聞こえんかったぞ」

「私もです」

千雨とさよがそう答える。

「なんとなくです」

「にしては、的確だったわね……」

「まあ、いいじゃないですか。もうすぐ着きますよ」

「どうやら、もうすぐ今日の宿に着くようだ。」

因みに、班員は何時ものメンバーで、一番常識人で落ち着いている

さよが班長になっている。

宿の部屋に着くと、夕食までの自由時間に、

「さあ、夕食のおかずをかけて、一勝負しましょうか」

『おお〜！』

そういつて、‘倉庫’から取り出すのはUNO。

「イカサマは一切なし。発覚したら、問答無用で最下位。アンド、罰ゲーム」

「罰ゲームって、一体何をやらせるんだ？」

「ん？ そんなの考えてないわよ。何？エヴァ。やる気なの？」

「誰がやるか！ お前らの考える罰ゲームに自ら進んでやるうとする奴がいるか？」

「まあ、確かにな… あれはキツイってもんじゃない」

そうかな〜？

体術オンリーで私の研究用兼食材用の別荘の生物を狩ってくる。

（祐依が持っている別荘の一つにはトリコやモンスターハンターの生物がいるやつがある）

一人で農作業とか、うちの孤児院の無償奉仕とか。

別にたいしたことじゃないと思うけどな〜。

「じゃ、ルールは一般的なもので、誰かが上がった時の残っているメンバーは持つている手札の枚数分を加点。夕食が始まる前の十分前の時点で得点が少ない人から順に一位」

「よし、それじゃ始めますか」

そう言うって、千雨がカードをシャッフルし、それぞれに七枚ずつ配る。

- 結果発表。

一位	さよ	七点
二位	祐依	八点
三位	千雨	十点
	ルイン	十点
五位	エヴァ	十八点

「くそ〜！何故だ!？」

「エヴァさんって、顔に出やすいんですよ」

「だな」

「そうね」

「その通りですね」

「くっ！」

そして、夕食のおかずが一品エヴァからさよの下へ。

「このままじゃ、納得いかん。あとで、revengeだ！」

「何で、発音よく言ったの？」

「そんなものノリだ！」

夕食後、今度は大富豪をやったが、最下位はエヴァで、お土産でペナントと木刀を買うことに。

…ペナント売ってるかな？

二日目、班別自由行動は、転移やスキマを利用し、色々な美味しいものを食べに行った。

夜にも、身代わりを用意して、食べに行ったりした。

お腹を空かせるために時折私の別荘にスキマで行き、模擬戦運動をやったりした。

そのおかげで、色々なお店を制覇した。

お金は基本私のポケットマネーで済ました。

夜に宿の周りで戦闘があった。

たぶん、木乃香を狙っているのだろう。

まあ、祐依とルインと千雨とさよは魔法には関わっていないことになっていたので、どうでもいいが。

エヴァには協力要請がきていたようだが、修学旅行中は魔法を使わないと契約書を書かされたと言っ、参加せず。

因みに、書かせたのは学園長で、学園長のせいにした。

普段嫌っているくせにどうしてこういう時だけ手のひらを返すのだろうか？

転移は私かルインか千雨が担当した。

まあ、いいか。

「ところで、何でお前が木刀を買っているんだ？」

「ん？ 修学旅行と言えば、木刀でしょ？ ちゃんと、柄には洞爺湖って入っているんだから」

そう言っ、木刀を腰に差す。

「お前は侍になりたいのか？」

「何言ってるのよ。私の仲間にはもう本物の侍がいるわよ。それに、本物だっ、持ってるわよ」

‘倉庫’から、本物のただの日本刀を取り出す。

「わかったから、そんな危ないもんさっさとしまえ」

そう言われ、見回りの先生に見つかっても面倒なので、さっさとしまっ。

「それにしても、どっちも質が低いわね」

「そうなんですか？」

「てか、見てないでよくわかるな」

「まあ、魔力の流れとかでね。そうね」

スキマを開き、戦闘が見えるようにする。

「あゝ、これが本物の戦闘ですか？」

スキマ経由で戦闘を見ていたさよが尋ねてくる。

「こんなに隙だらけなのが、戦闘なのか？」

千雨もそう聞いてくる。

「ええ。これが、どっちも本気の戦闘よ。まあ、二人の方が、圧倒的に強いからね。そう思うのは仕方がないわね」

「そうか、貴様らは私たち以外の戦闘を見るのは初めてか… こんなような奴らばっかだぞ。十年以上行つてないからわからんが、魔法世界はもっと上だな」

「そうなんですか」

「別に心配しなくても大丈夫よ。二人とも強いんだし、手段を選ばなければ、ほぼ負けないわよ。エヴァにだって、勝てる時があるんだから。エヴァは最強の魔法使だって呼ばれるほど強いんだから」

「おい。私は祐依が真面目にやって負けるところを見たことがないんだが。訓練か、ふざけている時しか、負けてないよな？」

「ん？ ああ。私を基準にしたらダメよ。私は研磨した時間が全然違うんだから。それに手札の数もちがうんだし」

「ああ。そうだったな。お前を倒すのは無理ゲーよりも難しいんだっつたな」

話をしている内に戦闘が終わり、スキマを閉じる。

その後、しばらく談笑したのち、眠りについた。

・三日目。最終日。

クラス単位で行動し、帰りの飛行機に。

「ダウト」

「く、何故わかった」

今度は、ダウトをやっている。

ルインは参加せず、透視などのイカサマ防止をしている。

数回まわり、

「七」

『ダウト!』

全員の唱和。

「くそ〜! 貴様ら仕組んでいないよな!?!」

「当たり前でしょ。そんなことしてもおもしろくないじゃない。それに防止役のルインがいるんだし」

やっぱり顔に出やすいエヴァのぼろ負けで終わった。

42話(後書き)

お待ちしております。

43話

side 祐依

修学旅行が終わり、もうすぐ麻帆良祭の時期だ。

クラスの出し物はなぜか、私とルインが主体になって、さっさと準備を終わらせた。

別に私たちは委員長ではないのに…

準備で大活躍した私たちは当日の仕事を若干減らすことに成功した。むしろ、周りの人が提案してくれた。

なので、当日は武道大会に出場できるようになった。

341

「今年は出るのか?」

「ええ。やっと、一目に晒せるぐらいになったからね。まあ、素顔は隠すけど」

「大丈夫なのか?」

「平気よ。結構前にローブを被ったやつとか、仮面をしてたやつ、メイクをしていたやつもいたんだから」

「そうなのか。まあ、頑張れ。私は今回は見ていよう。お前のその

体術がどこまでやれるのかな」

「期待しててね」

エヴァとそんな会話をして、

当日。

『さあ、麻帆良武道大会。予選一組目の試合を始めます』

「さて、行きますか」

「ところでそんな恰好で本気で出るのか？」

「当然よ」

私は緑色をしたお面を身に着け舞台に向かう。
ちなみに高校生ぐらいの姿になっている。

そうして、私は舞台上がった。

『では、はじめ—！』

予選は五人程度が一斉に戦うバトルロワイヤルだ。

全員が私を攻撃対象に向かって来る。

素顔を隠しているからだろうか、それとも、私の実力を見抜いた奴

がいたのか…

初めの三人の攻撃を躲し、最後の人の攻撃に合わせ、

「虚刀流 柘榴！」

カウンター気味に掌底を手加減しながら、顎に決め、KOする。

「な！？ 怯むな！ 全員で一斉にやるぞ！」

相手の一人が他の二人に言う。

「はあ！」

「せい！」

「やあ！」

三人が一斉に攻撃しようと向かって来るが、

「虚刀流 薔薇！百合！梅！」

前蹴り、胴回し回転蹴り、そしてまた回転蹴りをそれぞれに叩き込む。

『決まったー！ー！！ 本選出場は、ゲルググ選手だー！って、明らかな偽名だ！』

実況が騒いでいるのを無視し、舞台を降りる。

控室で変装を解き、さっさと去る。

予選が終わるころに戻ってこよう。

「さすがだったな。圧勝だったな」

「ありがと。明日の本選はどうかな？」

「大丈夫だろ。まあ、空を飛部に入っている格闘系のやつらが多いだろうな」

「でしょうね。私の相手も見ただことある人だったし。そのうち一人は私が練習に付き合った人がいたし」

「そういや、お前は色々なところに顔を出してたな」

「祐依さんって、何でも出来るんですね」

「いや、それほどでも」

「貴様に弱点などあるのか？」

「ん。人の話を聞かない、理解しない、しようとしない、奴らかな？」

「それはお前が嫌いな奴じゃないか？」

「そつとも言っわね」

談笑しながら祭りを見て回る。

夕方近く、私は本選の対戦表を見るために武道会場に向かっていた。

「お前に勝てるやつなんかいるのか？」

「さあ？ でもこれは体術限定だし、一般人相手だから、気は一切使っていないから、可能性はゼロじゃないわよ。あえて言うなら、今の弱点は防御力と耐久力かな？」

「攻撃が叩き込め、且つ持久戦に持ち込めれば勝機はあるのか」

「そんなとこよ」

翌日。

『さあ、麻帆良武道大会。本選の始まりです！ 第一試合は予選で圧倒した量産型ザクのお面をつけた、ゲルググ選手VSボクシング部主将・空を飛部所属如月一選手』

やっぱり本選出場者の全員が空を飛部に所属しているメンバーだった。

「虚刀流 木蓮！」

数回牽制をし合って、相手が乱打戦に持ち込もうとしたところに、膝蹴りを叩き込む。

「がはっ！」

「虚刀流奥義 落花狼藉！」

怯んだ相手に足を斧刀に見立てた踵落としを決め、KOする。

『決まったー！ ゲルググ選手の勝利だー！』

その後もまあ、特に苦戦することもなく優勝することができた。

『優勝者のガンダム選手にインタビューです。どうして偽名とお面を？』

「単純にネタです。ネタにはしっているので、素顔を見られたくないし、今後の為に本名も知られたくないからです」

『そうですか。では、ゲルググ選手の使っていた流派は、虚刀流とおっしゃっていましたが、それは？』

「あ、それこそが、ネタです。創作物の中にあつたのを真似たんです」

『それにしても強かったですね』

「訓練しましたから。来年か、再来年には私の弟子をこの大会に出場させますよ」

『そのお弟子さんの名前は？』

「それは秘密ですね。まあ、あえて言うなら、空を飛部のメンバーですね」

『わかりました。それでは出場するのを楽しみに待っていますよ。ところで、何故名前とお面が一致してないのでしょうか?』

「それはインパクトがあるようにですよ。ザクのお面の下には他のお面もつけてますよ」

そう言っつて、量産型ザクのお面を外すと、下からは、グフのお面が出てくる。

『そうですか。ありがとうございます』

「いえいえ、では」

そう言っつて、舞台を去る。

「ところで、お前の弟子と言っつのは、千雨か?それともさよか?」

疲れをとりつつ、くつろぐ為にはエヴァの方の別荘にいと、エヴァがやっつて来て、尋ねた。

「ん? ああ、あれは相沢祐依、私の事よ。私とガンダム選手は別人っつてことになっつてるし、虚刀流が十分使えるのがわかつたから、祐依としての私が使っつても大丈夫なようにする為よ」

「そんなことする必要があるのか？」

「念の為ね。うちの孤児院には変わった先輩とか多いし、平気よ」

43話(後書き)

お待ちしております。

44話

side 祐依

あれから、月日が流れ、中学生になりました。

麻帆良中等部の1年A組になりました。

いつものメンバーは一緒のクラスになったのはいいですが、他にも小等部のころから、異常が目立つ生徒や中等部から入ってきた生徒の中でも、異常な生徒が集められている。

しかも、担任が高畑・T・タカミチである。

絶対にこのクラスには何かある。

因みに寮の部屋は私とルイン、千雨とさよ。エヴァは森の中のログハウスで暮らしている。

私たちもよくエヴァのうちに遊びに行く。

当然、自称正義の魔法使い曰く悪の魔法使いであるエヴァとよく一緒にいる私たちは目をつけられている。

その中でも、私は白き月の経営者の子供となっている（実際は本人だが、知っている者はいない）ので、よく監視の目があるが、たいしたことはない。

エヴァの家には遠視や透視などの魔法は効かないように結界を張っているし、私たちの部屋には、私の親から、置物型の結界を張る魔法道具を貰って、使用している。

魔法道具としては知らないフリで。

今、私たちが影の月で魔法を知ってるのはエヴァだけになっている。

エヴァは私たちに魔法を教えていないと、学園長には説明している。まあ、私たちの中で、この世界の魔法を使うのはエヴァぐらいだし、戦闘は千雨やさよが戦闘についてなどは習ったが、魔法は教えてもらっていない。

そんなやりようによっては簡単にボロが出てくるのに、一向にばれていない。

違った意味でここが心配になったりもする。

が、正直、どうでもいいので、前言撤回して、陰で笑っている。

正直、魔法使いよりも、バトルジャンキーの方が、困る。

中等部からはいつてきた生徒の中の数名が度々勝負を挑んでくるが、尽くスルーしている。

だが、中には空を飛部のメンバーがいて、練習中に手合せをするところがあるが、あくまで手合せなので、手加減をしているし、虚刀流も他の武術も使わず、一般的なもので相手している。

入学当初、エヴァが度々姿を現さなかったが、絡繰茶々丸というガインイドと呼ばれるロボットの従者を連れて来た。

そんな訳で、影の月に暫定的に一人？増えた。

そんなある日、

「スマン……」

エヴァに頭を下げられている。

どうやら、エヴァの呪いと封印が解けていることが、この自称正義の魔法使いにばれたらしい。

どうやら、ゲームの特訓と言う名の遊びで、徹夜をした日に麻帆良に侵入者が入り込み、エヴァが対処したらしいのだが、その時に徹夜明けのテンションでやり過ぎたため、他の魔法使いが不振に思い、問い詰めた所、エヴァがあっさりばらしたらしい。

「で、どうするつもり?」

「…スマン」

「録画中。録画中」

エヴァが頭を下げている様子を茶々丸が録画しているようだ。

…あれ、従者じゃ?

エヴァのせいで、よく一緒にいる私たちまで監視の目が増えた。

さらにタイミングの悪いことに、監視の目が厳しくなった日に、エヴァの家に遊びに行った帰りに侵入者に見つかり、襲いかかってきたところを、咄嗟に虚刀流で叩きのめしてしまったところを、監視していた同じクラスの龍宮真名に目撃され、学園長に報告されてしまった。

しかも、式神で低級な鬼を召喚されたが、鬼にも怯まず、むしろ、虚刀流の奥義で倒してしまったとこまで、見られていたようだ。

幸い、エヴァの別荘で、模擬戦をし、ゼロを展開したままだったの

で、素顔はばれていないが、エヴァの知り合いに麻帆良に属していない裏の関係者がいると知られてしまった。

だが、エヴァが私の本名ではなく、影の月で名乗っているミモザ・フルールの名を出したのだが、学園長はエヴァの解呪の仮の真相をしっているため、私「ミモザ・フルール」と知られてしまった。

そこは、学園長に口止めをエヴァがやったようだが、時すでに遅く、私の实力を見ようと、呼び出し状を自室に送られた。

『今夜0時 世界樹前広場に来い』

とあった。

「それで、祐依は行くのか？」

「ん？ 行くわけないじゃん。私の部屋のポストに入ってたけど、宛名も日にちも書いてない。さらに、差出人の名前もない。そんな不審な呼び出し状に千雨は行く？」

「そうだな、そう言われると、行かねえな。間違ってる可能性だってあるんだから」

「でしょ？ それに後でこれは寮の廊下に落とすから。封筒の中に戻して、開けてないようにしてある状態だね。一度落としてしまえば、その手紙は私の下に届くことはないだろしね」

「いいのか？ それで？」

「苦情はエヴァにいくかもしれないけど、エヴァは既に学園長に不

干渉を認めさせたみたいだから、再び来ることはないはずだからね」

「うっ…」

エヴァが、何故か視線を逸らす。

「エ・ヴァ？」

「だ、大丈夫だ！」

「エヴァ。今、正直に言えば、罰ゲームが少なくて済むよ」

「わ、わかった！ 正直に話す」

私の笑顔を見て、冷や汗を流しながら、弁明を始める。

「お前の實力を見せることは認めてしまったのだ。お前の私たち以外のやつとの戦いを見てみたいと思ってしまう…」

「エヴァ。私の食料用の別荘で食材を採ってきたもらうつからね。指定対象は私たち全員が指定するからね」

「そ、そんな…!？」

エヴァが絶望した表情をしている。

「それで、祐依は行くのか？」

千雨が再度尋ねるが、

「ん？ 行くわけないじゃない。理由はさっき言った通りよ。じゃ、エヴァ。逝きましようか」

「ま、待ってくれ！ それに字が違っただろう!？」

エヴァを引きづって、エヴァの別荘経由で私の食材庫に行く。

side 学園長

やっぱり、相沢祐依は裏に関係があったのか…

エヴァの封印と呪いを解いた時から、注意をしていたが、エヴァの封印が解けてしまったとバレしてしまった時に監視を強めた日に引っかかるとは…

じゃが、エヴァ曰く名前はミモザ・フルールと言う偽名みたいじゃない。

危険かどうか確認するために呼び出し状を出して、戦闘が出来る者を集め、警備を最低限にして、みたのじゃが…

現時刻1時。

呼び出しの時間から既に一時間過ぎている。

「学園長！ 学園長が呼んだという奴はどっしたのですか!？」

まわりが騒いできている。

情報遮断の結界を張ってあるから、周りには心配しなくてもいいが、魔法先生や魔法生徒の方が、まずくなってきた。

「今、連絡を取る。もうしばらく待つてくれ！」

タカミチ君を見、

「タカミチ君。連絡を！」

「は、はい！」

連絡網を私的流用だが、祐依の携帯に電話を掛ける。数回コール音が鳴るが、

『ただいま、電話に出ることが出来ません。御用の。』
出ない。

「学園長。出ません！」

「そりゃ、そうだろうね。こんな時間まで起きている人は少ないだろうね」

近くにいた龍宮君が呟く。

「そうじゃ！ エヴァンジェリンはどうした!？」

「エヴァンジェリンさんはいないよ」

「なんじゃと!?!」

どういふことじゃ!?!?

何故、来ないのじゃ!?!?

「すまないの。今日は解散してくれんかの。どうやら、今日は来れないようらしくての。また、後日皆を呼ぶかもしれないがの」

皆は渋々じゃが、帰ってくれた。

「タカミチ君。明日、放課後に学園長室に呼び出すから、頼むぞ」

「わかりました」

44話（後書き）

普通、怪しい手紙なんて、無視しますよね？
祐依は確信犯ですが。

お便りまっています。

45話

side 祐依

現実世界での次の日の金曜日。

-ピンポンパンポーン

『麻帆良女子中等部1年A組相沢祐依さん。相沢祐依さん。至急学園長室まで』

そんな放送が放課後に入った。

「おい、呼び出しだぞ。何したんだ？」

「ん？ ああ、たぶん、昨日のじゃない？」

「大丈夫なのか？」

「平気よ。平気。じゃ、エヴァ後よろしくね」

「くっ。わかった」

エヴァが悔しそうにしながら、返事をする。

「じゃ、ルイン、さよ。行きましようか」

「はい」

「わかりました」

「おい、どこに行くんだ？」

「ん？ 私んちの孤児院よ。今日、明日スタッフが少ないから、手伝いに行くのよ。外泊届は新田学年主任に提出して、許可も貰ってるのよ。蛇足だけど、新田学年主任はうちの孤児院の出身者と仲が良くて、孤児院のことよく知ってるのよ。それに時々、NEUEの夜間の部で食事に来るからね。私もよくNEUEで手伝ってるから、公私別だけど、仲がわりといいのよ。だから、結構正直に理由とかを話せば、納得してくれることが多いのよね」

「そうか…で、エヴァはこれからどうするんだ？」

「私は、学園長室で対話だな。昨日の罰ゲームを消化できなかった、罰だ…」

背中に哀愁を漂わせながら、茶々丸を連れ、学園長室の方へ歩いていく。

「千雨はどうするの？」

「そうだな…宿題とかも大したことないし、久々にブログの更新でも張り切るか」

「そう、頑張ってね」

「ああ」

千雨と別れ、麻帆良の外の孤児院に向かう。

sideエヴァ

「くそう… あそこで、あの魔法が当たってれば…」

「マスター。もうすぐ学園長室です。しっかりしてください」

「ああ。わかっている」

昨日の罰ゲームで最後の食材で気を抜いてしまい、達成することが出来ず、これからのジジイとの対話をせねばならん。

「ジジイ。入るぞ」

「ふお？ エヴァンジェリン。今日はお主を呼んではおらんぞ？」

「祐依に言伝を頼まれたのだ。昨日の罰ゲームの代わりにな」

「何故、相沢祐依はおらぬのじゃ？」

「祐依は、今頃孤児院に行くために電車の中だろう。この週末は、孤児院の手伝いだそうだ。何やら人手が少ないそうだな」

「おや？ そんな話は聞いていないんだけどな？」

タカミチが首を傾げる。

「聞いていないのか？」

「祐依さんは、よく出張のために学園にいらつしやらない高畑先生を飛ばして、学年主任である新田先生に直接外泊届を提出したそうです。以前に朝は学園にいらしたのに、昼放課には突然出張と言って、いなくなつた高畑先生のサインが貰えず、困っていたところ、偶然通りかかった新田先生にダメ元で聞いたところ、新田先生は祐依さんのいへの孤児院の事をよくご存じのようで、孤児院関係でしたら、直接きてもよいと許可を得ているそうです。祐依さんは学業も生活面も問題がない生徒ですし、非公式ですが、空を飛部の部長を務め、色々な部活やサークル、クラブなどに協力したり、飲食店であるNEUEでお手伝いをしていたりと、信頼もおける生徒の為、許可を与えたそうです」

茶々丸が説明をしてくれたが、

「おい、何時の間にそんな情報を得た」

「数日前に新田先生に書類を提出に行った際に祐依さんと孤児院についてお話ししている所に遭遇しまして、その時に伺いました」

「うむ」

「そうだな、確かにタカミチはしょっちゅう学園にいないから、そう言った手続きをするのに不便だな。直接、学年主任に行った方が早いな」

タカミチも出張で学園にいないことが多く、担任としての行動がで

きていないと自覚したのか、何も言えないでいる。

「それだけだ。祐依は月曜の朝に麻帆良に戻ってくるそうだと」

「相沢祐依は昨日どうして来なかったのか、お主は知っておるのか？」

「ああ、今日学校で話していたぞ。変な手紙が届いてたつて、その手紙には宛名、日にち、差出人がないから悪戯じゃないか、と。それに、寮の門限を破らなきゃいけないぐらいの時間に呼ぶなんて、バカじゃないかと、言っておったな」

「ふお？ お主は相沢祐依に何も話しておらんのか？」

「何を話す必要がある？ 私はここにいるが、貴様の部下になどなつた覚えはないしな」

「ふお？ そうか、一つだけ聞きたい。お主は相沢祐依に魔法使いについて、何か教えたのか？」

「いや、私は何一つ教えてなどおらんよ。あいつは、家の方から教わつたんじゃないか？」

私は、封印が解けたことがバレ、既に用済みになったペンダントを軽くジジイに向かって投げながら言う。

「そいつを作ったのも、あいつの家の会社だろう？ それぐらい聞いているだろう」

45話(後書き)

お待ちしております。

46話

side 祐依

偶然が重なり、魔法使いとの接触を避けた週明け。

「はあく、また今日から、また学校か」

「朝っぱらから、何鬱になってるんだ？」

「ん？ 自称正義バカの魔法使いが面倒なだけだよ。エヴァ曰く、まだ諦めてないみたいだから」

「それで、祐依は行くのですか？」

「ん？ 行くわけないじゃん。一般の先生たちには優等生を演じてるだよ。そんな時間に外出するわけないじゃん」

「そのわりには家によくいるよな？」

エヴァ登場。

「おはよ。エヴァ。エヴァんちの時は殆ど、別荘経由で帰ってるから、知っている人はいないのだよ。エヴァソン君」

「誰だ！ それは！ それにそのテンションは何だ！？」

「だって、絶対自称正義クソの魔法使いがうるさいじゃん。ふざけてないと、登校拒否になるぐらい、不快なんだよ」

「それはわからんでもないが… 今日の放課後もお前を呼び出すつもりだぞ。ジジイは」

「今日に行くわよ。だから、鬱なんじゃない」

ため息をつきながら、登校する。

「相沢祐依君。今日の放課後、時間があるかい？」

HR後、担任からの問いかけ。

「はい。夕方から、NEUEでお手伝いがありますが、そんなに時間がかからなければ、大丈夫ですよ」

「そうか、じゃあ、放課後に学園長室に来てくれるかい？」

「はい。わかりました」

「ほらな、きたらろう」

エヴァが声をかけてきた。

「それぐらい、わかるわよ。ここの自称正義クズの魔法使いは監視してるから、それぐらいは知ってるわよ」

「お前は監視してるのか？」

「ええ。サーチャーを撒いてるし、チカラの一部がそう言うのに特化してるのもあるしね。そもそも、私がここにいるのは、監視が大きいからね」

「そうだったのか……」

「ええ。千雨を見つけたのも、それでね」

その後、話はそれていき、談笑になった。

放課後。

・コンコン

「麻帆良中等部、1年A組相沢祐依です。失礼します」

「うむ」

ノックをして、学園長室に入る。

中には、学園長と、担任である高畑教員がいた。

「どつ言った」
「用件でしょうか？」

「お主に聞きたいことがあったの」

「祐依君はここのことを知っているのかい？」

高畑教員がぼかして質問してきたので、

「はい。麻帆良学園の女子中等部にある学園長室ですよね」

「ふお？ いや、確かにそうなのじゃ…が… お主は何者じゃ？」

眼光が二人とも鋭くなってきた。

「はい？ え…と… 麻帆良学園に在学中の中学生で、家が孤児院を経営しているため、よく手伝いにいつていて、先輩が経営している喫茶店のNEUEのお手伝いもしています。あ、非公式同好会の空を飛ぶの部長もやっています」

だから、あえて語らない。

「そう言う意味じゃないんじゃないの？」

- !

学園長改め、ジジイが人の頭の中を勝手に覗こうとしてきた。

が、

「ふおっ！？」

月のペンダントのおかげで効果はない。

「どうしました？」

ジジイの額に汗が浮かび、顔色が悪くなっていく。

高畑教員がポケットに手を入れ、私をさらに睨みつける。

「何をしたんだい？」

警戒はレッドゾーンかな？

「何って、お二人の問いに答えてるだけですが…」

ジジイにはゼロが呪い返しを力技で行い、呪詛となって、ジジイに返した。

「それで、本当に何のようでしょうか？」

・ブーブーブー

高畑教員が警戒する中、携帯電話の着信音が鳴り響く。

「っと、すみません、少々外します。」

私は電話に出るために部屋の外に向かう。

「もしもし、あ、はい。わかりました。そうですね、今、学園長と高畑教員にイマイチ訳のわからない呼び出しで、帰れないんですよ。お店の方にはルインが私がつくまでの代理を頼んでいますけど、そろそろ着くころだと… あ、着きましたか？ わかりました。私

もこちらが片付き次第、そちらに向かいますので。はい。わかりました。失礼します」

電話を終え、部屋に戻ると、

顔色が非常に悪い、（見ているこちらまで、気分が悪くなるほど）ジジイがいた。

「（ゼロ。一体、何やったの？）」

「（マスターの頭の中を覗こうとしていたので、代わりに自身の嫌な記憶や心的外傷トラウマをつついて、抉ってみました）」

「（そう。わかったわ）」

ゼロとの念話を終え、

「あの、高畑教員。学園長の体調がすぐれないようなので、そろそろ、失礼したいのですが」

「え、あ、ああ。すまないけど、今日はもういいよ」

「わかりました。では、失礼します」

NEUEのお手伝いに行く。

side 学園長

相沢祐依を問い詰めてみても、全く要領を得ない。

頭の中を魔法で覗こうとした途端、甦る、苦い過去。嫌な記憶。

「学園長。大丈夫ですか？」

「ふお!？」

気づくと、タカミチ君が僕の肩をつかみ、揺すってあった。

「ふお? ああ、タカミチ君か…」

「大丈夫ですか? 彼女に一体何をされたんですか？」

「いや、彼女の頭の中を覗こうとした途端にの、僕の過去が甦って来ての。それに、彼女は魔法を一切使ってはおらんよ。おそらく、彼女の親が送った魔法具じゃろう」

（これは、ゼロが呪詛を行った際についてにやった、記憶の改竄です）

「そうですか。では、彼女の裏との関係は？」

「それはわからん。おそらく、彼女には多種多様な魔道具を色々所持たされているのじやろ。今回はその一つじやろ。他には、部屋に結界を張っているのも、魔道具のようじやからの。これは、龍宮君の報告じやが、置物が結界を張っていると、部屋を訪れた時に見つけていたからの。親が話しているのかもしれないが、本人は今知らないように演じているの」

「それで、どうするんですか？」

「一先ず、監視の出来る限りの強化じやな。じやが、やりすぎて、親の逆鱗にでも触れでもしたら、麻帆良はお終いじやな。白き月は麻帆良の流通にほぼ何らかの形で関与しておるからの。それに、呪物や魔法関係は旧世界で白き月が一括で管理しておるからの。なんとかして、彼女を取り入れたいんじやがのう」

「それは、難しいですね。彼女から協力を申し込まれば、容易いんでしょうが、彼女は今現在は、魔法とほぼ無関係な生活を送っていますからね。魔法で誘導しようにも、彼女の持つ魔道具で効果は一切ない。それどころか、呪詛が返ってくるみたいですね」

「うむ。彼女が、裏、若しくは、魔法に関与している証拠がなければ、下手な接触は控えた方が、よさそうじやな」

side 祐依

監視が増えたわね。

ストーカーって、通報でもしよつかしら？

46話(後書き)

お待ちしております。

47話

side 学園長

「ガンドルフィー二君。以前の収集の時に呼ぼうとした人物はの、その日の朝に盲腸で病院に運ばれ、そのまま、入院してしまったの、そのせいで、来れなかったみたいじゃ。生憎、入院先の病院が白き月が経営している病院での、探るに探れんのじゃよ。じゃが、あそここの警備は入るものだけでなく、出る者も警戒しておるから、しばらくは気にせんでいいぞ。退院してきたら、また収集するから、関係者に連絡を頼むぞ」

「わかりました。あの、その人物の名前を教えてくださいませんか？」

「おお、忘れておったわ。すまぬの。名前はミモザ・フルール他の細かいことは集まった時にするからの。とりあえず、今は探ろうとは絶対にせぬ様にな。入院中の病院は白き月系列じゃから、下手に手を出すと、麻帆良が干からびかねないからの…」

「は、はい。わかりました。では、失礼します」

ガンドルフィー二君が部屋を出て行く。

「ふう。タカミチ君。監視及び調査の方はどうかの？」

後ろに控えていたタカミチ君に声をかける。

「監視の方は主に龍宮君に依頼をして、色々と探ってもらっています。僕の方も探ってはいるんですけど、特に大きな成果は出ていま

せん。やはり、光の月のプロテクトは非常に高く、侵入し、調べ
ことはできません。市役所などから、正規のルートなら閲覧だけは
出来るようですが、改竄などは、一切できません。色々な人に聞
いてみても、何と言いますか…高評価ばかりで、そう言った話は聞
きませんでしたね」

「なるほどの。電子妖精は光の月のプロテクトに一切歯が立たず、
部屋やエヴァンジェリンの家を監視しようにも、結界で不可能か…
どうしたもんかの？」

「やはり、ボロを出すのを待つしか… いや、エヴァが前みたいに
口を滑らせれば…」

「それしかないかの。すまんが、エヴァに探りを入れてみてくれ
るかの」

「わかりました」

side 祐依

数週間後、エヴァが性懲りもなく、また口を滑らせた。

「エヴァ」

「ひっ！ た、頼む！ 待ってくれ！」

エヴァを引きづりながら、私の戦闘訓練用の別荘へ。

「録画中。録画中」

茶々丸はいつもの事なので、スルー！。

「ぎゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！」

GNソード？でエヴァを斬り、撃ち、吹き飛ばす。

その後、‘倉庫’の中の不死殺しや治療不可といった概念を持たない武器を使って、戦闘訓練（一方的）を行った。

「で、エヴァ。今度は何を言ったの？」

みたいな、石の上に正座をさせている。

「お前が魔法戦闘を行えると」

「ルイン。二枚追加」

「はい」

正座しているエヴァの足の上に石の板を二枚乗せる。

「な！？ ちょっ！」

「録画中。録画中」

「エヴァ。そのまま、30分反省」

ルインと隣の部屋に移動し、

「はあゝ。もう隠す方が面倒よね」

再び届いた呼び出し状。

今度はキチンと宛名と日時、差出人が明記してあった。

『相沢祐依殿。一週間後の〇月？日午後九時に世界樹前広場に参られたし。関東魔法教会理事長近衛近右衛門』

「以前指摘した点は改善してあるし、行くしかないかな」

ジジイには既にエヴァのせいで知られている。
幸い、知っているのはジジイとT3タカミチだけだ。

—！

「ルイン。ちょっと、研究室にいつてくるから」

「わかりました」

s i d e o t h e r

当日。

世界樹前広場には数十人の人がいた。

その中には学園長こと、関東魔法教会理事長近衛近右衛門の姿があった。

「ふおっふおっふお。みんな待たせてすまんの。以前のミモザ・フルール君が今日やって来る。ここで、話をした後、戦闘を見せるそうじゃ」

「学園長。その人物は本当に安全なんですか？」

「ふおっふおっふお。そこは大丈夫じゃよ。わし達が何もしなければ何もしてはこんぞ」

・コッ コッ

石畳の道を歩く音が響く。

「どっちら来たようじゃの」

広場にいた全員の視線が新たにやって来た人物に注がれる。

「こんばんわ。ミモザ・フルールよ」

認識障害をかけたノア・ミナツキの姿のミモザ・フルールが現れた。

「貴様、何故顔を隠している！」

魔法先生の一人が声をあげる。

「素顔を見せたくないからですよ。酷いけがをしているんですよ」

（キセキの錬金術師inリリカルなのは15話参照）

つつかかて来た魔法先生他数名に仮面を外し、顔を幻術見せる。

「うっ」

「おえ」

その数人が気を失う。

「女性の顔を見て気を失う失礼な人はほっといて、話の続きをいいですか？」

「ふお！？ うっ、うむ。お主はどうして我々に今まで関与してこなかったのじゃ？」

「魔法は秘匿すべきものではないんですか？ それに、上からの指示ですね。白き月はどこにもつくなど」

「貴様、何故我々正義の魔法使いに協力しない！？」

「正義の反対は悪なんかじゃないんだ。正義の反対は『また別の正義』なんだよ。」

「は？」

「今のは以前に知り合いが言っていた、セリフを言ってみただけですよ。あなたが思う正義とあなたの隣にいる方の思う正義は全く同じですか？ 例えば、宗教戦争ではどうですか？どちらの信者たちも自分たちの信じる宗教の為に異教徒を滅ぼそうと殺し合いました。信者たちには失礼ですが、開祖が言ったものと信者たちが信じているものは同一のものでしょうか？ どこかで、伝える時に齟齬が起きませんか？全員が同じ思想ですか？ 宣教師が伝えたものが土着の信仰と混ざり合い違うものとなりませんか？ さらに経典の解釈の違いにより、同じ宗教の信者の間で殺し合いもあります。さて、この中に正義はありますか？」

ミモザ・フルールが周りを見渡す。

「どれも、自分が信じているものという酷く抽象的なもので人殺しを行っていませんか？ そもそも、正義という言葉自体が酷くあやふやではありませんか？ 例えば、物語などに出てくる正義の味方や勇者は結局は敵を殺していますよね？ 平和を守るためと大義名分を掲げていますが、敵の中には世界を救うために活動している者もいました。ですが、主人公とは道が違う為に敵対し、戦い、殺されていきます。中には、敵が行動したおかげで、主人公が世界の危機に気づくといったものもあります。中には家族の病気を治すために後に悪の組織と呼ばれる組織に入り、治療方法を探そうとし、その過程で、主人公と遭遇してしまい、殺されました。さて、その家族の方はどうになりましたでしょうか？ 残された家族は主人公をどう思いますかね？ 世界を守るためには仕方がない？ いえ、家族を殺した主人公を恨むでしょうね。どうでしょう？ 世界を救った主人公は、周りから正義や英雄と称えられました。ですが、主人公は恨みを買っています。家族を助けたい。その為だけに、悪の組織の技術力を目当てに入った人は殺されました。その家族は主人公

を殺したいと願い、切望し、行動を開始し、主人公に攻撃しますが、あえなく返り討ちに遭い、主人公には裏から足を洗えと諭されます。裏に足を踏み込む原因を作り上げた人物に言われても、聞きませんよね？ 今後も彼らは主人公を殺そうと画策します。さて、彼らは正義の味方を殺そうとする‘悪’でしょうか？ 当然、何かを成そうとするなら、何かを代償に失います。その代償は仕方がない？ いえ、所詮は人殺しです。

さて、自称正義の魔法使いの皆さん。あなたがたは正義であると、胸を張って言えますか？ そもそも、何を根拠に正義と名乗ってるのですか？ 当然、名乗るのにあたって、あなたがた個人の価値観や主観、思想は一切含まれていませんよね？ それらに反するから、相手を悪などと言いませんか？」

『・・・』

ミモザの言葉に全員が言葉を失う。

「さて、質問に応えましょう。私は今までに一度も正義とは名乗ったことはありません。人を傷つけたことも恨みを持ったこともありません。今の問いにすぐに反論どころか、意見も言えない人たちと一緒にいても、勝手な思想を押し付けられるだけですからね。悪と言われるだけでしょうか？」

「そこまでじゃ」

近衛近右衛門が口を開く。

「お主の言い分はわかった。ここにいる全員に大きな影響を与える程にの。それで、エヴァンジェリンから、話があったと思うが、実力を見せてもらっても、構わんかの？」

「ええ。エヴァにはそう言われたからね。お相手は？」

ミモザは二つ返事でOKを出す。

「誰か、希望者はおるかの？」

近衛近右衛門が問うと、

「学園長。私にやらしてください」

ガンドルフィーニが立候補する。

「わかった。ミモザ殿。よろしいかな？」

「私はエヴァ以外に知っている人はいないんだから、誰でもいいわ
よ」

他の人が広場の上に入り、ミモザとガンドルフィーニが対峙する。

「いいかね？」

「はい」

ガンドルフィーニが銃とナイフを構える。

ミモザも *misfortune* と *happiness* の二丁の銃を構える。

「では、はじめ！」

近衛近右衛門の声に反応し、二人が動き出す。

・ドン　・キン

ガンドルフィーニが撃った銃弾をミモザが撃ち落とす。

「な！？　この距離で撃ち落とすって正気か！？　なんて、腕だ！
？」

二人の間は5メートルも開いてはいない。

「ふふ、戦闘中に停まってはいけませんよ」

・ドドオン

お返しとばかりにミモザが二発放つ。

「くっ」

・キン

一発は躲し、残りの一発はナイフに当たり弾かれる。

・ドン！

ガンドルフィーニがガンドルフィーニが再び撃つが今度は銃身の下
部に弾かれる。

数分の間、近距離戦のガンカタになる。

「潜身脚」

ミモザが、身を屈め足払いをかけ、体勢を崩させ、蹴り上げる。

「ぐっ！」

追撃を加えようとした時に、

「グサツ！」

「が!？」

ミモザの右腕にナイフが刺さる。

ガンドルフィーニが手にしていたナイフを投擲したのであった。

「チャンスだ!！」

「ドンドンドン！」

残った弾を全て放つ。

数発は外れ、土煙を上げる。

「どつだ!？」

ガンドルフィーニは銃に弾を装填し、構える。

砂煙が晴れると、そこには…

47話（後書き）

まさかのガンドルフィーニの勝利？

因みに、最初の学園長の発言は虚言です。
学園長の部下への威嚇と保身です。

お便り待ってます。

48話

side other

砂煙がはれると、そこには一匹のタヌキがいた。

右の前足にナイフがささり、体の至る所に銃痕がある遺体があった。

「な！？ どういうことだ！？」

上の人も気づいたのか騒ぎ出す。

「タヌキに化かされたんですかね？」

「誰だ！？」

世界樹の方から、声がし、全員が武器に手をかけ、振り向く。

「さて、久方ぶりですね。ミモザ・フルールですよ」

世界樹に背を預けていたミモザが歩いてくる。

「っ！？ お主はさっきまでガンドルフィーニ君と戦っていた筈」

「失礼。さっきまでは、偽物ですよ。あ、戦闘前の言動は本物ですよ。私の代わりに代弁してもってました。かつて、交渉の場で襲われたことがありますね。それ以来、身代わりを使っているんで

すよ」

「…身代わりか」

「正確に言つと、作り物ですがね。ホムンクルスっていつやつですよ。タヌキの姿にはなったのは、タヌキに化かされたつて言つ言葉が、この国にありますから、それを参考に見てみたんですよ」

「貴様、正々堂々戦え！」

「失礼。昔に一体一の勝負のはずが、不利になつた途端に全員で襲つてきた正義の魔法使いがいたんでね。ここの皆さんはそう言つた奴らとは違つようですね。今度は、私の本体つて言つのは少々語弊がありますが、私、ミモザ・フルールが相手しますよ」

ミモザ・フルールが広場に降りる。

「さっきの偽物とは全然違いますよ。武器は銃だけではないですしね」

ミモザの手には一振りの刀が握られている。

が、次の瞬間には無手になっている。

「さて、誰が戦います？ 別に私は一対多数でも平気ですよ。たとえば、全員で向かつてきてもね」

「なめるな！」

ガンドルフィーニがナイフを回収したのか、再び、手には銃とナイ

フがある。

「わかりました。では、あなたともう一度戦いましょうか」

再び、向かい合い、対峙する。

今度のミモザは無手である。

「では、はじめ」

学園長が合図を出す。

「貴様、舐めているのか!?!」

「いえいえ。誤解ですよ。ほら」

ミモザが右手を左から右に振る。

・カラン

金属がぶつかる乾いた音になる。

「な!?!」

ガンドルフィーニの持つ銃の銃身が切り落とされていた。

「私は素手ではありませんよ。その銃が証明ですかね? 魔法も使

「ってはいませんよ」

・ひうんひうんひうん

と、何かが空気を切り裂く音が聞こえる。

「正解は糸ですよ。糸の切れ味は石柱を簡単に輪切りにするほど鋭くて、さらに鋼線が細いので認識も困難ですよ。指先の微妙な動きで切れ味の調節が可能で、巻きつけて救助ロープや拘束ロープとして使うことも可能な一品なんですよ。見ての通り、金属の切断も可能ですよ。当然、人間の身体程度なら、簡単に切断できますよ。まあ、実際には使いませんが」

ミモザは「倉庫」に糸を回収する。

「さて、飛び道具は無くなりましたね。あとは、接近戦ですね」

「くそ！」

ナイフで切りかかるが、

「虚刀流 董！」

ナイフを躲し、相手の足に自分の足を絡ませ、そのまま相手の体を手で押して倒す。

「がはっ！？」

「鷹爪襲撃！」

倒れたところを、ジャンプし、急所を外すように、踏みつけるように蹴りを繰り返す。

「がっ!!??」

そのまま、意識を失う。

「おや、これで、お終いですか。どうします？ 次、やります？」

side 祐依

ガンドルフィーニを倒し、学園長を見る。

「ふむ、タカミチ君。行ってくれるか？」

「わかりました」

「あいつか……」

「おや？ どうかしたかい？」

「いや、何も。？リンク・蓬莱山輝夜・ロード？」

後半は誰にも聞かれないような小さな声でつぶやく。

タカミチ
T3がポケットに手を入れる。

「おや、これから、戦闘だと言うのに、余裕ですか？」

「どつだろつ、ね！」

タカミチ
T3が居合拳を放つが、

「な！？ いない！？」

すでにそこにはいない。

・ガチャ

「どこを見ているんです？」

私は既にT3タカミチの背後に須臾の間に移動し、misfortuneを突き付けている。

「動くな」

一言で、抵抗を止めさせる。

「さ、どうやら、あなたは魔法は使えない。先程の攻撃は、あの構えからしかできないと思います。どうします？」

「降参するよ」

タカミチ
T3からmisfortuneを離し、

「自分が強いと思っ込んで、手加減などしているから、一瞬で敗けるんですよ。本当の殺し合いなら死んでますよ。まあ、あなた程度なら何の障害にもならないですけど。さて、まだ、いますか？」

辺りを見回すが、誰も反応しない。

「いないみたいですね？」

「さっきのは一体どうやったんだい？」

T3が声をかけるが、

「では、そろそろ失礼します」

無視して、岐路に着こうとする。

「ああ、忘れていましたが、私はちょっとかいをかけてこなければ、何もしませんよ」

そう告げ、広場を後にする。

途中で転移を繰り返す、その中でスキマも利用し、追跡を完全に撒く。

「ふう。警告はしたから、次はない」

そう呟く。

別荘にスキマで移動し、別荘経由で自室に戻る。

自室に戻ると、千雨とさよが遊びに来ていた。

「で、どうだった？」

「戦闘は期待外れ。実験は成功。タカミチ T3程度なら、千雨ならデバイスのロジックでオートでも十分攻撃は防げるし、アルス・マケナ 黄金錬成で文字通り瞬殺だつて可能よ。さよなら、弾幕を張れば、それが攻防一体になるし、まあ、直撃をくらったら、まずいだろうけど、周りの幽霊たちが知らせてくれるだろうし、助けてくれるだろうから大丈夫じゃないかな？」

「ところで、実験てのは？」

「身代わり人形とでも言っておこうかしら。本人とほぼ同じ体術が出来る。けど、魔法とか使えないんだけどね。それで、致命傷を受けると、タヌキの遺体になるのよ」

「何でタヌキなんだ？」

「ん？ タヌキに化かされたつて、言わしたいから。かな。こつちの新製品（非売品）の試しが出来なかったのは残念かな」

「新製品つて、何なんですか？」

「一つ目。リバーズドール 攻撃の一発目を代わりに受けてくれる。小さなかすり傷から致命傷まで、一発目は完全に防いでくれる。」

二つ目。リバースドール貳型 攻撃を受けると、代わりに受けてくれないけど、攻撃してきた相手のトラウマを軽く刺激する。

三つ目。リバースドール参式 貳型よりも悪質にトラウマを抉る。数日間にわたって、夢に継続ける。

四つ目。リバースドール破 精神破壊まで追い込む」

「三つ目から悪質だな。それで、何で、数字に関連性がないんだ？」

「数字はふざけて。ちなみに貳型以降は対主人公・英雄を意識してみた」

「どういうことだ？」

「最近の主人公は過去にトラウマを持っている奴らばかりだから。

例えば、家族を殺されたとか、本当は人間じゃなかったとか、助けられなかったとか、悲劇性の過去を持つてる奴ばかりだからね。そこを刺激するようにしてみたのよ」

「そっぴゃ、確かに、アニメとかでそう言った過去を持つてる奴は多いな。……なおの事悪質だな」

「ところで、どういう風に精神破壊まで行くんですか？」

「ん？ 例えば、自身の家族を殺されたトラウマを持っている人なら、数日は何か嫌な夢を見たな。ぐらいいけど、そのうち、そのトラウマをぼんやりと夢で見るようになる。そっからまたちょっと経つと、現実のようなリアルな夢になる。それがしばらく続く。その次から自分が襲つ側の視点になり、殺す直前までを見る。それが数日続く。その次に、殺す場面を見る。その次に殺す感触を擬似的に感じるようになって、そっからは、実際の記憶と夢の区別がつかない」

「くなくなっていった、自我が壊れていく」

「なんちゅうもん作ってるんだ!？」

「だから、対主人公用に。よくあるじゃない。トラウマを乗り越え
たって謳う生意気な奴が。そういった奴を潰すために。これが効か
ないのは既に壊れている人ぐらいかな? 私みたいに……」

48話（後書き）

祐依は麻帆良の自称正義の魔法使いよりも、高畑・T・タカミチの方が嫌いです。

お便り待っています。

49話

side 祐依

エヴァの罰ゲーム、体術オンリーの模擬戦（私の新技の試し）をやるために別荘に来ている。

「あれで終わったんじゃないのか!？」

「何言ってるのよ。許したなんて、一言も言っていないわよ」

五メートルほど距離をとって、向かい合う。

「行くわよ! 球突!」

エヴァの右肩の関節を狙う。
手形は人差し指と中指を突き出している形だ。

・ガコ

突きは命中し、エヴァの肩の関節が外される。

「なっ!？」

「臼突!」

股関節を狙い、両手で突きを放つ。

りわけ戦場組手と呼ばれるものが主流だったのよ。敵の懐に入り、刀の間合いをつぶし、鎧でも防ぎようのない関節を決め、投げ、絞める‘柔術’。それとは異なり、一人で大勢の敵を倒すための関節破壊を追及した流派：‘破傀拳’。まるで、操り人形の吊り糸を断ち切るように、殺陣を交わすことに相手の身体が動きを失っていく様からそう名付けられた」

「今の武道とは全く異なりますね」

茶々丸がエヴァの関節をはめ直しながらそう言う。

「その通りね。日本の武術の殆どが西洋文化の影響を受け、スポーツ化する中、全く逆の進化をたどり、‘禁じ手’のみを極め続けた古流武術なのよ」

「か、関節破壊の古流武術…？」

「ええ。関節は動きを妨げぬためにも人体の中で最も筋肉が薄くできているからね」

「よく動く相手にそんなこと出来るな…」

千雨が呆れるように言う。

「超人的な動体視力と超人的な運動能力があればね。程度によっては、周りがマジで引くぐらいの結果になるけどね」

「どうなるんだ？」

「相手の全身の関節を外した拳句、血で周りを染め上げるからね」

「そんな物騒なもん、何で知ってたんだ？」

「ん？ 創作物から真似たのよ。説明も真似だけどね」

「さて、これから、どうしようっか？ マリカー大会でもする？」

「今日こそ、貴様を倒してやる！」

エヴァが復活し、宣戦布告してきた。

…不老不死でも外れた関節は自然には治らないようだ。

「ここで、赤コウラだと！？ な！？ そこにスターで体当たりつて、イジメか！？」

「エヴァが先に挑んてきたんだから、ちゃんと返さなきゃと思って」

「くらえ。追撃のサンダー！」

「貴様ら鬼か！」

「鬼はエヴァでしょ？ ね、吸血鬼」

「確かにそうですね。エヴァさんって、吸血鬼でしたね」

「何！？ まさかのさよまでー！？」

今日も今日とて、エヴァのハウエー。
600年生きた最強の真祖の吸血鬼と言う割には、カリスマ皆無
笑)

そんなある日、

「エヴァ。エヴァの家の回りにはどうして、しょっちゅう半妖がウロチョロしてるの？ 退治しないでいいの？」

「何を言っている。それは同じクラスの桜咲だぞ」

「もちろん知ってるわよ。それぐらい。だから、出来損ないを退治しないでいいの？ あ、ちなみに半妖だから出来損ないって言うてるんじゃないわよ。あれそのうち堕ちるんじゃない？」

「どういうことだ？」

「半妖はただでさえ、安定しにくいのに、あんなに身体と精神のバランスが狂つてると堕ちるわよ。それに、近衛木乃香を何時もストーキングしてるし、…もう手遅れか」

「いや、ジジイ曰くあいつは近衛木乃香の護衛らしいぞ」

「護衛なら尚更ダメじゃない。ったく、最近のやつはわかってないわね」

「祐依。発言が年よりくさいぞ」

「まあ、年齢の話は置いて、桜咲はどうせ私を警戒でもしてるんでしょね。自称正義の魔法使いとの対話の時にいなかったみたいだし」

「で、どうするんだ？」

「そんなの決まってるじゃない。通報よ」

そう言つて、携帯電話でとある三桁の数字を押して、

「すみません。高木さんはいますか？ あ、そうでしたか。はい、相沢祐依です。実は、最近ストーカーの被害に遭ってしまって、はい、あ、今は友人の家にいるんですけど、その家の周りをウロウロしているんです。はい、場所は……です。はい。わかりました」

「本当にしやがった……」

千雨の呟きに対し、

「千雨。彼女はもうただのクラスメイトではないのよ。既に線をチヨロつと踏み越えてしまってるんだから。それに、うっとうしいじゃん」

「お前、最後のが本音だろう？」

「何の事かしら？」

以前のよう、スマイルを浮かべ、とぼける。

・ファンファンファン

「あ、来たみたいね。さすが、常識に囚われない麻帆良。中学生だろうと、連れて行くとは…。」

途中で何やら口論が聞こえたが、任意同行として、連れて行った。

…ザマア！

数日後、NEUEに向かう途中で桜咲に絡まれた。

「貴様、何が目的だ！」

「ん？ 売上のアップかな？」

「嘘をつくな！ 狙いはお嬢様だろう！」

「え？ 何、桜咲さんは、人身売買してるの？」

「は？」

「まさか、喫茶店の売り上げを上げようと頑張っているのに、クラスメイトから、人身売買を勧められるとは…。」

「何を言っている」

「ん？ 何って、売上の足しにするために人身売買をしるってこと

じゃ？」

「どうして、そうなった!？」

「私はNEUEの売り上げのアップが目的と話した。そしたら、桜咲さんは、突然人の話をした。繋がりを考えると、その人を浚って、売ってその売上金を足しにしろって事じゃ？」

とつぐにこいつの目的を知っているので、時間稼ぎに入る。

その後、数分にわたって、舌戦（一方的）に入る。

「ふざけ」

「ちょっといいかね？ 桜咲君」

「あ、こんにちは。新田学年主任」

「ああ。こんにちは。それで、桜咲くんは数日前に注意されたばかりだと言つのに、懲りないのかい？」

ルインに新田学年主任に連絡をとるように指示を出しておいての到着までの時間稼ぎであった。

「新田学年主任。あの、そろそろ、NEUEに行かないとまずいんで、行ってもよろしいでしょうか？」

「ああ。祐依君はいいだろう。マスターにまた今週末にでも家族で食事に行く伝えておいてもらえるかい？」

「はい。わかりました。では、失礼します」

「な!?!? ちょー」

「さて、桜咲君は指導室まで来てもらおうか」

連れて行かれる桜咲を後目に、NEUEに向かう。

てか、数日前に日本で唯一、拳銃の所持を法的に認められた公務員の方に注意を受けたんだから、学園長や学年主任、担任に連絡が行くのは当たり前でしょう。

それなのに、すぐにストーキングを再開した拳銃、絡んで来るなんて（笑）

49話（後書き）

桜咲が祐依に絡んだのは勘違いからです。

エヴァとよく一緒にいる祐依をミモザ・フルールと思っています。

まあ、正解なんですけど…

破傀拳というのは、週刊少年ジャンプで 2002年45号から2003年29号に連載されたUltra Redと言う作品に登場した武術です。

お便り待ってます。

50話

side 刹那

「くそ！」

何故だ！ 私はお嬢様を守るために動いているだけなのに、一般人が邪魔をしてくるなんて！

裏の人間ならば力でねじ伏せればいいのだが、一般人には手が不用意に出せない。

公務員相手なら、なおの事である。

「新田先生にまで指導をうけるとは…」

反省文の提出までさせられるとは…

「相手は、勉強もできる。周りからの評判もいい。空を飛部で色々なスポーツや格闘技だけでなく、文科系の才能もある。…あれ？ あの人に弱点なんてあるのか？」

いや、それでもお嬢様を守るためには、あいつを倒さねば。

「どうする？ 正面から行くと、また、新田先生か、公務員が出てくる。奇襲か闇討ちしかないか？」

「おい、何物騒なことを口に出しているんだい？」

「あ、真名ですか。口に出していましたか？」

「ああ。はつきりとね。奇襲や闇討ちなんて口にすべきじゃないよ。端から見ると、十分不審者だよ。それで、どうしたんだい？」

「ああ。相沢のことです」

「相沢？ え…と、何人がいるが」

「すみません、エヴァンジェリンとよく一緒にいる相沢祐依のことです」

「ああ、祐依さんか。彼女を襲うのかい？」

「な!？」

「おや？ 違うのかい？ さっきまでの言動からして、てつきりそうなんだかと思っただが。そうだ、これはルームメイトのよしみの忠告だ。相沢たちには手を出さない方が身のためだよ。彼女の家はあの白き月を経営しているんだよ。下手に手を出せば、消されかねないよ。それに彼女たちには身を守るための魔法具を持っているみたいだからね。前に学園長が頭の中を覗こうとして、魔法を跳ね返された拳句、自身のトラウマを抉られたみたいだからね」

「だが、お嬢様を狙う輩なら!」

「彼女たちは、直接的には裏には関わっていないよ。魔法具を持たされているのは、裏の身分故だろう」

「どういふことなんです?」

「さっき言っただろう。彼女の家は白き月の重役だと。それ故に彼

女たちを狙う輩は多いのさ。だから、身を守るために魔法具を持たされているのだろっ」

「そうか…」

「まあ、これらは、数少ない情報から考えたことなだけどね」

そう言っと、真名は去っていった。

「どうする？ 手を出せば… だが、出さなければ、お嬢様にもしものことがあるかもしれぬ…」

side 祐依

「と言う訳だから、桜咲には気を付けてね」

通報や指導のほかに、龍宮との会話をスキマを通して、見た後、皆に注意する。

「あいつって、そんなに危なかったのか。確かに、何時も近衛の後をつけていたが…」

「祐依さん。刹那さんは幻想郷に連れて行かないんですか？ 半妖なら、大丈夫な気がするんですが？」

「ん？ あれはダメよ。関西呪術協会で、関東魔法教会にも現在所属している。そんな奴は正直どうでもいいのよ。それに、自称正義の魔法使いに近いからね。そんな奴を連れて行っても、幻想郷に害

しかないだろうしね」

「そんなこと言うのか？ 救いの【使者】は」

「エヴァ。しつこいと、今度は体中の関節を外した後、口に無理やりんにくのチューブを押し込んで、中身を全部、流し込むよ」

「わっ、悪かった！ 冗談だ！」

‘倉庫’からんにくのチューブを取り出し、指を鳴らしながら、近づこうとしたら、エヴァが土下座しながら謝罪してきたので、今回は見逃すことに。

どうせ、茶々丸が撮影しているし。

エヴァのカリスマは一体どこにいったのだろうか？

桜咲の監視が結局は緩くなったが、空を飛部で剣道部に行くと、必ず試合を申し込まれるようになったが、私の剣の本質は人殺しの剣術なので、ある程度弱くなるが、大学生の練習にも付き合うぐらいわけのない私の敵ではない。

他にも麻帆良武道四天王と言われるクラスメイトとも戦うことが多くなってきたが、空を飛部で訪れた時だけ手合せをしている。

光の月のプロテクトに最近、侵入しようとしている輩がいたが、全

て撃退した拳句、ウイルスをプレゼントしてあげた。

特別製で、一週間程度で自動消滅するが、その間はコンピュータは一切正常な動作が出来ない。

麻帆良の大学のコンピュータが被害にあったそうさ。

50話(後書き)

そろそろ、原作に入りたいと思う今日この頃です。

お便り待っています。

51話

side 祐依

月日が流れた。

白き月や光の月の情報によると、あのハイブリッドボーイことスプリングフィールド夫妻の息子、ネギ少年がメルディアナ魔法学校を卒業したらしい。

間者の情報によると、才能はあるらしい。だが、魔法の制御が未熟どころの話ではないらしい。

「そんな訳で、二十年前に魔法世界で起こった戦争の英雄の息子であり、エヴァの片思いの相手の子供が麻帆良に教師として来るみたい」

「なあ、そいつは一体何歳なんだ？ 二十年前の戦争をやったやつらの子供何だろ？ ぜってえ大学も出てねえよな？」

「お、流石、千雨。正解よ。ナギ・スプリングフィールドは数えで十歳よ。魔法使いの懸命な偽証の結果、大学卒業そして、教員免許を持つてることになってるわ」

「そんな奴が、教師なんかできるのか？」

「無理よ」

千雨の質問に即答且つ断言してやる。

「薬味ネキは常識が欠如している魔法使いだけでなく、さらに悪いことに、薬味は英雄の息子だからと叱られたことがないみたいなのよ。閲覧禁止の図書がある立入禁止の書庫に入り込んでも、周りの大人は黙認する。そんな奴が、善悪の判断が出来ると思う？ そんな奴が、教師を出来ると思う？」

「じゃあ、何でその子は学校の先生をやるんですか？」

「これは推測だけど、従者を作る為だと思うのよ」

「どづいうことだ？」

「エヴァ。2年A組の面子を考えればわかるんじゃない？」

「……英雄の息子のための生贄か」

「はあ！？ どづいうことだ！」

エヴァの発言に千雨が反応する。

「千雨、落ち着いて。2・Aのメンバーはおかしいと思わない？」

「……！ 確かに、全員が全員なにかあるな。筆頭はお前だけだ」

「正解。最後のは余計だけど。おそらく魔法使い側は、薬味が従者を作る為にその候補として、2・Aに素質がある人を集めているのよ。その2・Aに薬味を担任として送りつける。さて、未熟にも劣る薬味と過ごしていけばどうなる？」

「魔法がバレるだろうな。おそらくそのまま、巻き込まれていくだろう。裏の世界にな」

「てことは、私たちもその候補に入っているんですか？」

「そうよ。まあ、千雨とさよは私が関わらなかつたら、なし崩しに巻き込まれてたかもしれないけどね。千雨の認識障害の魔法の効きにくい体質や幽霊だったさよ。当然2 - Aに入れられていただろうね。だけど、今は、裏を知っているし、対抗するための手段も持っている。何も心配する必要はないわよ。でも、魔法使い側についてもいいわよ。そこはあなた達個人の意思を尊重するから。その時は月のペンダントの加護も当然無くなるし、敵対するなら、私は一切の手加減はしないわよ。私は平等に対処するわよ」

「私は魔法使い側なんかにつかねーよ。お前が居なかつたら、今の私はいない。この異常を教えてくれ、それに対する手段も貰った。お前を裏切ることにはねえよ」

「私も千雨さんと一緒です。祐依さんには返しきれないほどの恩があるんです。祐依さんを裏切ることはありません」

「そう。まあ、薬味が来るのは明日らしいわよ。警戒まではしなくてもいいけど、注意はしておいてね」

そう言って、真面目な話は終える。

そっからは、個人の自由時間になる。

因みに、今はエヴァの家のほうである。(別荘ではない)

私は地下室に行き、お面の作成に入る。
今回は鬼のお面である。
イメージは鬼巫女霊夢が身に着けていた禍々しいやつである。

side 学園長

「ほう、ネギ君が卒業課題で日本で教師をやることとわの」

「学園長、相沢君たちを2 - Aに入れて本当に大丈夫でしょうか？」

「ふおっふおっふお。何、心配しらんよ。確かに彼女たちは警戒すべきじゃろうが、その中でも代表的存在の相沢祐依君は孤児院の娘となっておるからの。子供には優しいから、ネギ君を色々と手助けしてくれるじゃろう。上手くいけば、ネギ君のパートナーになってくれるかもしれんしの。そうなれば、あの白き月はこちらについてくれるじゃろう」

「そうでしょうか… 僕にはまだ、彼女たちには何かある気がするんですが」

「ふお？ それは何かの？」

「いえ、具体的にはわかりません。強いて言うなら勘でしょうか」

「なら、タカミチ君は気取られぬように注意しながら、出来る限り警戒するんじゃ。龍宮君にも言っておるから、大丈夫じゃと思うんじゃが…」

side 祐依

念のための監視から、ジジイとT3の会話を盗聴する。

「へえ〜。そんな事企んでるのか。まあ、そんなことはありえないけどね」

つい、力が入り過ぎ、作りかけのお面にひびが入る。

「お〜い、祐依〜って、何だ！？ この部屋の空気の重さは！？」

千雨が地下室に入るとほぼ同時にそう言った。

「ん？ ああ、ゴメン」

殺気モドキを抑える。

「で、どうしたの？」

「ああ、ちょっと、ロジックのメンテを手伝ってくれねえか？ 最近ちょっと、違和感があるんだけど」

「いいわよ。じゃあ、私の研究用の別荘に行きましょう」

51話(後書き)

お待ちしております。

52話

side 祐依

今日、薬味^{ネキ}がやって来る。

昨日の夜に携帯電話に連絡がありそうだったが、直前にデータのバックアップを取って、改造。
しかも、番号変更。

学園長室の監視の結果、呼び出しをしようとしていたので、事前に対策。

部屋の電話はコードを抜いて、鳴らないようにした。
学園側から連絡を取れないように対処。

「で、今日、出来損^{ネキ}ないが来るみたい。気を付けてね」

教室でいつものメンバーに注意をする。

そんな話をしていると、怒った様子の神楽坂と近衛が教室に入ってきた。

まあ、どうでもいいので、スルーで。

教室の前の扉にはトラップが仕掛けられている。

鳴滝姉妹が主導でやっていた。

一応、注意だけはしておく。

「だけど、遅いですね〜」

さよがそう呟く。

確かに、始業のチャイムはとっくの前になり終わっている。

「どうせ、魔法ふまげたの事を話してるんじゃないか？」

「千雨の意見は半分正解ね。ちょっとぼかしながらだけど、話してたわよ。今は、2・Aじゅうに向かって歩いてきてるわよ。ある意味期待以上よ」

「どつ言つことだ？」

「見てればわかるわよ」

(原作通りの内容なので、授業まで作者の都合で省略)

バカレンジャーのバカレッドこと神楽坂を指名したのはいいが、その後の発言が教師としては最低の言葉だった。

「おいおい、あれが、担任ってマジか!? あんなのが担任ってお先真っ暗ってレベルじゃねーぞ」

「千雨、あきらめなさい。希望するなら、違う学校を紹介するわよ。」

それにいざとなったら白き月しづきに来る？ 千雨たちなら、やっていけるわよ。と言うより、就職先を紹介できるわよ」

「そうだな… 候補として、考えておくわ」

「ええ。さて、新しい武器でも考えるか」

「おい、授業はいいのか？」

「な！？ エヴァに言われるなんて… 珍しく授業に出ているエヴァに…」

私だけでなく、エヴァ以外のみんな（いつものメンバー）が驚愕の表情を浮かべていた。

「おい！ どういう意味だ!?!」

「言葉通りよ。まあ、私にとって、中学生の問題なんて余裕よ。徹夜明けでだって満点とれるわよ」

「そう言えば、お前はそう言う奴だったな」

そんな話をしていると、授業が終わっていた。

だが、黒板に板書はなく、あのまま授業が進まなかったようだ。

「このままなら、今度のテストもブツチギリね。英語のおかげで」

「そうだな… おい、テスト前にまた教えてくれないか？」

と、千雨の提案。

確かに、
私とルイン 問題外。
さよ 何十年も麻帆良で幽霊だけど在籍。その間、授業は聞いていた。

エヴァ 元々外国生まれの外国育ち。その上、600年以上生きて
いる、さらに何年も中学生をやっていた。
茶々丸 ロボット。

真面目に受ければ余程のことが無い限り、大丈夫そうだ。
ただ、千雨は現代を生きる中学生。
勉強も出来るが、今の教師が最低のため、ちょっと心配。

「いいわよ。今回はどうする？ 平均点？ それとも満点？」

「とりあえず平均点で」

「OK」

放課後、

薬味の歓迎会があったが、その時に、バカがT3相手に読心術を使
っていた。

T3は笑っているし、魔法を使っているのを注意しようとは思わな
いのか？

やっぱり、英雄の息子だからか？

って、神楽坂が薬味ネギから耳打ちされた後、教室を出て行った。

…神楽坂にもうばれてんじゃないね？

「で、どう思うっ？」

「どう思うって言われても、その前に主語を入れてくれ。話の内容が全く分かんらん」

隣にいたエヴァに尋ねると、そう返された。
尤もなので、

「それは、（省略）ってことよ」

「案外既にはばれてるんじゃないか？ と言うか、黒板消しを止めた時点で関係者にはバレとる。不審に思っている奴はそこらじゅうにいるだろう」

「だろうね（笑）。そのまま、オコジヨとして送り返してくれないかな」

「いや、それは無理だろう」

「そうでしょう。むしろ、これが学園側の狙いでしょうから」

エヴァとの会話にルイン参戦。

「そうよね。てか、同室者からして、狙っているのが丸わかりよね。私たちの部屋も候補みだったけど、私たちはその話し合いの場

に一度も行かなかつたから。勝手にやるうとすれば、後のことが怖かつたんじゃない？ それで、今朝の時にもしかしたら、って考えたみたいだけど、連絡がつかない」

「お前はそれを狙ってやったんだろっ？」

「あ、千雨。That's right! その通りよ。既に部屋には侵入者対策はバツチリよ」

52話(後書き)

お待ちしております。

53話

side 祐依

やはりバカ・sの息子はバカであった。

クラスで、神楽坂が話しているのを聞く限り、薬味ネギは神楽坂のベッドに潜り込むようだ。

お風呂でも身体を十分に洗わないようだ。

ようだと言うのは、私たちは薬味ネギが来てから、一度も寮のお風呂は使っていないからだ。

孤児院に行ったり、別荘に行ったり、エヴァの家に行ったりと、遭わないようにしている。

その他に、ホレ薬を作ったこともあった。

みんな（いつものメンバー）は月のペンダントのおかげで効果は一切なかったが、酷いものだった。

「ホレ薬って、違法じゃなかったのか？」

「ん？ 何言ってるのよ。千雨。当然違法よ。故意に人の心を操るようなものは流石に違法にされているのよ。人格を壊してしまったりする可能性もあるし、対象の感情を否定してるんだし」

「ですが、魔法使いは平気で記憶の操作をしますがね」

「おい、それはいいのか!？」

千雨の疑問に対して私の回答にルインが補足?をする。

「本当はダメよ。魔法をばらそうとする人にもみ使用できる筈なんだけどね。それも、そこに至るまでに交渉はするんだけど、最近の魔法使いは一方的に問答無用でやるバカばかりだからだね」

「おいおい…そんなんで、いいのかよ…」

「だからダメって言うてるじゃない。まあ、千雨なら、月のペンダントもあるし、ロジックだってあるから、効かないけどね」

未だに魔法使いどもは、私に接触を図ろうとするが、一度も成功はしていない。

チャンスは作ってやる義理はないから、まあ、一部のやつは、勘違いからある意味真実にたどり着いているのが若干恐ろしいが…

桜咲は度々接触を図ろうとしているらしい。

これはエヴァ情報である。

そんなある日、

昼休みに大河内たちが、中庭でバレーボールをしていたら、ウルスラの生徒に絡まれて、雪広たちが参戦し、いざこざがあったらしい。その午後の授業で、屋上でバレーボールをするために上がったら、

「あら、また会ったわねあんだ達。偶然ね」

「な、何であんだ達がここにいるのよ!!」

何故か、ウルスラの生徒が待ち構えていた。

それに神楽坂が反応し、食って掛かっていた。

しかも、どうして薬味ネギは捕まってるの？

「私たち、自習だからレクリエーションでバレーやるのよ。あんだ達は？」

「わ、私たちもバレーよ！」

「どうやらダブルブッキングしちゃったようね」

おそらく、昼休みの続きだろう口論が始まった。

「で、どうしよっか。正論で封殺出来るけど…」

「しばらくほっとけばいいじゃねえか？ 授業はその分つぶれるし、他の先生に知られても、ガキを生贄にすれば、被害は最小限で済むし」

「でしょうね。Mr・スプリングフィールドの監督不行き届きですから」

「そ、それでいいんですか?!？」

さよだけは、慌てている。
エヴァは既に隅で寝ている。

「で、どうして、ドッジボールをすることになっているのよ」

「それは、正々堂々スポーツで勝負した方が、納得できるからよ！」

クラスメイトからの返答。

で、私は改めて、相手を見る。

「……はあ」

ため息をつく。

「どうしたんですか？」

「ん？ さよ。相手はドッジボール部よ。何人かが空を飛部の関係で知ってるけど、確か関東大会で優勝しているはずよ」

「高校生にもなって、ドッジボールやってんのか……」

「おまけにハンデもあげるわ。こっちは11人だけど、そっちは倍の22人。どう？」

そうウルスラの生徒が言うと、

「受けま……」

「せんよ!」

雪広が受諾しようとしたのを止める。

「何です!? 相沢さん」

「フィールドという行動範囲の制限の都合上、そんなに増やしたら、動きづらくなって、ただ的になるわよ。それじゃあ、ハンデどころか、こちらの首を絞めることになるわよ」

「何よ! そんなの、あんたたちに有利なだけじゃない!」

私の言葉に神楽坂がノツて、追求に入る。

そのまま、数分の問答の末に、

十対十三になった。

「それにしても相沢さん。よく気付きましたわね」

「いや、普通は気づくでしょ… それに、私は空を飛部で、色々な部活やサークル、同好会に顔を出しているからね。その中に、ドッジボール部に顔を出したこともあるのよ。ただ、あそこにいるメンバーのうち何人がいなかったけどね」

「そうでしたわね。相沢さんは、空を飛部の部長でしたわね… 相沢さん!」

「ん?」

「私たちが勝つために指揮を執って下さい！」

「まあ、いいけど… それでみんなはいいの？」

一応、クラスメイトに是非を問う。

返事は人それぞれだが、OKがでた。

「じゃあ、まずメンバーを選抜するわよ。我こそはって言う人は前へ」

そう言つて、明石、朝倉、大河内、神楽坂、春日、古、佐々木、超、雪広、が前に出る。

「9人が、私とルインを入れて、11人ね。あと二人…長瀬さんと龍宮さん。出てくれますか？」

「にんにん。また、今度手合せをしてくれるのなら、いいじゃないよ」

「そうだね… 祐依さんの手製餡密で手をうつとう」

「わかったわ。これで、13人ね。さ、勝ちに行くわよ！」

『おー！…！』

「ちよ、ま、まずいですよ！ あっちに空を飛部の部長と副部長がいますよ…！」

「何を言ってるの！ たかが中学生なんて、恐れる必要はないですわよ！」

私と面識のある高校生が慌てているが、代表格の高校生は忠告に耳を貸さない。

結果。

一人のアウトを出すこともなく、完勝した。

むしろ、一方的過ぎて、途中から見学者の声援が『頑張れ』コールになり、ウルスラの生徒に向けられていた。

正々堂々戦い、勝利をもぎ取った。

途中から、私とルインはサポートと補助に徹していたが、見ていてかわいそうだった。

試合後に、ウルスラの生徒の謝罪と、勧誘があった。

むしろ勧誘の方が、大変だった。

空を飛部の活動の中で、参加することで、落ち着かせられた。

…あれ？ 薬味ネギは？

（勝負を提案した後は、影が薄くなって、応援していました。）

53話(後書き)

お待ちしております。

54話

side 祐依

薬味^{ネキ}が麻帆良にやって来て、一か月ほどが過ぎた。

「えーと、皆さん聞いてください！今日のHRは大・勉強会にしたいと思います。次の期末テストはもうすぐそこに迫ってきています。あのっそのっ・・・実はうちのクラスが最下位脱出できないと（僕が）大変なことになるので。。。みなさん。頑張つて勉強してくださいましよ。。。！」

「主語が抜けてるじゃない…！」

私は額に手を当てながら呟く。

「何が抜けているんだ？」

「ん？ 2・Aの学年末テストの最下位脱出^{ネキ}が薬味の最終課題なのよ。それで、最下位を脱出できなかったら、教師になれないみたいなのよ」

「ってことは、最下位だったら、ガキは国に返せるのか？」

「残念ね。千雨の願いは叶うことはないわ。学園側がなんとかしても、成功させようとするわよ。それに出来なくても、教育実習生を引き続き、続けさせるとか、何らかの対策を採ろうとするだろうか
らね」

「それって、もはや、課題じゃねーだろ。そんなに、あれが大切なのか？」

「その通りよ。連合は広告塔が欲しいのよ。自分たちに従順なね。戦争は終わったのに、英雄なんていらぬのにね」

「…どうすつかな。テストの成績が良くても大して意味が無さそーだしな」

「とりあえず、赤点があつたら、特訓のメニュー変更ね」

「わかった。勉強を教えてください」

教室内では、英単語野球拳なるものが開催され、バカレンジャーが剥かれ始めていた。

私、ルイン、千雨、さよ、エヴァ、茶々丸は教室の隅で勉強を始めた。

途中で、新田学年主任が怒鳴りこんで、薬味^{ネギ}をはじめとする、参加者に説教と特別課題を出した。

「そういえば、どうして祐依は課題の事を知ってるんだ？」

「監視」

エヴァの疑問を一言でバツサリきる。

因みに、私たちは真面目に勉強していたし、日ごろの行いから、軽めの注意で済んだ。

夜に自室でルインと千雨に教えるためのプリントを作っていると、

・コンコン

「祐依さん。いますか？」

ノックの音とさよの声が届いた。

「何かしら？」

さよを部屋に招き入れ、話を聞く。

「あの、さつき久しぶりに千雨さんと寮の大浴場に行っていたんですけど、あがるうとしたらですね、木乃香さんたちが入ってきて、次の期末で最下位を取ったクラスは解散で、その上、特に悪かった人は留年！ どころか小学生からやり直して騒いでいたんですけど……」

「……っえ？」

私はさよの持ち込んだ情報で一瞬、思考が止まった。

「……さよ。もしかして、その話を信じたやつ^{バカ}って、当然いらいわよね？」

「いえ、あの……皆さん信じていらっしやいました。ネギ先生がHRの時に大変なことになるって、言っていたので、それがそうなので

はないのかと、一層騒いでいたので…」

私はさよの証言に啞然とする。

「あの、それで、まだ続きがあるんですけど…」

「まだ何かあるの?」

「はい。綾瀬さんが図書館島の深部に読むだけで頭が良くなるという“魔法の本”があるらしいって、それを聞いた一部の生徒の皆さんが」

さよが話していると私の携帯が着信を告げる。

「っと、ごめんね。この着信は…千雨ね。もしもし?」

『あ、祐依。助けてくれ。バカレンジャーたちに誘拐された』

『な、何言ってるのよ!』

通話口の向こうで神楽坂の声がする。

「もしかして、今いるのって、図書館島って言わないわよね?」

外れて欲しいなーと思いながら、千雨に尋ねる。

『悪い。祐依の想像通りだ。ってか、どうしてわかったんだ?』

「今、さよから寮の大浴場での話を聞いてた。それで、予想した。私と千雨とエヴァは図書館島の最深レコードを数年前だけど残しているからね。エヴァは寮にはいない。私のところには来ていない。と言うことは、千雨のここに行っている可能性が高いと思ったからね。あと、一緒にいたさよがここにいるのに千雨がいないってことが、拍車をかけたわね」

『祐依ちゃん！　そこまでわかっていているなら、手伝ってよ！』

電話の相手が千雨から神楽坂に変わった。

いや？　携帯をとられたのか？

「千雨の言うとおりにかしら？　千雨は人質なの？」

電話をしながら、もしもの為に準備をする。

『どっついうことよー！』

「さつき、千雨がバカレンジャーたちに誘拐されたって言ったわ。ってことは、千雨の同意を得ていない。で、千雨の携帯を奪って通話している。そこまでしてしらばっくれる？」

私は部屋を出ながら通話を続ける。

「千雨に代わってくれる？　神楽坂明日菜さん」

『っと、代わったぞ』

「千雨。今から図書館島に向かうわ。時間を稼いで」

一方的に伝えると携帯を切る。

side 綾瀬

お風呂で木乃香さんから噂を聞いて、図書館島に眠ると言われる、魔法の本を探すためには、体力のある皆さんと、最深レコードの記録を持つ祐依さんが長谷川さんがマクダウエルさんの協力が必要です。

まず、一番楽そうな、長谷川さんを長瀬さんに連れて来てもらいましたが、長谷川さんが祐依さんに連絡を取ると言うので、とってもらいました。

祐依さんの協力を得られれば百人力です！

空を飛部に要請しても、一般開放されている所の蔵書が掲載された地図しか作ってくれませんが、レコードを持っているし、体力もすごいですし、武術もできる。

そんな人が来てくれれば、絶対にたどり着けます。

祐依さんには夜には殆ど携帯には通じませんし、仲の良い長谷川さんなら通じると思いましたが…

side 祐依

図書館島前に着くと、千雨が言うとおりに足止めしていた。

「やっと来たわね！」

神楽坂が待ちわびたかのように声をかけてきた。

「あら？ Mr・スプリングフィールドもいらっしやるみたいですね。それで、皆さんは今から何をしようとしているのですか？」

「今から、図書館島にあると言う魔法の本を探しにいくんです」

「…Mr・スプリングフィールド。噂の通りなら魔法の本とやらは図書館島の奥深くにあるそうですね。図書館島は立ち入り禁止の場所が多々あります。そして、図書館島は現時刻ではしまっています。どうするんですか？」

私はぼかしながら、意味を含め尋ねる。

「えと…」

「鍵なら大丈夫です」

綾瀬夕映が見せながら言う。

「私たちは図書館島探検部です。鍵の隠し場所は知っています」

「…わかりました」

こいつらの話を聞いて、現状把握。

「そう、ならさっさと行くわよ!」

神楽坂明日菜が意気揚々と進もうとしているが、

「千雨。帰りましょう」

千雨の手をとり、帰路に着こうとしたら、

「な!?! どうしてよ!」

「どうしてですか?」

相手の全員が驚きながら尋ねてくる。

「どうしてって、そんなこともわからないですか? 私は犯罪を起こそうとしている人たちに巻き込まれそうな幼馴染を助けようとしているのよ」

「どっぴいっことよ!」

「はあ」

神楽坂が一層絡んでくる。

「住居侵入未遂、窃盗未遂、が当てはまりますかね? 図書館島に不法に侵入をしようとしている。そして、本を手続きもなく持ち出そうとしている。もうすこしで、犯罪の構成要件に当てはまります

ね。そんな人たちと一緒にいる幼馴染を助けようとしているだけですよ。私は警告はしましたよ」

「私たちが小学生からやり直しになってもいいって言うの！」

「はあ… そこからか… もう説明もめんどうなので、義務教育とだけ。それに魔法の本なんて本気で信じているですか？ もう少し、地に足をつけて現実を見て生きていく方が賢明ですよ。もし、その本が実際にあつたとしても、そんな借り物の紛い物で試験を乗り切っても先はないですよ。そんなのカンニングと何か違うところがありませんか？」

説明もそこまでするのも面倒だから、ヒントを出す。

さらに、魔法を否定しつつ、精神的に攻める。

神楽坂は薬味ネギから魔法の存在を既に知っているのです、何かを言おうとしたのだが、

-

「っと、私の携帯ですね」

遮るように私の携帯が着信を告げる。

「はい、もしもし？ はい。あ、千雨ですか？ はい、隣にいます」

「誰からだ？」

千雨に携帯を渡す。

「出ればわかるわよ」

「もしもし… はい、はい、はい、え!?! 本当ですか?」

「誰からなのよ」

「うちの会社の人」

「わかりました」

千雨の話が終わったのか、私に携帯を返してくれる。

「はい、わかりました。 ええ。 はい、あ、来週からテストだから。 そう、わかったわ」

携帯を閉じて、千雨に向かって、

「千雨。 今からちよつと30分くらい大丈夫?」

「ああ!」

「と言う訳で、用事が出来たので、私たちは失礼します」

「何がと言う訳なのよ!」

「千雨がうちの会社のあるコンテンスとに応募したのが優秀賞とつたのよ。その連絡と、これから今後の相談よ。もしかしたら、千雨の進路が決まるかもしれないほどのものよ。さて、行きましようか」

「よし。」

千雨を連れて、その場を去る。

54話(後書き)

因みに、電話の相手はルインです。
連絡は嘘ではありませんが…

お便り待っています。

55話

side 祐依

バカレンジャー+ が進路を引き合いに出したので、千雨の進路の話を出して、その場から離脱できたが…

次の日。

「みんなー！大変だよー！！！」

「ネギ先生と、バカレンジャーと図書館島探検部のメンバーが行方不明に・・・！！」

朝倉発の情報で、教室中が騒いでいる。

「……………えっ!?!」

私はその話を聞いて固まる。

「結局行ったのか… あのバカ・sは… さて、どうなるかな?」

あそこまで注意したのに、そのまま行くなんて、さすが麻帆良。私の想像を簡単に超えてくるわね…
ここまで常識に囚われないなんて…

いや、犯罪と指摘したのに行くのは予想外過ぎるんだけど…

「はあ… 昨日はありがとな。おかげで助かった」

「どういたしまして。はい、これ、昨日作ったプリントね。とりあえず、担任が失踪したから、今後の授業の先行きがわからないから、新しいプリント英語のプリントは出来ないから、二日ぐらい待ってね」

「ああ、頼んでんのは私だからな。それくらい待つよ。てか、このままテストあるのか？」

「あるんじゃない？ まあ、いないのは自業自得だし、いなけりやその分平均点が下がるし、最下位が決定するんじゃないかな？」

「おいおい、そんなこと言っているのか？ 成績優秀者が」

「外すよ？ エヴァ」

最近、不老不死のエヴァ相手には関節を外したり、サブミッション関節技系の技で攻撃した方が、ダメージが響くので、そちらをメインにやっている。

「私が悪かった」

近づこうとしたら、エヴァは即行で頭を下げ、謝罪をする。

「しょうがないわね… よし、エヴァ。今度のテストで1教科も平均割れをしなかったら、許してあげよう。もし一つでも引っかけたら、罰ゲームね」

「わかった。茶々丸！」

エヴァが茶々丸にテストの予想をたてさせている。

担任が失踪したため、新田学年主任が代わりにHRをやった。

そのまま、英語の時間は、他の先生が代わりに授業を行い、少々であるが、テスト範囲の変更が行われた。

元々、薬味^{ネキ}の進み具合が悪かったのもあるが、今回の失踪のため、生徒からどこまでやったのかを尋ねたりしていたら、さらに進められなかったので、範囲が縮小された。

「あれはどれだけ周りに迷惑をかけてるのよ…」

正直な話、本当に教師を止めさせた方がいい気がする。

放課後、職員室に呼ばれ、薬味^{ネキ}やバカレンジャー、図書館島探検部のメンバーについて、新田学年主任に話を聞かれた。

新田学年主任は朝倉の情報から、私と千雨が最後の目撃者であると知ったようだ。

…ほんと、どうやって朝倉は情報を掴んでるの？

とりあえず、昨日、図書館島に行く前に準備しておいたICレコーダの実際の会話の音声を聞かせる。

「そうか… わざわざ呼んですまなかったな。大体わかった。とりあえず、学園長に連絡と警察に捜索願いだな…」

「新田学年主任。止められなくてすみません。まさか、あそこまで忠告…いえ、警告しておいたのに、行くとは思わず、確認を怠ってしまっ…」

「いや、祐依君たちにはそこまで気に病む必要はない。ただ、二人が最後の目撃者だから、色々と思うこともあると思うが、あとは大人に任せて、来週のテストに向けて頑張りなさい」

「はい。わかりました。では、失礼します」

とりあえず、バカ・Sにはやったことを自覚させるために、白き月経由で、各所に報告しておいた。

戻ってきたら、説教やら何やらが待っているだろう。とりあえず、各所に広めておいたので、学園長の根回し（徳敷）は意味を成さないだろう。

一番の責任者は教師の薬味（ネギ）だろう。

だが、学園長たちが、もみ消そうとするだろう。まあ、既に広まっているから、遅いだろう。

バカ・Sは結局テストの日に戻ってきた。しかも、遅刻と言うオマケつき。

無断欠席に職務放棄： 舐めてんのか（怒）！？

あんなこと（犯罪を含む）をしたくせに、ジジイはお咎めなしどころか、黙認しようとしていた。

だが、私が予め各所に通達をしていたので、各所からの抗議などが来て、大慌てだったらしい。

- ザマア！！

結果を言えば、2 - Aは1位だったが、そんな不正に近い行為をしていたので、パーティは開始時はいたが、いつもの面子でさっさと早退。

私たちは、スキマやゼロのサーチャーを使って、行方不明者の動向を探っていたので、何があったのか、何をしていたのかを知っている。私の別荘の方で、二次会として、リアルモンハンをやって憂さ晴らしをしていた。

食料・素材用の別荘で、ミラボレアスを探しだし、狩った時には爽快だった（笑）

バカレンジャー、図書館島探検部、薬味ネキにはそれぞれ罰が与えられた。

生徒には説教と反省文と特別課題、春休み中の部活に参加禁止。

薬味ネキには新田学年主任からの説教と、給料の30%カット。

本来は最終課題の結果はよかったが、過程は目も当てられないほど悪いものであったのに、関東魔法教会の最高責任者のジジイが強硬に意見を押し通し、合格。来年から正式採用に。

あと、図書館島探検部に対しては、活動には数人の教師の許可が必

要となった。

鍵の扱いも改善された。

不許可で侵入をした物には重罰が与えられるそうだ。

因みに、2 - A生徒数人と担任が授業を放棄し、特別な勉強をやっていたと周りに知らせていたので、順位予想の食券をかけた賭け事は不正の為、中止となり、無効となった。

∴ 担任が授業を放棄して、数人の生徒に特別授業を教えるなんて、鼻屑にも程があるだろう！

まあ、私には必要ないけど。

55話(後書き)

お待ちしております。

56話

side 祐依

春休みのある夜。

月がきれいだったので、月明かりの中で桜の花見を兼ねてエヴァの家から歩いて帰っていると、また、関西の呪術師だろう若い侵入者に襲われた。

相手は私の事を一般人だと思い込んで、手加減して、簡単に敗れた。

その現場に桜咲と龍宮が登場。

月夜と桜を見ていたのを邪魔され、ムシヤクシャして、いつも通りゼロを展開し、襲撃者の両足を *misfortune* で撃ち抜き、動けないようにしていたのが誤解を生んだのか、桜咲が私を襲撃者と勘違いし、襲いかかってきた。

「やはり、貴様は襲撃者か！」

襲われてもしようがないし、周りに被害を与えても後が面倒だから、八雲紫の境界を操る程度の能力で、周りの境界を弄り、被害が出ないようにしたら、龍宮の表情が変わった。

ああ、龍宮は半魔族で、魔眼持ちだから、気づいたのかな？

まあ、どうしようもないはずだし、いいか。

「何を言っているの？ 私は被害者よ。私はこいつに襲われ、捕まえただけよ」

「ふざけるな！！ 貴様を捕まえる！！」

あゝ、もうこいつヤダ。

人の話全然聞かねえ

そのまま、戦闘に。

とりあえず、殺すとこれ以上に面倒なので、無力化を目的に戦う。
なのだが、桜咲は明らかに殺りにきている。

牽制で当たらないように撃つが、刀で防がれる。

「神鳴流に飛び道具は効きません！」

まあ、普通の弾だし…

いや、中学生が銃弾を見切っているのがすごいのかな

とりあえず、飛び道具？で攻めてみよう。

まあ、方法はいくらかもあるな。

銃を、倉庫、にしまい、瓶を取り出し、投擲。

「こんな物！」

桜咲は瓶を切り捨てた。

が、中から液体が飛び散り、その液体に火種が飛び、発火。

「火炎瓶」

これは投擲武器になるのかな？

桜咲は転がって、その場から離れる。

幸い、火はつかなかったが、服とかが若干焦げていた。

「くそっ！」

「続きまして、火矢」

こんどは「倉庫」から、弓と矢を取り出し、火矢を放つ。

これは避けられる。

「お次は」

次の品を出そうとしたら、龍宮に銃を撃たれ、邪魔をされた。

反射と言うか、慣れ？ 経験？ で、龍宮の銃撃を避ける。

「そうやらせると思っかい？ まあ、周りに被害が出ないようになっているみたいけどね」

桜咲が剣士で前衛、龍宮がガンマン？で後衛。

バランスがとれたコンビだな。

熱くなり易い桜咲に冷静な龍宮。

龍宮は知らないけど、桜咲は百合っばいし。

あ、対象は近衛か…

さて、どうしよっかなー。

GNシリーズの武器を使えば、簡単に殺せるたおせるだろうけどなー。

悪魔も一発で消し飛ばせるから、防げないだらうし。

魔術でもやれるかな？

でも、殺すと自称正義の魔法使いが五月蠅いしなー。

逃げるか。

「ふ、やるな。これが私の最後の攻撃だ！」

二人に向かって、そう叫ぶ。

と、二人は警戒して、守りを固める。

‘倉庫’から、缶を取り出し、二人の足元に投擲。

「なっ！」

龍宮が正体に気づいたようだが、遅い。

-!!-

直後、眩い閃光と爆音が周囲を染め上げた。

今回、使用したのは、非殺傷用のスタングレネードだ。

もちろん、私特製で、魔術的要素も盛り込んでおり、一分ももたないが、魔力が殆どわからなくさせる一品である。

だが、これは、手練れなら魔法障壁で、何の意味もなさないのだが、

二人は手練れの魔法使いではない。
よって、効果は抜群だ。

視覚、聴覚、そして、魔力がわからなくなり、当然、私を見失う。

その隙に、弄った境界を戻して、スキマを開き逃げる。

弁明のために、ゼロが録画していた、私視点の襲撃者が私に襲いかかってくるシーンをコピーしたフロッピーディスクを襲撃者の上に置いておいた。

「はあ〜」

孤児院の方の私室に着くと、ため息を漏らす。

本気で桜咲を呪ったろかと思う。

準備をしようとしていたら、子供たちが遊びに来たので断念。

あまり遅くならないようにしながら、遊んであげた。

子供は嫌いじゃないから、ストレスの発散にはなった。

何も知らない無垢な子供のおかげで、桜咲は救われた（笑）

子供たちを寝かしつけた後、私の食料・素材用の別荘で、モンスタ

ーを狩って、素材の剥ぎ取り、売却目的の武器を作っていた。

白き月の特別会員以上である一部の人に販売している。数が少ないから、オークション形式で販売している。

値段が上がり過ぎないように、上限を設けたりなど色々と考慮しているが、数が少ないのはどうしようもない。

まあ、観賞用としての意味合いが大きいけど。

そんな春休みが終わりが近づいた頃。

「そう言えば、ジジイに坊やの試練の相手を頼まれていたな…」

エヴァの方の別荘で、何時ものメンバーで寛いでいると、エヴァがそう呟いた。

「で、試練って、何やるの?」

「さあな… 詳細は聞いていない。坊やでも魔法使いの端くれだ。魔法戦闘でもすればいいんじゃないのか?」

「エヴァ。もし、引き受けるなら、内容を聞いておいた方がいいよ。内容を聞いとけば、穴をつけるし、認識の違いがあったって、言っとけば、どうとでもなるし」

「そうだな… 暇つぶしに引き受けるか… 茶々丸。明日、ジジイのところに行くぞ」

「了解しました」

「内容がわかっただら、教えてね」

「今度は何を企んでいるんだ？」

千雨の問いに、

「さあ？ ジジイ次第ね」

そうはぐらかす。

まあ、もっとも、まだ何も考えていないんだけどね。
暇潰しにはいいかな？

56話（後書き）

今回から更新が遅くなります。

ストックが今話でなくなり、その上、現実が忙しくなってきたので、週一回、若しくは二回の更新を目指します。

お便り待ってます。

57話

side 祐依

エヴァの薬味ネギに対する試練の内容は新学期が始まったら、戦闘をして欲しいとのこと。

学園が指定する関係者を対象に吸血行為を行い、ネギ少年から戦うよう仕向けて欲しいそうだ。

残念なことに、その対象者は春日美空になってしまったらしい。

…今度、何か御馳走してあげよう。

「まあ、吸血行為は実際には一回しかやらん。初めは噂を流す程度だ。噂がある程度広まったら、坊やが目撃するように時間を合わせて、吸血しようとしているように見せればいいんだからな」

「……エヴァ。それは誰が考えたの？」

エヴァの計画にそう返す。

エヴァがこんなこと考える訳がない！

戦闘でも最近、基本ゴリ押しが多いエヴァが！

「ジジイとタカミチだな。多分。二人とも目の下に物凄い隈を作っていたからな。私が内容を聞きに行くと前日に伝えたからな。徹夜で考えたんだろう。下手に一般人に被害が及ぶようなら、貴様の、白き月の報復行為が怖かったのだろう」

私の失礼な考えに気づかれることもなく、エヴァが説明を続けた。

「そうね。一般人を巻き込んでいたら、何かしらの報復行為をするでしょうね。まあ、今回は事前に来る限りのことを考えてるみたいだけど… 問題があるとすれば、ネギ少年ね」

「どういうことだ？」

「どうしてって、エヴァ。あれの非常識すぎる行動を憶えてないの？ 魔法障壁の常時展開。神楽坂の記憶を消そうとしたり、服を吹き飛ばしたり、夜にはベッドに潜り込む。授業もテスト範囲まで終わらない。テスト前に失踪。あの様子だと、教師という仕事できてるのかしら？ 一般人？に魔法バレ。挙げたらキリがないわね」

「それで、何が言いたいんだ？」

「あの薬味ネギが計画通りに動くはずがない。一体何をしでかすのやら…」

「言われてみればそうだな… 予想外の行動を簡単に起こしそうだな… そのうち、世界中に魔法の存在をばらすんじゃないか？」

「近くの一般人を飛ばして、一気に世界か… エヴァの言うことが否定できないのが逆に怖いわね…」

「ジジイに言うておくか… 警戒しておけと」

「エヴァ。それは多分、意味がないわ。さっきと矛盾するけど、2
・ Aのメンバーはおそらく英雄の息子の従者候補。これ幸いと、巻き込むんじゃない？」

「それだと、意味がないな… 貴様はどうするんだ？」

「もし、一般人が魔法使い側に着いたら、一回だけ警告する。その後は知らないわ。今後敵対したら、たとえ、知り合いでも、容赦はしないわ」

エヴァに以前にも話した通りに私の意思を告げる。

その後、話が脱線していき、そのまま、別の話になっていた。

新学期が始まり、薬味が失言をしていた。

今すぐ服を脱げて、お前はどこのセクハラ教師なんだ？
PTAに訴えるぞ！

とまあ、やっても無駄な思考を止め、周りの様子を窺う。

近頃流行り出した『桜通りの吸血鬼』の噂。

月夜に桜通りに吸血鬼が出るらしい。

この噂は学園の魔法関係者が流していた。

私は多少脚色して、流していたが…

噂なんて、尾ひれが付くものだしね

「先生！ 春日さんがー！」

保健委員である和泉が騒ぎながら、走って来た。

と、思ったら、窓を開けて、廊下に出すクラスメイト達。

あんなら、今、下着姿でしょうが…

おしゃべりをしながらだったから、クラスの殆どの人はまだ、体操服に着替えが済んでいない。

私たちは更衣済みだったが…

羞恥心は無いのだろうか…？

女子校だからか？

いや、でも、男性教員がいるのに…

そんなことを考えていると、薬味率いる数人が保健室の方に向かって行ってしまった。

「…身体測定どうするのよ」

いや、クラスメイトを心配しているからこそその行動だから、人としてはいいのか？

「エヴァ。始まったのね」

「ああ。最初で最後の被害者（笑）だ。今夜八時ごろ、学園側が用意する被害者役の関係者を襲うつもりだ」

エヴァに尋ねると、エヴァが今後の段取りを教えてくれた。

「その関係者って、誰なんだ？」

「夏目 萌と言う麻帆良芸大附属中学校に在学する魔法生徒です。運悪くくじ引きで当たってしまったそうです」

千雨の質問に茶々丸が答える。

「って、くじ引き!？」

「はい。誰も、そんな役を引き受けたくないですから。反論はしたそうですが、未来の英雄の為と説得されたそうです」

「ああ。なるほどね。それで、これからどうしよっか？」

「どつって、何がですか？」

「この状況よ。身体測定の放棄。まあ、教師が率先として、行っちゃったから、担任を生贄にすればいいか。もうすぐ、さっきの騒ぎを聞いて、新田学年主任が他の女性の教師を連れてやってくるから」

「何でわかるんですか？ それと、女性の先生を連れてくるんですか？」

「万が一のためにじゃない？ 覗きにならないようにするためじゃないかな？」

そんな説明をしていたら、案の定、やって来た。なので、説明をしたら、教室待機を指示された。

57話(後書き)

お待ちしております。

58話

sideネギ

HRの時にエヴァンジェリンさんの視線が気になったけど、和泉さんによると春日さんが桜通りで、倒れていて、今は保健室で寝ているみたい。

保健室に着くと、ベッドで寝かされていた。

「あれ？」

春日さんから、魔力の残滓が…

(ネギは春日が魔法使いとは知りません。と、言うより、学園の魔法使いは学園長と高畑しか知りません)

保険医の先生曰く、貧血らしい。

…もしかしたら、桜通りの吸血鬼の噂は本当で、春日さんは吸血鬼に襲われたんじゃない？

噂があるんだから、何かきっかけがあった筈だし、え〜と、こういう時に日本語で何て言ったかな？

火の無いところには煙が無い…だっけ？

とにかく、調べてみなくちゃ！

「明日菜さん。今日、ちょっと遅くなりますから、先に夕食を食べ

「ていて下さい」

隣にいる明日菜さんに伝える。

side 祐依

クラスメイトが戻ってきて、身体測定は再開されたけど、当然の如く、予定時間を大幅に延長して、次の授業にも支障がきたされた。

結局、その時間は自習として、プリントで済まされた。

保健室に行かなかった私たちは他の人が測定をやっている間に終わらせてしまい、自習時間と言う名のおしゃべりタイムに。

「あいつはあれに気づいたか？」

「気づかなかつたら、お手上げね。あそこまで判りやすくしておいたのに、わからなかつたら、どうしようもないわね。気づかなかつたら、そこで、試練の終りね」

「それでいいんでしょうか？」

「どうしようもないじゃない。相手の力量不足は知ったこっちゃないわ」

その心配？は杞憂に終わって、夕刻過ぎからネギ少年は桜通りで調査を始めた。

そんな様子を少し離れた所から、犬走椋の千里先まで見通す程度の能力で、気づかれないうように監視をしている。

月が上って、きれいに輝いている。

舞台の用意の為に、ネギ少年を一旦その場から離れさせるためにチャゼロが見つからないようにしながら不審な音で誘導。

ネギ少年が離れた隙に舞台の用意。

と、言っても、人払いして、エヴァと被害者モドキが桜通りに移動するだけなのだが…

「きゃあああー！」

被害者の夏目さんが悲鳴を上げ、予定通り、ネギ少年が登場。

エヴァが吸血をしようとしている所を目撃。

いや、急いでいるからって、杖に乗って飛んでくるのってどうよ？
認識阻害も何にも使っていないのに…

魔法の秘匿は何処行った？

「ラス・キル、マ・スキル、マギステル 風の精霊11人、縛鎖となりて敵を捕まえる。『魔法の射手・戒めの風矢』！！」

「ちっ もう気づいたか… 『氷楯』」

ネギ少年の魔法の射手がエヴァを防ぐ。

エヴァは夏目さんを解放し、距離をとる。

あ、エヴァの帽子が魔法の余波で吹き飛んで、エヴァの顔が明らかに！

ネギ少年が驚いている隙にエヴァが氷結・武装解除で、ネギ少年の袖が凍って砕ける。

…何で、武装解除は服に効果があるんだろう？

…服は武装？

倒れている夏目さんは地味にレジストして、被害を避けている。

エヴァが決まっていたセリフをネギ少年に告げている。

ちなみに、このセリフも学園長が大まかな内容を考えたものである。

ん？ 足音？

人払いしたはず（学園側が）なのに、この足音は一般人？

つて、神楽坂と近衛！

なんであの二人が！？

…あの学園長タスケキの仕業か！

「何や今の音！？」

「……あつ、ネギ！？」

ネギ少年は夏目さんを起こそうとしていたので、今だけを見れば襲いかかるうとしてしているようにも、見えなくもない。

「ネギ君が今、噂の吸血鬼やったん？ 知らへんかったわ〜」

「ち、違います、誤解です〜！」

近衛の愉快的誤解（笑）

からかっているのかしら？ …… そうよね。もし、本当に吸血鬼相手なら、逃げるわよね…

…いや、近衛は魔法と言うか、関西だから陰陽術を知ったのかな？ 少年ぐらいなら対処できるのかな？

あれ？ でも確か、知られないようにするのが、詠春の方針って前に聞いたんだけどな〜。

独自に調べたのかな？

…悩んでいてもしょうがないか。

後で、調べさせよう。

漫才をしているその隙にエヴァは予定を切り上げて、逃走に入る。ネギ少年は二人に一言、二言話してエヴァを追いかけて行った。

…二人と夏目さんの監視をルインに任せて、私はエヴァを追う。

「ふ、流石は千の呪文サウザンドマスターの男の息子なだけはあるな…」

まあ、確かに、魔力任せな魔法だしね〜。

構成がボロボロじゃない。

あれなら、簡単に防げそうね。

現にエヴァも手加減してても、簡単に相殺してるし…

その後もチープな魔法戦闘モードキが行われ、エヴァのマントが風花・武装解除で吹き飛ばされた。

エヴァはビルの屋上に着地すると、少年も後を追って、着地する。

少年は勝利を確信しているようだが、そんな簡単に終わるわけないでしょ…

現に茶々丸が待機しているのに気づいてい無いようだ…

っと、考えてるうちに少年がエヴァに向かって魔法を放とうとしていた。

って、思ったら、茶々丸が妨害。

凸ピンや頬を引っ張ったり、軽いチョップをいれたり、集中できないようにすると魔法が使えない。

まあ、前衛がいない魔法使いなんてこんなものよね。

エヴァが少年にパートナーについて説明している。

…エヴァがあんなに親切なんて！

…何を貰ったあー！！

（今回の試練の依頼料は学園長秘蔵の日本酒とお茶です。 by 作者）

そんな半ばどうでもいいことを考えていたら、茶々丸が少年を抑えていた。

エヴァが吸血しようとしている。

…あれ？ 血吸うの？

「コラ ツ！！ この変質者ども つ！！」

「ん？」

何か走って来る。しかもかなり速い。

「子供相手に何してんのよ ツ！！」

「あ」

「はぶうつ！？」

突然現れた人物がエヴァに飛び蹴りを決め、エヴァが吹き飛ぶ。

エヴァ、小柄だから体重軽いしな

…ん？ ってあれ？ エヴァの魔法障壁をぶち抜いた？

って、あれは、神楽坂か…

魔法無効化能力があるからな。

「か、神楽坂明日菜！？」

「ん……？ あ、え、エヴァちゃん！？」

エヴァと神楽坂が互いに驚いている。

エヴァは神楽坂の体質を知らなかったのか…

その後、エヴァは悪役っぽい捨て台詞を残し、逃走した。

と言うより、自分の足で走って追いかけて来て、その上、ビルの上まで登ってきてそのまま、変質者エヴァに飛び蹴りをかますその体力と度胸はどうよ？

58話(後書き)

お待ちしております。

59話

side 祐依

数日後、登校すると、下駄箱でエヴァがネギ少年と神楽坂と少年の肩にいるオコジヨ妖精に向かって、話？をしていた。

…ん？ あのオコジヨって、確か、犯罪者？いや、犯罪妖精？ま

あ、そこらへんはどうでもいつか。

とりあえず、あれは犯罪を犯しているんだから。

そう言えば、昨日、大浴場で騒ぎがあったな。

もしかして、あれが絡んでる？

後で調べておこう。

あ、少年が走って何処かに行ってしまった。

授業はいいの？

いや、その前にHRは？

……まあ、いいや。

side ネギ

「はあ。どうしよう」

「兄貴。あいつらっスね！？あいつらがその問題児なんスね！？許せねえ！！兄貴をこんなに悩ませるなんて！！舎弟の俺っちがぶっちめてきてやんよおーっ！」

カモ君がそう言ってくれるけど、

「あのエヴァンジェリンさんは実は吸血鬼なんだ…しかも真祖…」

「く…故郷へ帰らせていただきます…」

「コラ！ 何言ってるのよ」

あ、明日菜さんが逃げようとしたカモ君のしっぽを掴んで、固定してくれた。

「それにしても、よく生き残れたなあ兄貴…吸血鬼の真祖って言やあ、最強クラスの化け物じゃないッスか。」

「そ、そんなにやばいの？」

あれ？明日菜さんに話してなかったっけ？

「しかし、今見た感じじゃあ何かの理由で魔力が弱まっちゃってるみてーじゃねーか。兄貴、安心しろよ。そーゆーことならいい手があるぜ。」

「えっ！？何かあの二人に勝つ方法があるの！？」

本当！？ あのエヴァンジェリンさんに！？

・キーンコーンカーンコーン

そんな中、チャイムがなる。

…あっ！？

「明日菜さん。カモ君。急いで教室に行きましょう！」

「え？ って、今の、本鈴！？ 遅刻じゃない！？」

不味い。また新田先生に怒られちゃう！

昨日、怒られたばかりなのに。

（この物語のネギは原作よりは教師としての仕事を多少意識しています。図書館島での騒ぎのおかげで、一般教員の新田先生に目をつけられています。悪い意味ではありませんけど。先輩であり学年主任として、指導をしている程度です。実際にはまだ殆ど効果を成していませんが。昨日の授業の内容などで、怒られたので、昨日の今日なので、憶えている程度です。教師としてはまだまだです。by 作者）

教室に急いでいくと、エヴァンジェリンさんはいたけど、HRが終わると直ぐに何処かへ行ってしまった。

…よかった。これで少しは安心できる。

その後、授業が始まって戻ってこなかった。

おかげで、朝よりは落ち着けた。

お昼に明日菜さんとカモ君と朝の続きの相談。

「それで、朝の話は何なのよ？」

「ネギの兄貴がと姐さんがサクッと仮契約を交わして・・・相手側の一人を二人がかりでボコっちまうんだよ！」

「そんな、一人相手に二人がかりで？」

「それぐらいしなきゃ、いけねえぐらいなんすよ。姐さん」

「ふ〜ん… ところでその仮契約って何なのよ？」

「それはですねい・・・(カモ説明中)・・・て言うやつなんです
ぜ」

「う〜ん…わかったわよ。一回だけよ」

「了解しやした」

「ところでカモ君。僕たちが仕掛けるのって絡繰茶々丸さんだよね
？」

「そうですね。兄貴。他にいますか？」

「ああ、従者かどうか知らないけど、エヴァちゃんって、茶々丸さんの他に祐依さんと千雨ちゃん、さよちゃん、それにルインさんとよく一緒にいるわよね」

「そいつらの事、何かわかりますかい？」

「え〜と、確か、タカミチがくれた名簿に何か書いてあった気がするけど…」

え〜と、あった。あった。

・相坂小夜 - 面倒見がいい。相沢祐依の孤児院に親の海外出張の時に一時期預けられる。(居候に近い)

・長谷川千雨 - パソコン関係に詳しい。あまり目立たないけど、現^{アリスト}実主義。

・ルイン・F・相沢 - 完璧超人？文武両方ともトップクラス。相沢祐依の親類で、親の都合で相沢祐依と同じ孤児院出身。(彼女も居候) 非公式同好会、空を飛部副部長。

・相沢祐依 - 完璧超人。非公式同好会、空を飛部部长。公私を混同しない。困ったら相談すると良い。実家が孤児院を経営している。

「何ですかい？ この二人が入ってる非公式同好会空を飛部って」

「え〜と、ゴメン。カモ君。僕もイマイチよくわからないや」

そう言えば、ドッジボールの時に高校生の人が言っていたような…

「ネギ、あんた知らないの？」

「姐さんは知ってるんですかい？」

「私も一応入っているわよ。麻帆良で、何かの部活や同好会やサークル、クラブに入っている人の殆どは入っているわよ。学園に正式

には認められていないから非公式同好会って名乗ってるけど、最大規模の集まりよ」

「一体何をやってるんですか？」

「うん…ちょっと説明しにくいけど、簡単に言えば、夢に向かって頑張っている。…のかな？」

「えと…」

「確か、新聞部が発行した新聞や情報誌の特集を木乃香が集めてたから、それを読めば、何やってるかかわかると思うけど… まあ、一番は祐依さんに聞くのが早いんじゃない？」

「本人にですかい？」

「別にやましい理由があるわけじゃないし、いいじゃない。それぐらい。祐依さんは公私をわきまえてるから、状況によっては厳しいけど、普段は本当に頼りになるから。放課後にでも聞いてみたら？」

「わかりました… けど、この四人って確か、部屋に結界が張ってあったような…」

「それって、完璧に黒じゃないっすか!? いや、確かに寮の中で結界が張ってある部屋があったっすね。兄貴！そこが奴らの根拠じゃないっすか？」

「でも、カモ君。学園長先生に春休みにだけど、その部屋の結界は気にするなって、言われたんだけど。確か、親の贈り物って」

「贈り物つすか？」

「うん。祐依さんのご両親が確か、大きな会社に勤めてるから、防犯のために結界を張る置物を贈ったって」

「兄貴、その会社ってどこかわかります？」

「え〜と…」

「祐依さんちは白き月よ。あのデツカイ複合企業よ」

「マジつすか！？ 姐さん！？ 仲間にできれば、怖いもんなしですぜい！」

「どういことなの？カモ君」

「兄貴知らないんすか？ 旧世界、魔法世界両方でもトップクラスの大企業つすよ。噂だと旧世界の魔法関係の品は違法品とかには関わってないつすけど、市販されて流通している品は全て関与しているつす話つすよ」

「ええっ！？ そうなのカモ君？」

「そうつす。とりあえず、それは置いときましょう。今はその吸血鬼対策つすよ」

「そうだね… でも、どうしよう」

「エヴァちゃんは今は何もできないって、朝言ってたから、今のうちはどうにかしなくちゃいけないわよね」

「そうですね… あ、もうすぐお昼終わっちゃいますから、明日菜さん、悪いんですけど、エヴァジエリンさんの様子を見ておいてもらえますか？」

「それぐらいならいいわよ。あんたらはどうするか考えときなさいよ。ついでに木乃香に情報誌を聞いとくわね」

「お願いします」

59話（後書き）

原作よりも、ネギたちは若干落ち着いています。

物事に落ち着いて当たれと言っ新田学年主任の教育のおかげです！

… 一般人のおかげ？

非常識なのは変わりありませんが…

若干、祐依たちをあてにしているふしがありますが…

お便りまっています。

60話(前書き)

この物語では、金曜日です。明日は休日です。

60話

sideネギ

夜に寮に戻って、木乃香さんに空を飛部の特集を見せてもらった。

一部を持って、食堂で読んでいる。

「へえ〜。すごいんですね〜。けど、どうして空を飛部は非公式同好会なんですか？」

「それはなく、部長の祐依さんの意向でな、・・・(省略、41話参照。by作者)てな訳なんよ」

「そうなんですか。麻帆良最大の団体なんですよね？」

「そうよ。部活に入っている人はほぼ全員が入っているわよ。ただ、唯一、絶対のルールは人の夢を笑わない。人の夢、目標をバカにする人は絶対に何らかの制裁があるらしいのよ。これはあくまで噂なんだけどね」

「そうなんですか…」

木乃香さんが持っているのを見せてもらうと、中には、祐依さんの特集があった。

(朝倉の記事ではありません。高等部の生徒が書いたものです。by作者)

「この記事って、本当なんですか？」

「ああ、それは本当よ。クラスみんなで応援に行ってたから。あと、新聞部が相手に取材もしてたし」

その記事は、祐依さんが空を飛部のスケッチで参加したソフト部繋がりで高等部のソフト部のエースとの三打席勝負の記事が載っていた。

「高校生相手に打ったんですか」

「そうよ。一打席目は初球の様子見の球を引っ張って、セカンド真正面のライナーで、アウト。二打席目は、ソフト部も警戒して、変化球を軸に緩急で攻められて、打ちとられてのセンター浅めのフライでアウト。最後の打席は粘って、勝負にきた相手の渾身のストライクを完璧にとらえて、右中間のホームラン。ピッチャーもあれを打たれたらしょうがないって、脱帽してたわよ」

「なんで、祐依さんは部活に入らないんでしょう?」

「ああ、それは、周りの勧誘がすご過ぎたからだよ。その記事のほかに色々記事があるのよ。サッカー部やバスケット部、水泳部、格闘系の部活でも、と言うよりも、殆どの部活の練習を手伝ったり、腕試しとかの相手を務めたりしてるのよ。中でも、男子にまじって参加しても平気なぐらいだからね。まあ、単純なパワー勝負は男性には勝てないけどね」

「それって、すごい才能ですよ?」

「祐依を才能だけで、済ましちゃ駄目だよ」

「あ、朝倉さん」

「そうアル！ 祐依の動きは鍛錬の賜アル！」

「えと、古さん。それはどう意味ですか？」

「そのまんまアル。祐依の動きは一日二日で見に着くものではないアル！ 長年鍛錬を続けてきた動きアル！」

「要するに、祐依殿は、努力を怠らないということでござるよ。当然、才能もあるのござるが、それ以上に努力の結晶のござるよ」

「楓さん」

「祐依は練習に参加するだけじゃなくて、自主練とかもすつこいやつてるんだよ。まあ、動きの中には色々なものに通じるものがあるみたいけど」

「その通りアル！ 祐依はたくさんの方の武術の熟練者アル！ それだけじゃなく、随所に他の武術の要素を取り入れたりするアル！」

「そうなんだよね。祐依なら、麻帆良祭の武術大会に出れば、相当なところまで行くはずだよ。古や長瀬さんたちを凌ぐほどだしね」

「そうなんですか… ところで、祐依さんたちって、います？ タ食の時に見ませんでしたけど…」

「ああ、祐依たちは今日は孤児院に行ってるよ。さやルインさん、今日は長谷川も助っ人で行ってるよ。何でも、今日のシフトの人が急病で病院に運ばれちゃって、一人が付き添いで行っちゃったから、

人不足になって、救援要請がきたみたいだよ」

「え？ 聞いてませんけど」

「あれ？ ネギ先生は知らないの？ あの四人は普段から行いも成績もいいから、学年主任の新田先生に直接許可を貰ってるんだよ。前担任の高畑先生が出張が多かったから、特別に家の関係なら、担任を通さずに直接新田先生のところに連絡をしてるみたいだよ。まあ、今日は夕食のちよつと前に連絡があつて、ネギ先生に連絡が回らなかったんじゃない？ 普段はちゃんと、職員室で許可を貰ってるらしいし」

「あ、そう言えば、何度かあつたような気がします」

三学期の終わりごろに何度か、そんな話があつたような…

「あつたようになって、先生、ちゃんと仕事できてる？」

「だ、大丈夫です！」

新田先生に怒られたことを生徒に言われちゃった。

まだ、しっかりできてないのかな…

部屋に戻って、カモ君と明日菜さんと作戦会議の続き。

「それで、どうしようっ」

「…その祐依っていう奴の孤児院の場所って、わかります？」

「えと」

「確か、麻帆良を出て、バスと徒歩で十数分っていう所らしいわよ」

「姐さんは行ったことあるんですか？」

「いや、私はないけど、那波さんが、何回かボランティアを兼ねて行ったことがあるみたいでね、その時に話を聞いたのよ」

「そりゃ、今がチャンスっすね」

「え？」

「そいつらは戻ってくるのは速くても日曜の夕方。つうことは、不確定の敵を考えずに、闇の福音とその従者に集中できるってことですよ。あつしの調べによると、明日は、そいつらが所属する囲碁部が昼から活動しているらしいっすから、その帰りにチャンスがあれば各個撃破すればいいんすよ」

side 祐依

「ふん。そう来るか」

「どうしたんです？」

「ん？ 明日の予定の確認をしたのよ」

ゼロにサーチャーを飛ばさせて、ネギ少年たちの様子を監視していたら、明日、茶々丸とエヴァを襲うらしい。

「さよ。ちょっと、出かけてくるわ。そうね… 三十分ぐらいで、戻って来るわ」

「何処に行くんですか？」

「ちょっと、茶々丸に渡すものがあるから、大丈夫だと思うけど、何かあったらルインに言っただけね。私に用がある場合もルインに言っただけね。連絡を取ってくれるはずだから」

「わかりました」

スキマを開いて、エヴァの自宅に。

「茶々丸いる？」

「こんばんは。どうしました？」

「あ、ちょうどよかった。これ渡しとくね。困ったら足元に投げつけてね」

茶々丸に黒い球体を渡す。

「これは一体？」

「ん〜。詳細は秘密。週明けには教えてあげるわ。」

「わかりました」

「茶々丸。誰か来ているのか？」

「やつほ〜。茶々丸にちよつと話があつてね」

二階からエヴァが降りてきた。

「何の話だ？」

「ん？ エヴァが飲んでるトマトジュースに入れたものに気づかれ
たかどうか」

「！ 何を入れた！？」

「秘密」

まあ、嘘なんだけどね。

「茶々丸に聞いても無駄だよ。犯人は私だ！」

エヴァの注意を私に向けさせて、茶々丸への意識を逸らす。

そう言つて、スキマを開いて逃走をはかる。

エヴァが何かを言っているが無視してスキマに飛び込む。

60話(後書き)

次回は、22日に投稿予定です。

お便り待っています。

61話

side 祐依

昨夜の少年たちの会話通り、エヴァと茶々丸が部活に行った。
まあ、これは私たちも事前に確認済み。

帰りにエヴァが学園長に呼び出しをされた。

…休日に生徒の呼び出しって、あの学園長！
タヌキ

少年の作戦を手助けするつもり！

エヴァの従者である茶々丸を一人にして、襲わさせるつもり！

普段の茶々丸なら、いつも通り猫にエサをあげに、教会の林に行くはず…

その人目が少ないところでやらせる気か！？

茶々丸にはもしものための物を渡してあるし、大丈夫のはずだけど、絶対なんてありえない。

…茶々丸、人助け好きだね…

移動中に女の子の木に引つ掛かった風船をとってあげたり、歩道橋を渡ろうとしているお婆さんを手伝ったり、男の子たちに好かれたり、川で流されている猫を助けたり…

あ、少年たちが關心してる。
そのまま、やめてくれないかな？

ちっ！ オコジヨが何か吹き込んで、やる気を取り戻しやがった。

…あのオコジヨから殺るか？

別にいなくても私は困らないし。

茶々丸は猫のエサをあげるために、先程助けた猫を連れて、いつもの場所に歩いていく。
人目がやっぱりなくなつたな。

この辺りにいるのは、茶々丸と少年と神楽坂とオコジヨと離れたところで、いつも通り姿を隠している私ぐらいか…

…いや、学園長が遠視してるな。

今はいいけど、もしもの時に助けに入る時には、仮面をつけて、顔を隠さなきゃな…

大分前に作った、あの禍々しい仮面を… いや、あれは、危ないか

… いろんな意味で…

(動くときやショック的な意味などで…)

…！

そうだ！ 茶々丸の『ともだち』と言う意味で、あのマスクをつけてみようかな。

(某20世紀のともだちが被っていた、あの目の中に人差し指を伸ばした手に瞳が描かれたマスク)
髪が長くて入りきらないから、バツサリと切る。
まあ、肉体の操作で、調節可能だから未練はないな。
ついでにスーツを着る。

さあ、準備？万端。

と、一人で、自己満足をしていると、

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル！光の精霊11柱集い来たりて『魔法の射手・連弾・光の11矢』！」

「すいませんマスター。もし私が動かなくなったら、猫のイサを…」

…！ 何で、昨日渡したのを使わないのよ！

(説明をしていなかったので、エヴァにとられました by 作者)

「？リンク・十六夜咲夜・ロード？奇術「エターナルミーク」！」

咲夜の時間を操る程度の能力で、茶々丸の前に姿を現し、そのまま、スperlカードを発動。

ナイフを前方に目茶苦茶に投擲。

ただし、神楽坂には致命傷にならないように、ほんの少しだけ、注意してヤケクソ気味に連射。

少年の魔法の射手に命中したナイフは壊されるが、別に錬金術で以前暇つぶしに作った粗悪品なので、特に気にすることはない。

と言っても、流石に、骨を切断するのは無理だが、人肉程度なら割と簡単に切れるため、殺すのに使う分には申し分ない一品である。

全ての魔法の射手を防いで、茶々丸を守りきった。

神楽坂は無傷。だが、足元や周りにナイフが刺さっている。

少年は服が所々切れているが、残念なことに無傷。

オコジヨは、少年の後ろにいたので、こちらも無傷。

結局、誰も怪我はしていない。

被害はまあ、少年の服程度か。

「（茶々丸。私の名前は出さないで。『ともだち』もしくは『十六夜ユウ』とでも呼んで）」

念のために、茶々丸に釘をさしておく。

「やい、てめえ、一体何者だ！」

「さあ？ 一体誰でしょうね。私は茶々丸の『ともだち』よ」

‘倉庫’からナイフを数本取り出して、指で挟んで、いつでも投擲できるようにする。

「茶々丸が殺されないように駆けつけたのよ。さて、弁明を聞かせてもらいましょうか」

「弁明って、一体何よ！」

「あら、そんなこともわからないの？ 茶々丸を殺そうとしたくせに」

「てめえには関係ないだ」

・ヒュッ

オコジヨ、スレスレにナイフの一本を投擲する。

「おわっ!？」

「さっき言ったでしょ？ 茶々丸のともだちって。さて、もう一度聞いわよ。茶々丸を殺そうとした弁明はないのね？」

「何言つてやがる。あの嬢ちゃんはロボットだろ？ なら、死ぬこと」

・ヒュヒュッ

数本のナイフを顔面のスレスレに投擲する。

「ロボットなら死なない？ そうね。身体とかなら替えの部品に取り換えれば見た目は元通りになるわよね。でも、メモリーを破壊されたら？ 失われたデータは？」

「!」

少年はハッと、気づいたような顔をしたが、遅い。

「さ、殺そうとしたんだから、当然、殺される覚悟は出来てるわよね？」

ナイフは、倉庫にしまふ。

たばこをくわえ、スーツを着て、ズボンのポケットに手を突っ込んだオッサン。

もとい、老け顔の元担任の高畑・T・タカミチが現れた。

「それが、人にものを頼む態度？ 出直してこい」

おそろくさっきのはT3高畑の居合拳だろう。
人を殺せる技術だ。

まあ、途中からやって来て薬味たちと茶々丸の行動を見ていたのを知っていたから、簡単に避けることが出来たのだが、何もなければ、十分人を殺せるものだ。

「教師が生徒を殺そうとしているのを黙認しているようなクス奴らに話すことはないけー」

ードオンツ！

ーベキベキ！

私がいた背後にあった木が折れる。

「全く、それが無抵抗の人にするのですか？」

T3改め、クス高畑の後方から、声をかける。

「やっぱり君は危険だね。さっきのネギ君の魔法を防ぐ時にもそうだったけど、気や魔力を使わずに一瞬で移動する。君みたいな危険な人を放置しておけないね」

「ふう… なら、私は今度は自分の身を守るために自衛をしなくちゃね」

再び左手にナイフを持つ。

でも、まだこの場に神楽坂とオコジョがいるのに、戦闘をふっかけてくるなんて…バカ？

とりあえず、クズの居合拳を避けながら、神楽坂たちから距離をとる。

私の意図に気づいているのかどうか知らないけど、クズはドンドン攻撃してくる。

…いや、私を遠ざけようとしているのかな？

だが、クズの居合拳のせいで、木々が折られていく。

ああ、自然が…

そう言えば、紅き翼の初代バカこと、ナギ・スプリングフィールドも周りの被害を全く考えないで、広域殲滅魔法を放ってたしな。そう言えば、あれって、絶対、紅き翼の味方も巻き添えにしたよな。

そんなことを考えていたら、周りの様子が一瞬変化する。

結界に閉じ込められたか…

クズの他に、多数の人の気配がする。

隠れているようだが、ヘタクソすぎる。

隠れるだけなら、孤児院の子供たちがかくれんぼをしている時の子供たちの方が、よっぽど上手に隠れる。

月に何度か、私が鬼をやる、私主催のかくれんぼ大会をやっていたら、何度かやっている内に一部の子供たちが、姿を隠すだけでなく、気配まで周囲に紛れ込ませ、巧妙に隠れるようになってしまった子供たちに比べると、バレバレすぎる。

…いや、これは、敵意を持っているから、わかりやすいのかな？

ん？ 魔力が集まっている…

数人で一斉に魔法で攻撃するつもりなのかな？

先程よりもクズの攻撃の激しさが増してきている。

まるで、注意を自分に向けさせるように…

なので、周りにナイフをランダムに投擲する。

居合拳を避けながらなので、投げ損なっているように見えるように演技をしながら。

今回のナイフには、‘倉庫’から取り出したものだけでなく、投影で作ったものも混じっている。

ある程度、ばら撒き終わつたし、隠れている奴らの魔力も高まっているから、そろそろ、攻撃してくるだろうから、

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想！」

投影で、作ったナイフを全て爆発させる。
爆発させる直前に時間を止めて、普通のナイフは回収しておく。

その爆発のせいか、集まっていた魔力が霧散するのを確認した後、爆発によって、巻き起こった粉塵に紛れて、スキマを開き、逃走。

s i d e o t h e r

「くっ！ 何だ今のは!？」

「あいつがいないぞ!？」

「何!？」

粉塵が収まるころには、既に逃走済みだった。

「ナイフが爆発した!？」

「火薬でも仕込んでいたのか？」

「ナイフに細工がしてあったのか？」

「わからない、ナイフの数と爆発が合わないから、爆発したのは全部じゃないと思うが…」

「ないわね…」

ナイフは回収済みなので、一本も残っていない。

「高畑先生。あいつの正体は？」

「すまないね。悪いけど正確な正体はわからないんだ」

「正確なことは、見当はついてるんですか？」

「大体わね… 確認が取れ次第、集会が開かれると思うから」

「わかりました」

61話（後書き）

まさかの自称正義の魔法使いとの戦闘モドキが起こってしまいました。

・・・どうして、こっぴなった？

偽名の苗字は十六夜咲夜の能力を使っているので、それとナイフを武器に使っているの。

名前は、ユウは友達の友を片仮名表記にしたので、特に深く考えずに書いてしまったものです。この偽名はそんなに使わないと思います。

お便り待ってます。

62話

side 祐依

茶々丸襲撃事件から、二日後。

-ピンポンパンポン-

『二年A組 相沢祐依さん。相沢祐依さん。至急学園長室まで。』

いつものメンバーで登校すると、狙ったかのようなタイミングで呼び出しを受けた。

「今度は何をやったんだ？」

「さあ？ 空を飛部関係の揉め事は大分前に解決したし、銀行強盗を捕まえたのは先月だし、課題とかはちゃんと提出してるし、あ、提出物だったら職員室か…」

「今、変なの混じりませんでしたか〜！」

「ん？ さよ。何かあった？」

「いえ、ですから、銀-」

「あ、ここにいたのか、祐依君。ちょっと学園長室まで、来てもらえるかい？」

さよの言葉を遮り、クズこと、高畑登場。

「わかりました。ごめんね、ちょっと行って来るわ」

in 学園長室。

「ところで、何で呼び出されたのでしょうか？」

「二日前の夕方、君は何をしていたんじゃ？」

部屋の中には学園長と高畑がいて、二人とも険しい表情をしている。

「え〜と、土曜日ですよね？ その日は… 昼過ぎから孤児院の近所にある大きな公園で、缶けり大会をやっていましたね。うちの孤児院の子たちだけじゃなくて、近所の子供たちも一緒に遊んでましたよ」

「それは、何時ぐらいまでじゃ？」

「え〜と… 時計を見たのが家に帰ってからでしたので、正確な時間はわかりませんが、近所の子供の親御さんたちがうちの孤児院の庭を使って、打ち上げを兼ねて、カレーパーティーを開いて、うちの孤児院の子たちや近所の子供たちが仲良くなるためや、親御さんたちの近所付き合いをよくするためにカレーパーティーの後にレクリエーション等をやっていたので、その日は昼から夜までずっと子

供たちと遊んでいましたよ」

「ふむう…それが本当じゃと証明出来るのかのう？」

「缶けりの時は私やルインが率先して鬼を引き受けていたので、子供たちやその保護者、それとルインやさよ、千雨、うちのスタッフたちぐらいの証言しかないですね…あ、保護者の中には写真を撮っている人もいたので、もしかしたら、写っているかもしれません。それは確証できません。ところで、私は何を疑われているのですか？」

「ふおっ？ えくと…それはじゃな…」

「その日にちよつとしたトラブルがあつてね、その現場に君らしき人物が居たつていう噂があつてね、もしその現場にいたなら、話を聞こうと思つてね」

「最初っから、私の事疑つてましたよね？」

「いや、それはすまないね。問題が面倒だったから、つい、先走り過ぎてしまったんだ」

いけしゃあしゃあと…

まあ、私も身代わりを置いての行動だったし…

孤児院とかの方には裏関係は月の関係者しかいないし、ここの魔法使いが真相を知る方法はないしね。

ちゃんと、情報漏洩を防ぐ対策もしてあるし。

「それで、もう戻ってもいいですか？」

「ああ。わざわざすまなかつたね」

退出許可が出たので、さっさとクズどもの部屋から出て行く。

side other

その日の放課後の学園長室。

「学園長。祐依君の証言の裏が取れました。学園の外に現在住んでいる引退した裏の関係者のお孫さんが祐依君の言う、缶けり大会やレクリエーションに参加し、両親が仕事だったため、保護者としてついて行って、その際に祐依君を目撃したそうです」

「その際に魔法とかは？」

「いえ、彼は索敵や後方支援に特化した人物で、そう言ったものは見受けられなかったと」

「ふむう…では、あの十六夜ユウと名乗る人物とは別人なののかのう？」

「それは、わかりません。茶々丸君の友達と言っていたので、エヴァにそれとなく尋ねたんですが、エヴァは知らないようでしたので。もしかしたら、以前の世界樹前広場で使われたあの身代わりの可能性がありますが…」

「ほう… もしかしたら、こういうことが続くやもしれん。監視の目を強化… いや、これ以上は…」

学園長は祐依のバックにある白き月の機嫌を損ねるのを警戒している。

以前、祐依たちが不在の時に、寮の部屋に張られている結界を解析しようとしたところ、結界の一部を壊し、警告文が届けられたのである。

その際は魔法関係の裏の商品の値段が一月の間、3割ほど値上げをされたのである。

魔法使い曰く、旧世界の魔法に関するものは全て白き月が取り扱っているため、値上げは直に響くのである。

今は、戻してもらっているが…
機嫌は既に一度損ねている。

不用意な行動は自分たちの首を絞めかねない。

「仕方がない。現在はネギ君とエヴァンジェリンと茶々丸君を最優先で監視し、不測の事態に備えよ」

「わかりました。それしか、ないでしょうかね。十六夜ユウは茶々丸君の時にしか目撃がないのですから、エヴァは知らない。それなら、茶々丸君に関係する人物でしょう」

side 祐依

うん： 以前にやった経済攻撃が思わぬ影響を生んだわね。

茶々丸の情報によると、風邪をひき休んでいるエヴァの家を訪れ、薬味が果たし状を渡して、そうならしい。

他に、エヴァが寝ている間に勝手に人の夢を魔法で見ると言う最低の事をしたらしい。

エヴァが今度薬味と戦うのは今週の金曜の夜。大停電の日か…
その日に満月が重なるなんて…

……私的な理由で学校をサボるなよ

教師がおまえ無断で休むと、しわ寄せが新田学年主任にいくんだから……

因みに、薬味は新田学年主任に呼び出しを受けて、ありがたいおはなし説教を2時間程受けたらしい。

これはNEUEノイエの夜間の部に仕事を終え、軽く飲みに来た本人に聞いた。

それを聞いた私はシロウさんに頼んで一杯と料理をサービスした。因みに今回は私が担当し、高評価を頂いた。

……お疲れ様です。

62話(後書き)

お待ちしております。

63話

side 祐依

そんなこんなで、エヴァの暇潰しの最終日。

(あえて、決闘とは言わない)

「エヴァ。今日は大丈夫？」

「ふん。あんなやつに負けるはずがないだろう」

エヴァは胸を張りながら、そう言う。が、

「でも、最近、エヴァって、千雨やさよに模擬戦で負けそうになる
ことが増えてるよね？ 高々600年ぐらいのアドバンテージなん
で、簡単にひっくり返されちゃってるよね？」

「ぐうっ！」

心当たりがあるのか、言葉を詰まらせる。

「よし、今度はエヴァと薬味の暇つぶしの戯れの内容で賭けをしよ
う！」

「どっこういうことだ？」

「ん？ 内容は簡単。薬味、若しくはエヴァがどうなるかを予想す
る。結果だけを当てるより、過程も当てれば尚高得点。優勝者には
豪華プレゼント」

エヴァには参加賞？として、何かを贈ることとして、いつものメンバーに説明&答案を聞きに行く。

その答案の中で、茶々丸と千雨が以外にも接戦と予想した。曰く、相手を舐めて、本気を出さないと予想したためである。

当日。

世界樹前の広場から始まった。

…おい従者はどうした？

薬味は逃げの一手で、麻帆良大橋を目指していた。薬味とオコジヨはエヴァの封印が解かれたのを知らないから、もしもの為に逃げられるようにするためだろう。

案の定、エヴァは本気を出さず、追い詰めるように魔法の射手をメインに攻撃していた。

茶々丸は進路を予想し、先回りをしている。

…因みに、今、私はともだちのマスクをつけ、スーツを着ている。十六夜ユウの姿である。

茶々丸が先回りをして隠れている麻帆良大橋までたどり着いた。今は、橋を支えている柱の一番上で見物している。

因みに、今はただの認識阻害魔法を使っている。
注意深くすれば、発見できるだろうが、今は麻帆良の魔法使いはエヴァたちの勝負か警備に一杯なので、気づく者はいないだろう。
勝負が終わるまでは……

…ん？ あそこの陣は……

隠されている陣はおそらく捕縛系のもの…かな？

あ、エヴァが陣に捕まった。

少年（一応、策を使っているので多少見直したので、再び少年と呼ぶことに）は喜んでいる。

…いや、さつさと攻撃しなさいよ！
捕まえただけで終わる筈ないでしょ！

少年は何を根拠にしているのかわからないが、勝ったつもりでいる。

そこへ、茶々丸の登場。

あっさりと、陣を破壊し、エヴァを救出。

逆に少年を捕縛。

あっけなかったな。

エヴァがせっかく以前に従者について教えてたのに、従者なしで、各上の相手に勝てる訳なんてないのに。まして、未熟にも劣る少年がね。

…ん？ あれは…

神楽坂とその肩に乗ったオコジヨが走ってくる。従者の方が、しっかりしている？ いや、オコジヨの入れ知恵かな？

オコジヨが閃光を発した！？

（祐依には丁度、神楽坂の頭部で死角に入り、見えなかった。by 作者）

つて、また、飛び蹴り！？

エヴァに飛び蹴りをかまして、距離を開けさせる。

閃光で視覚を奪った後、一緒に橋の陰に隠れる。

…そこで、仮契約を更新するのか…

いや、ちゃんと戦闘になる前にしてきなさいよ（笑）

さて、少年が神楽坂と正式な仮契約（正式なのに仮って、変な感じがするわね…）を終え、エヴァたちの前に姿を現す。

…戦力で劣ってるのに何で、正面から出て行くの！？

まあ、いいや。

「（エヴァ）。このままだと、多分、少年が有利なところで邪魔が入るかもしれないよ）」

エヴァに念話で連絡を取る。

「（どういうことだ？ この戦いに他者の介入は無いはずだろうか？）
」

「（そんな約束、自称正義が守ると思う？ 散々私たちを敵視しているやつらなのに。 最近の麻帆良学園が購入した裏のブツから考えると、おそらく、エヴァの一時的な弱体化を狙ってるわよ）
」

「（何故そんなことがわかる？）
」

「（エヴァ。 忘れたの？ 私の手札のことを）
」

「（マスター。 祐依さんは白き月のトップです。 その白き月は旧世界の裏の魔法関係の品の流れを掌握しています。 闇ルートは手を出していないので別ですが、詳細の情報は握っています）
」

茶々丸が念話に参加。

「（そう言えばそうだったな…）
」

「（そ その通り。 最近の麻帆良に入ったブツから推測すると、エヴァが初代^{ナキ}バカにかけられた登校地獄を利用した学園結界に魔力を送っていた時の呪いのパスを一時的に再構築して、エヴァの魔力を大幅に削るうとしている。 と見た）
」

「（ならば、それ以上の力でねじ伏せればいいな）
」

「（ちょっと、文がおかしいけど、ようするにちゃっっちゃと終わらせば問題ないわよ）
」

「（ふ。見ておれ。最強の一撃で葬ってくれ）」

「（エヴァ。二代目バカを殺っちゃダメよ。問題が起きるから。最悪、そのまま、麻帆良と・・・いえ、連合と戦争になるわよ。そうになったら、平穩がなくなるわよ）」

連合は広告塔を欲しがっているからね。
自分たちに従順な傀儡がね・・・

「（ぐ、せつかく、平穩を満喫しているのに、また騒がしくなるのも面倒だな…麻帆良を出れば、また懸賞首に逆戻りになるやもしれんしな・・・）」

まあ、白き月が庇えば、手は簡単に出せないだろうけどね。

「（多分、魔力の流れからして、ジジイの細工はあと数分で準備が出来るはずよ。やるならさっさとした方がいいわよ）」

「（ふつ。ならば、その条件下で私の強さを見せてやる）」

エヴァが詠唱に入る。

その間、茶々丸が二人の相手をして、時間を稼ぐ。

…私との組手が思わぬ成果を出してるわね・・・
度々別荘で茶々丸と格闘オンリーの模擬戦をやっている、その際に学んだ技術を活かして、二人を相手している。

「ゲリドゥス・カプルス
凍てつく氷棺」

茶々丸が少年を蹴り飛ばし、神楽坂から距離をとらせた直後、エヴァが少年を氷漬けにする。

「ネギ！？ きゃあ！」

神楽坂が少年の元へ駆け寄ろうとしたところを茶々丸に組み伏せられる。

その後、氷漬けにされた少年をエヴァが助け？（解凍して）
こうしてエヴァが勝利し、吸血鬼事件は幕を閉じた。

・・・あれ？ 特に何も解決してないよね？
いや、事件でもないからいいのかな？
全部仕組みられたことだからいいのかな？

ま、いいか。
あとは・・・

63話(後書き)

吸血鬼事件解決？

お便り待っています。

64話

side 祐依

エヴァによる？吸血鬼事件が学園側の介入の寸前に終了し、一件落着？

そちらは無事終わったようだが・・・

私は麻帆良大橋から離れ、森の割と奥深く、麻帆良の境界のすぐ側に移動している。

「武装を解除して、大人しく投降しろ。この戦力差だ。抵抗は無駄だ」

度重なる、いつもの出来事。

学園の自称正義の魔法使いの連中に囲まれている。

途中から気づいていたが、放置。

騒ぎを起こして、エヴァたちに影響を与えると賭けに影響が出るかもしれないので、別に大した障害にもならないので、見て見ぬフリをしていたら、自称正義の魔法使いの皆さんは勘違いをしているのか、自分たちが有利だと思っ込んでいます。

「いや、自分たちが『正義』で『正義は敗けない』と洗脳？されている奴らだからかな？」

自分たちが絶対に勝つと信じているのだろう。

確かに、今まで以上に敵さんは数だけは揃えてきたようだ。

…ん？ 高畑の気配は遠いな…

戦闘中？ 関西の呪術師と戦っているのかな？

他にも、キャンドル？さんや葛餅？さんとか戦闘力がこの連中の中では高めのやつらはここにいないな…

関西の連中と戦闘中…かな？

あ、弐集院と瀬流彦はこちらに向かって来ている。

戦闘を終えたのかな？

停電が終わって結界が張り直されたので、戦力を不審者に差し向けているようだ。

高畑と学園長は私「ミモザ・フルール」十六夜ユウと疑っているよ
うだが、他の面子はそんなこと知らない。

十六夜ユウを新たな敵と認識している。

まあ、強力な認識障害の魔法の効力を宿した黒き月のペンダントをもってるし、無理もないか。

でも、何であの二人は疑っているんだろう？

「ふう…そんな要求を受け入れるとも思っているの？」

「ならば、実力行使だ。貴様を無力化した後、連行する」

…何で、そんなに自信満々に言えるのだろう？

茶々丸襲撃事件の時に、敵対した面子はいるが、その時はまともに戦った覚えはないのに…

・・・!

あゝ、あれが防戦一方だったと思っっているのか!

この世界に来てから、魔法世界で数万人相手に無力化戦（戦闘不能にするだけで、殺しは一切ない。また、再起不能もない）をやったこともあるし、他の世界ではもっとヤバいのもあったんだけどなま、そんなこと知ってるわけないわよね
知ってたら逆に怖いわね・・・

さて、どうするか・・・
ルインはいない。

ゼロの魔法で非殺傷の魔法で殲滅？をするかな
でも、数がめんどいな
溜めてる間に攻撃されるだろうしな

「よし」

「覚悟が決まったか」

毎度の如く、逃げよう。

こんなのに時間をとられるなんて、もったいないしね。

ついでに道具の実験台になってもらおう。

それにしても、何で攻撃してこないのかしら？

先制攻撃を仕掛けてこれば、大抵楽に済ませられるのに。

ま、私に有利になってるから、いいか。

むしろありがたい。

自称正義の皆さん。
ありがとう

と、ふざけるのも大概にして、高畑^{クス}はまだ来ていないが、散っていた魔法先生や魔法生徒がさらに集まって来たので、前回に続いて、ナイフを手に。
今回はナイフにも細工を施している。

本物に投影品が混じっているだけでなく、ナイフとナイフに鋼糸を結んでいる。

この鋼糸は私特製の一品で、余程の事が無ければ切断は出来ないが、皮膚などは割かし簡単に切れる。

それらを投擲するが、

「「やあっ!」「」

桜咲や葛餅?さんが刀で弾き落として、鋼糸のトラップがセットできない・・・(悲)

さらに、地面に落ちたり、木などに刺さっているナイフが片っ端から魔法の射手等により壊される。

・・・高かったのに(泣)

おそらく、前回、逃亡の際に投影したナイフを爆破したのを覚えていて、爆破される前に壊そうという魂胆なのかな？

仕方がない…

「作戦変更」

「気をつける！ 何かを狙っているぞ！」

呟いたら、一人の魔法先生が周りに警戒を促す。

全員が警戒のためか、私を凝視し、行動を見逃さないようにしている。

・カラン

スーツの袖から、缶が落ちる。

「何だ？」

魔法生徒の一人が呟いた途端、

・カツ！

缶が閃光を発する。

今回しようしたのは、以前に桜咲と龍宮に絡まれた際に使用した、スタングレネード改である。

効果が弱くなったが、その分即効性と効果範囲を強化した。

「うわ！ 目が！？」

「きゃあ、何も見えない!？」

私を凝視していたために、大半の奴らの視界を奪うことができた。目が見えない為、でたために魔法を放つことはないだろう。闇雲に放てば、フレンドリーファイアになるしね。

だが、これで全員を戦闘不能に出来たわけではない。咄嗟に防いだ者・効果範囲外にいた者。そういつた奴らを優先的に潰していく。

視界を潰した奴らの合間をぬって、接近し、一撃でのしていく。攻撃されそうになったら、目が見えない奴らがいる人垣の中に逃げる。

「くそ！ 汚いぞ！」

奴ら何か言っているが、当然の如く無視。アウエーだから、気にすることはない。戦場にいるのだから、死ぬ覚悟があるものとして、動く。

その中でも、一番大きな人垣の中に飛び込み、今度は煙玉を大量にばら撒く。

その煙に紛れて、

「?リンク・八雲紫・ロード？」

スキマを開いて、逃走。

その際にもだちのマスクの贗作(ニセモノ)を人垣の中に置いておく。紛れ込んだと少しでも思わせればもうけもの程度の期待を込めて、

逃走を図る。

s i d e o t h e r

「くっ、奴め、何処へ行つた!？」

「ここに、マスクがあるぞ！」

「何!？」

「紛れ込んだのか!？」

「くそ！ 全員動くな！ 近くの人と確認し合え、確認を急げ！」

視覚が戻った頃には十六夜の姿はなく、混乱する魔法使いが残された。(笑)

64話(後書き)

お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0143t/>

キセキの錬金術師 in ネギま

2011年11月18日05時36分発行